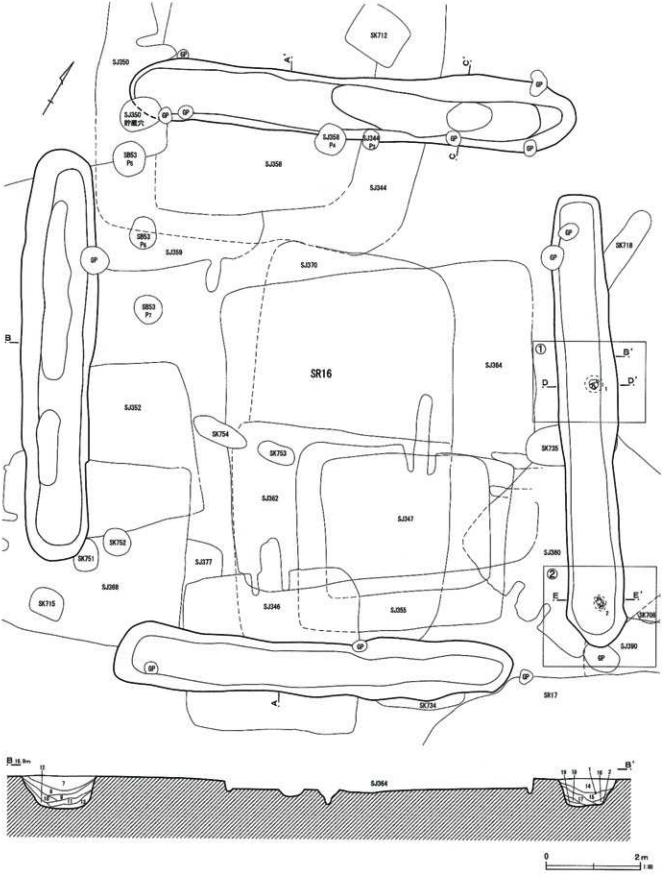
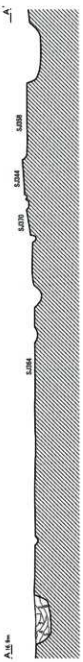
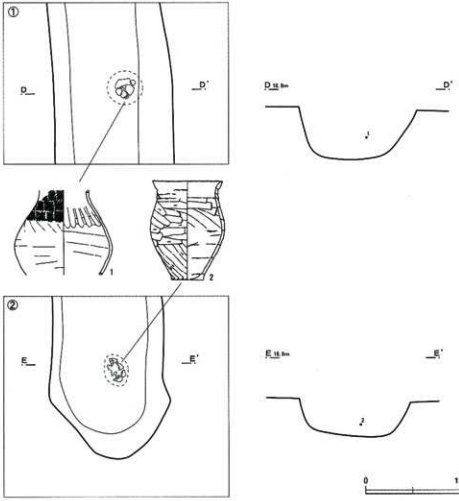


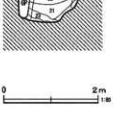
第33図　第16号方形周溝墓（1）



第16号方形周溝墓

1	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ5～20mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
2	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
3	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ1～5mm）（主流はφ1～2mm）中～多量　炭化物ブロック（20mm角）微量
4	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ3mm）多量
5	暗褐灰色土	10YR4/1	暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
6	灰色土	10YR5/1	灰色の粘性ある土主体　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）・暗茶褐色土少量　層上部に帯状に含む
7	黒褐色土	10YR2/2	暗茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ1mm）少量　炭化物ブロック（φ5mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
8	褐灰色土	10YR4/1	茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子(φ1～2mm）含む　炭化物(φ2mm）少量
9	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土粒子(φ1～2mm）少～中量　炭化物粒子(φ3mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
10	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土（9層と同じ）　黄褐色土粒子（φ3mm）多量　炭化物粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
11	褐灰色土	10YR4/1	9層と同じ土でやや粘性のあるもの主体　青灰色土ブロック(φ3～15mm）含む　炭化物粒子（φ3mm）微量　しまり・粘性ややあり
12	灰黄褐色土	2.5Y4/2	黄褐色ブロック主体　灰黄褐色でしまりあり　粘性のある土含む　暗灰色土少量（特に底部付近）
13	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色に近い暗灰色の粘性のある土主体　青灰色土ブロック（φ10mm）少量　底部に帯状に混入　しまり・粘性あり
14	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子(φ1mm）少量　炭化物ブロック（φ5mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
15	褐灰色土	10YR4/1	茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ1～2mm）斑に含む（15層よりやや多め）に含む　しまりあり　粘性ややあり
16	褐灰色土	10YR5/1	黄褐灰色のしまりある土主体　やや粘性のある灰色土微量　しまりあり　粘性ややあり
17	黒褐色土	10YR2/2	暗茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ1～5mm）中～多量　しまりあり　粘性ややあり
18	灰色土	10YR3/1	灰色の粘性のある土主体　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）少量　しまりややあり　粘性あり
19	灰色土	10YR3/1	黄褐色土ブロック(φ5～20mm以上）多量　灰色のやや粘性のあるしまりある土少量　しまりあり　粘性ややあり
20	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子(φ1mm）少量　炭化物ブロック（φ5mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
21	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ1～2mm）含む
22	褐灰色土	10YR5/1	黄灰褐色のしまり土主体　黄褐色土粒子（φ1～5mm）（主流はφ1～2mm)中～多量　しまりあり　粘性ややあり
23	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ20mm）少量　黄褐色土粒子(φ2mm）含む（マウンド盛土からの流れ込み土）
24	灰色土	10YR3/1	灰色の粘性のある土主体　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）少量　しまりややあり　粘性あり





第34図　第16号方形周溝墓（2）

第16号方形周溝墓（第33・34図）

M～O－33・34グリッドにかけて検出された。方形周溝墓が検出された地点は、古墳時代後期の住居跡などが激しく重複していたため、遺構の残存があまり良くなかった。重複していた遺構は、第344・346・347・350・352・355・358・359・360・362・364・368・370・377・390号住居跡、第53号掘立柱建物跡、第729号溝跡などであった。新旧関係は、重複する全ての遺構の中で、本遺構が一番古かった。調査は、各周溝に対してＳＤの通し番号を付して行った。本周溝墓の調査時の各周溝の旧番号は、東溝がＳＤ770、北溝がＳＤ771、西溝がＳＤ772、南溝がＳＤ773である。

本周溝墓に隣接して２基の方形周溝墓が構築されていた。西には第15号方形周溝墓、南西には第17号方形周溝墓が位置し、それらの方形周溝墓との重複は認められなかった。３基の方形周溝墓の構築順は、出土土器などから第15号方形周溝墓→第16号方形周溝墓→第17号方形周溝墓と考えられる。第17号方形周溝墓は、本周溝墓の南溝を意識して避けているために、コーナー部が僅かに歪んだ形状をしていた。

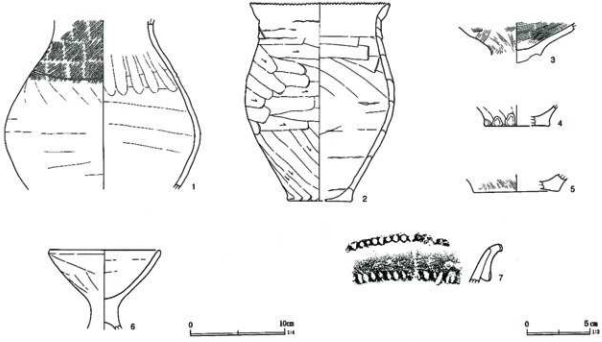
規模は、南北13.38m、東西12.71mであった。平面形態は正方形で、四隅が切れるタイプの周溝墓であった。長軸方向は、N－20°－Wであった。西側に位置するやや小型の第15号方形周溝墓とは、四隅が切れる同じ形態をすることや、ほぼ長軸方向が一致することから、ほぼ同時期で、一つの群を構成していたものと考えられる。

周溝の規模は、東溝が長さ9.54m、幅1.01～1.30m、深さが0.25～0.58mであった。４本の周溝の中では、一番長く、深さがあるものであった。遺物は、周溝の中央部から壺、南端部からは吉ヶ谷式の甕が出土している。

北溝は、長さ9.50m、幅1.22～1.54m、深さが0.12～0.63mで、東側は土坑状に一段やや深く掘り込まれていた。

西溝は、長さ8.62m、幅1.27～1.63m、深さが0.11～0.71mで、底面には溝状の浅い落ち込みが認められた。

南溝は、長さ8.46m、幅1.00～1.30m、深さが0.22～0.53mで、東溝と比較すると、長辺が直線的ではなく、



第35図　**第16号方形周溝墓出土遺物**

周溝の形状がややいびつであった。

周溝の長さは、東と北溝が約9.5mと長く、西と南溝が8.5m前後で1mほど短い形態をしていた。壁面の立ち上がりは、方台部側が外辺に比べ傾斜がきつくなっていた。底面はほぼ平坦に掘削されていた。周溝の埋没過程を観察した結果、24層などのように方台部側からの流れ込みが確認されたが、さほど多くの量が堆積しておらず、周溝の深度も深くないことから、盛り土があったとしても低いものであったと推測される。

方台部は、南北10.47m、東西9.95mで、南北が僅かに長い正方形であった。方台部上は、古墳時代後期の重複が著しかったため、マウンドや埋葬施設などを検出することはできなかった。

遺物は、後世の遺構に掘削されていたせいか、出土量は多くなかった。

出土遺物は、第35図に示した。1は、東溝から出土した壺胴部片である。頸部より上と底部を欠損する。肩部には単節ＬＲ縄文が3段にわたって施文された後に、1条の細い沈線を巡らせる。調整は、内外面ともにヘラナデである。肩部内面には指頭によるナデが認められる。2は、東溝の南端部から出土した吉ヶ谷式の甕である。外面の輪積み痕は、ほとんど退化しており、縄文も施文されていない。口縁端部には細かい刻み目が施される。底部は薄く作られており、径1cmほどが欠損している。器種が甕ではあるが、出土した遺構の性格から、焼成後に穿孔された可能性も考えられる。内外面ともに煤が付着する。3は、北溝から出土した台付甕の胴部下半である。4は、西溝から出土した、平底の甕底部片である。底部外面に指頭圧痕が認められる。外面は僅かに煤けている。5は、西溝から出土した甕の底部である。6は、西溝から出土した高坏である。内外面ともに赤彩が施される。7は、第368号住居跡より出土したものであるが、本来は本周溝墓に伴うものと考えられる。複合口縁をもつ壺で、両端にやや粗い刻み目が施される。

第17号方形周溝墓（第36・37図）

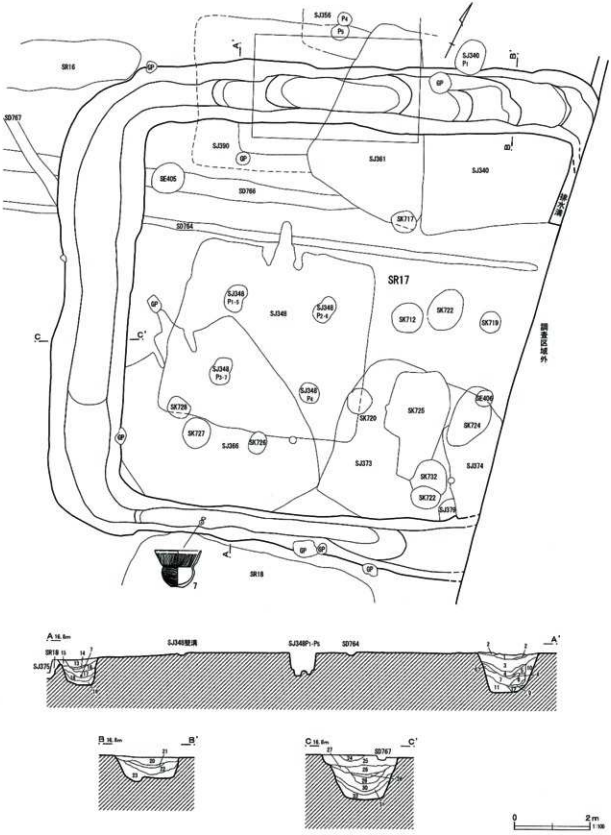
Ｎ－34、Ｏ・Ｐ－34・35グリッドにかけて検出された。東側は調査区域外に延びていたため、全体を調査することができなかった。第340・348・361・366・373・374・379・390号住居跡、第764・766・767号溝跡などと重複が著しかった。新旧関係は、本遺構がそれらの全ての遺構より古かった。調査時の旧番号は、北溝がＳＤ769、西溝がＳＤ787、南溝がＳＤ788である。

第16・18号方形周溝墓と近接しており、第18号方形周溝墓の北溝とは僅かに重複していた。隣接する方形周溝墓の中で、本周溝墓が一番時期の新しいものである。周溝は、先に構築された第16・18号方形周溝墓の周溝を避けて、幅を狭くし、北西コーナー部のようにやや歪みをもち、前からある周溝墓を意識して掘削されていた。第18号方形周溝墓との重複を観察するために設けた土層断面（Ａ－Ａ′）では、第18号方形周溝墓の周溝が完全に埋没した後に、本周溝墓の周溝が掘削されていることがわかる。

規模は、南北12.65m、東西14.30m以上で、平面形態は東西がやや長い正方形をしていた。長軸方向は、Ｎ－67°－Ｅであった。

周溝の規模は、幅0.72～1.30m、深さが0.66～1.22mで、周溝は全周しているものと思われる。周溝壁面の立ち上がりは、内外とも緩やかに立ち上がっていた。各周溝とも第12号方形周溝墓同様に深く掘り込まれ、底面は平坦であった。

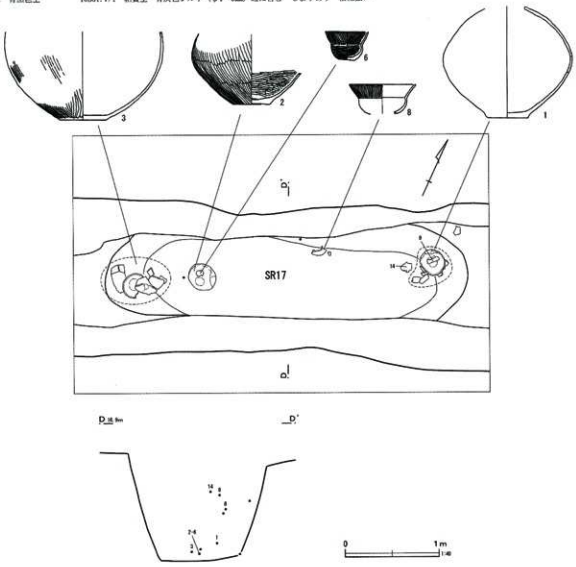
北溝には溝中土坑と考えられる、一段と深い掘り込みが確認された。溝中土坑の東側は、階段状に周溝底面が掘削されていた。そのため、北東コーナー部の深さは、他の部分と比べ少し浅くなっていた。この土坑からは、大型の壺が3点、坩2点などの遺物がまとまって出土している。第38図2の壺は、底面に蓋をした逆位の状態で出土しており、中に6の坩が入っていた。2の壺は、内面と割れ口に朱の痕が残ることから、意図的に土坑内に据え置かれた可能性が高い。深度が深く湧水があったため、詳細な



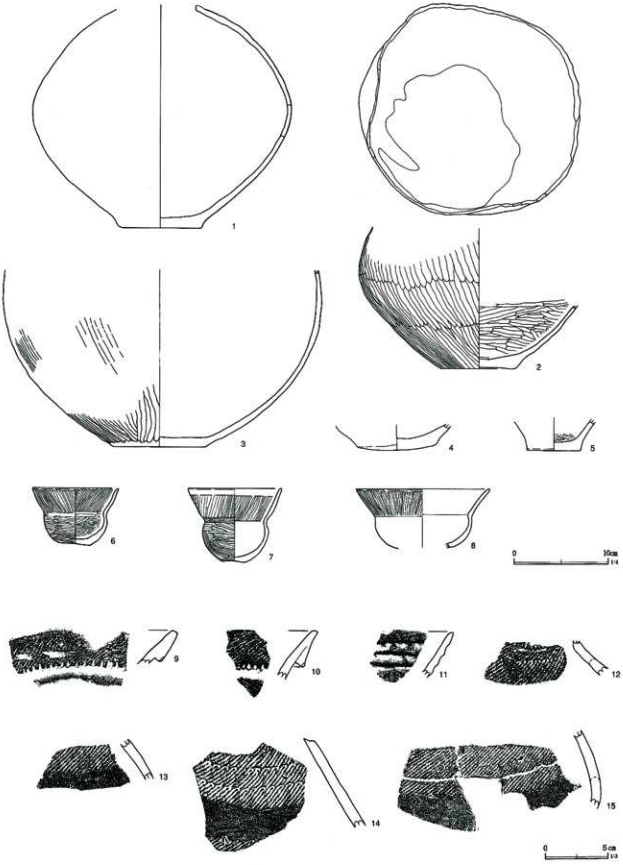
第36図　第17号方形周溝墓（1）

第17号方形周溝墓

1	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色土粒子（φ1～3mm）均等に少量　しまりあり　粘性ややあり
2	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色土をブロック状に多量　しまりあり　粘性ややあり
3	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒子（φ1～5mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
4	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・青灰色シルト（φ1～2mm）均等に少量　しまりあり　粘性ややあり
5	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土粒子（φ1～5mm）多量　しまり・粘性あり
6	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土粒子（φ1～10mm）多量　しまりあり　粘性ややあり
7	青黒色土	10BG2/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～10mm）多量　しまりあり　粘性強い
8	青黒色土	10BG2/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～10mm）多量　しまりあり　粘性強い
9	青黒色土	10BG2/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～10mm）少量　しまりあり　粘性強い
10	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒子（φ1～10mm）多量　しまりあり　粘性ややあり
11	暗青灰色土	10BG4/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～10mm）多量　しまりあり　粘性強い
12	青灰色土	10BG5/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～2mm）微量　しまりあり　粘性強い
13	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色土粒子（φ1～2mm）均等に含む　焼土粒子（φ1～5mm）・炭化物粒子（φ1～5mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
14	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土粒子（φ1mm）・炭化物粒子（φ1～5mm）少量　焼土粒子（φ1～2mm）　微量　しまりあり　粘性ややあり
15	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土（φ1～2mm）均等に少量　しまりあり　粘性ややあり
16	オリーブ黒色土	7.5Y3/1	黄褐色土（φ1～5mm）・緑灰色土（φ1～5mm）均等に多量　しまり・粘性あり
17	オリーブ黒色土	7.5Y3/1	暗質土　緑灰色土（φ1～10mm）少量　しまりあり　粘性強い
18	黒色土	7.5Y2/1	暗質土　緑灰色土（φ1～5mm）少量　しまりあり　粘性強い
19	暗緑灰色土	7.5GY3/1	暗質土　緑灰色砂（φ1～10mm）ブロック状に多量　しまりややあり　粘性あり
20	黒灰色土	2.5Y3/1	黒灰色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ1mm）少量　しまりあり　粘性なし
21	黒灰色土	2.5Y3/1	1層+炭化物（棒状0.5cmロ×1～3cm長）砕に含む　しまりあり　粘性なし
22	暗灰褐色土	2.5Y4/1	暗褐灰色のやや粘性のある土主体　黄褐色土粒子（φ1～5mm）・青褐灰色土粒子（φ1～5mm）小～中量　しまりあり　粘性ややあり
23	オリーブ褐灰色土	5Y3/2	オリーブ褐灰色のやや粘性のある土少量　青灰色土粒子（φ2～10mm）多量　しまりあり　粘性ややあり
24	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土ブロック（φ10～20mm）均等に含む　しまりあり　粘性ややあり
25	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒子（φ1～5mm）含む　青灰色シルト（φ1～3mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
26	暗青灰色土	10BG3/1	黄褐色土粒子（φ1～5mm）・青灰色シルト（φ1～5mm）均等に少量　しまり・粘性あり
27	青黒色土	10BG2/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～2mm）少量　しまりあり　粘性強い
28	青黒色土	10BG2/1	黄褐色土　青灰色シルト（φ1～3mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）多量　しまり・粘性あり
29	暗青灰色土	10BG4/1	暗質土　黄褐色土・青灰色シルト（φ1～3mm）多量　しまりあり　粘性強い
30	青黒色土	10BG2/1	暗質土　青灰色シルト（φ1～2mm）含む　しまりあり　粘性強い
31	青黒色土	10BG2/1	粗質土　青灰色シルト（φ1～10mm）含む　しまり・粘性あり
32	青黒色土	10BG1.7/1	粘質土　青灰色シルト（φ1～5mm）部に含む　しまりあり　粘性強い



第37図　第17号方形周溝墓（2）



第38図　第17号方形周溝墓出土遺物

調査をすることができなかったため、骨片等の微細な遺物を確認することはできなかった。そのため、墓坑であったのか、あるいは儀礼的な行為を行ったのかの判断が難しい。

方台部は、南北10.15m、東西11.40mで、ほぼ正方形をしていた。方台部上には、マウンドや埋葬施設を確認することができなかった。

遺物は、北溝から多量に出土している。南溝からも小型の完形の坩などが出土している。

出土遺物は、第38図に示した。1は、頸部から上を欠損する壺である。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。2の壺は、内面と割れ口に朱の痕跡を残す。割れ口が摩滅していることから、二次的に再利用したものと考えられる。3は、外面に赤彩を施す大型の壺胴部である。6～8は、坩である。6は、2の壺に納められた状態で出土した。完形で、体部内面には微量に朱が付着している。7は、外面と口縁部内面に赤彩が施される。8は、器面全体に赤彩が施され、二次的な火熱を受けている可能性がある。9～15は、壺の破片である。11は、吉ヶ谷式で、外面には明瞭な輪積み痕はみられない。12・13・15は同一個体の可能性がある。

第18号方形周溝墓（第39・40図）

O・P－35・36グリッドにかけての谷への落ち際で検出された。第366・375・384号住居跡、第740号土坑、第767号溝跡と重複しており、本遺構の方が古かった。調査時の旧番号はSD785である。

第17号方形周溝墓の南溝と非常に近接しており、北溝で僅かに重複が認められた。第17号方形周溝墓の南溝が他の周溝と比べ、本遺構の辺りだけ幅が狭くなり、やや歪んでいた。それらのことから、本遺構の方が古く、第17号方形周溝墓が本遺構を避けて構築したことが判明した。また、通して設定した土層断面（A－A'）からは、本周溝墓が完全に埋没した後に、第17号方形周溝墓の周溝が掘削されたことがわかった。

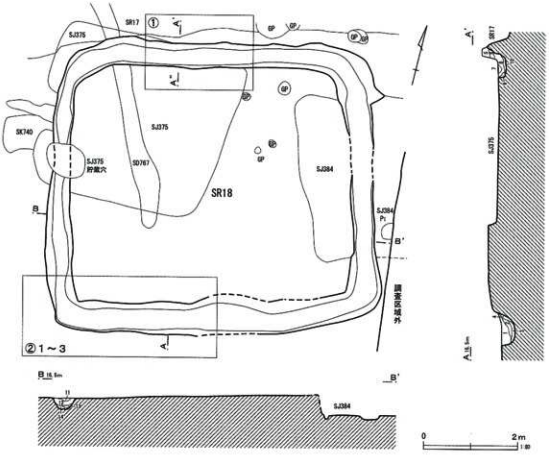
規模は、南北6.20m、東西7.00mで、平面形態は正方形をしていた。今回検出された方形周溝墓の中では一番小型であった。長軸方向は、N－76°－Eであった。

周溝の規模は、幅0.35～0.80m、深さが0.30～0.42mで、周溝が全周していた。周溝壁面の立ち上がりは、内外とも緩やかに立ち上がり、底面は丸みをもっていた。

方台部は、南北5.05m、東西5.95mで、ほぼ正方形をしていた。方台部上には、マウンドや埋葬施設を確認することができなかった。

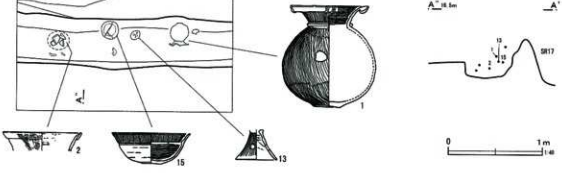
遺物は、北溝と南溝に集中して出土した。北溝では、ほぼ中央に完形の壺と坩、器台の脚部、壺口縁部片などが出土した。壺はその出土状況から、方台部より周溝に転落したものと考えられる。南溝では、コーナー付近に小破片になった遺物が集中して出土している。底面から覆土上層にかけて多量の土器が出土しており、儀礼的行為が行われた可能性が考えられる。コーナー部から出土した遺物は完形に復元されるものがなく、土器の破片も細かく割れているため、意図的に割られたものが廃棄されたものと考えられる。出土した土器は、壺、甕が多く見られる。

出土遺物は、第41図に示した。1は、完形の壺で、胴部中位に2㎝大の焼成後の穿孔が認められる。幅の狭い口縁部には、2本一単位の棒状浮文が4箇所に貼付される。頸部には突帯が巡る。調整は、内外面ともにヘラミガキである。3の壺は、頸部に刻み目を施した突帯が巡る。4は、内湾する壺の口縁部と考えたが、小型の高坏である可能性もある。6～8、16～18は吉ヶ谷式の甕である。6は、単節RL縄文、他の5点は単節LR縄文が口縁部から胴部にかけて施文される。12は、台付甕の脚部で、調整はナデである。13は、器台の脚部で、円孔が3箇所に認められる。14の小型の坩は、外面と口縁部内面に赤彩が施される。15は、口が大きく開く大形の坩で、完形である。口縁部外面と内面には、丁寧なヘラミガキ調整が施され、底部外面には黒斑が認められる。

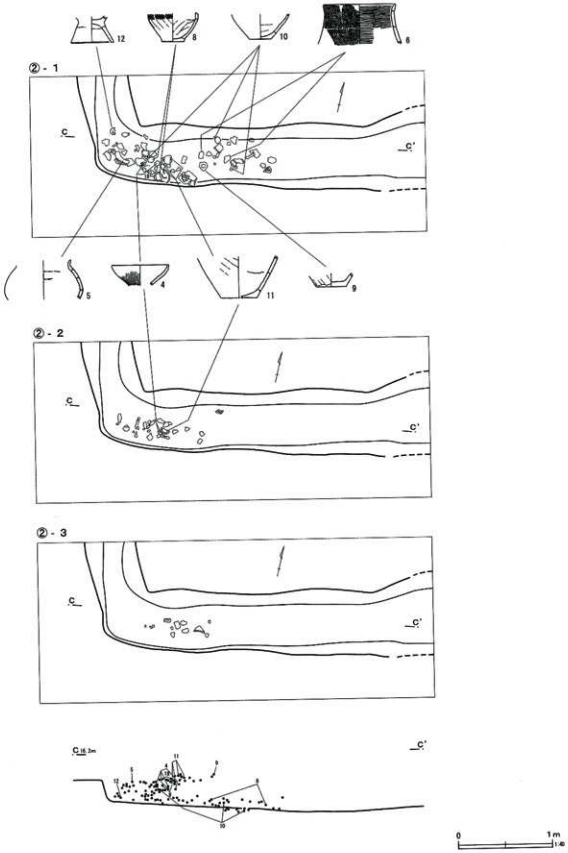


第18号方形周溝墓

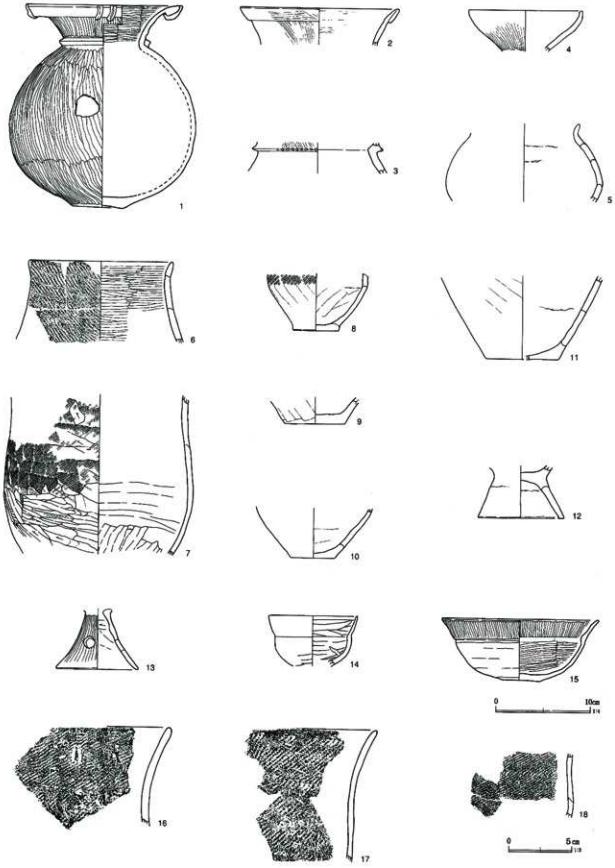
1	暗灰色土	N3/0	暗灰色粘土主体　淡緑灰色土粒子（φ2～5mm）少量　炭化物粒子（φ2mm）微量　しまりなし　粘性強い
2	暗灰色土	N3/0	1層とほぼ同じ　淡緑灰色土粒子（φ2～5mm）含む　炭化物は含まず
3	暗灰色土	N3/0	淡緑灰色土多量　暗灰色粘土少量　しまりなし　粘性強い
4	緑灰色土	10G4/1	淡緑灰色土多量　暗灰色粘土少量　しまりややあり　粘性あり
5	黒褐色土	10YR3/2	暗赤褐色に近い黄褐色のしまりある土　しまりあり　粘性なし
6	黒褐色土	10YR3/1	暗灰色に近い黒褐色のしまりある土　しまりあり　粘性なし
7	緑灰色土	5G4/1	緑灰色シルト多量　暗灰色粘質土少量　しまりあり　粘性ややあり
8	暗緑灰色土	5G3/1	緑灰色粘質土粒子（φ2～5mm）・暗灰色粘質土含む　しまりややあり　粘性強い
9	黒褐色土	2.5Y3/1	黒に近い暗灰色粘質土　しまりなし　粘性あり
10	緑灰色土	5G4/1	緑灰色粘質土主体　しまりややあり　粘性強い
11	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある粘質土主体　暗灰色土粒子（φ1mm）斑に含む　しまりあり　粘性ややあり
12	暗灰色土	2.5Y4/1	11層とほぼ同じで暗灰色土粒子微量　淡緑灰色シルト（φ3～10mm）少量　層中央部に含む　しまり・粘性ややあり
13	黒褐色土	2.5Y3/1	黒っぽい暗灰色粘質土　しまり・粘性ややあり
14	緑灰色土	10G5/1	緑灰色粘土多量　暗灰色粘質土(12層の土)少量　しまりややあり　粘性あり



第39図　**第18号方形周溝墓（1）**



第40図　第18号方形周溝墓（2）



第41図　第18号方形周溝墓出土遺物

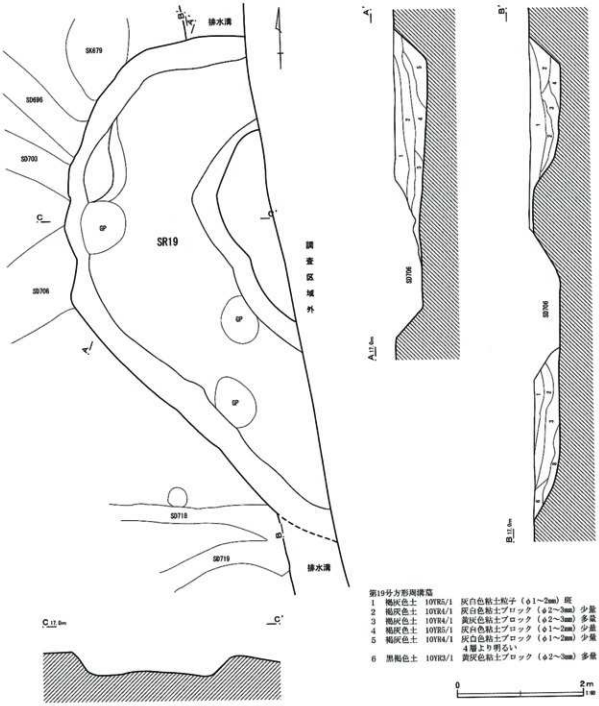
第19号方形周溝墓（第42図）

O－30グリッドで検出された。大半が調査区域外に延びていたため、全体を調査することができなかった。第696・703・706・718号溝跡、第679号土坑と重複し、新旧関係はそれらの全ての遺構が周溝墓より新しかった。調査時の旧番号はＳＤ714である。

検出された範囲での規模は、南北8.15m、東西3.45mで、平面形態は隅の丸い方形を呈していると考えられる。周溝の規模は、幅1.02～1.76m、深さ0.19～0.36mで、溝が全周するタイプと推測される。

方台部は、南北2.07m、東西0.51mであった。

遺物は、図示できるものが出土しなかった。



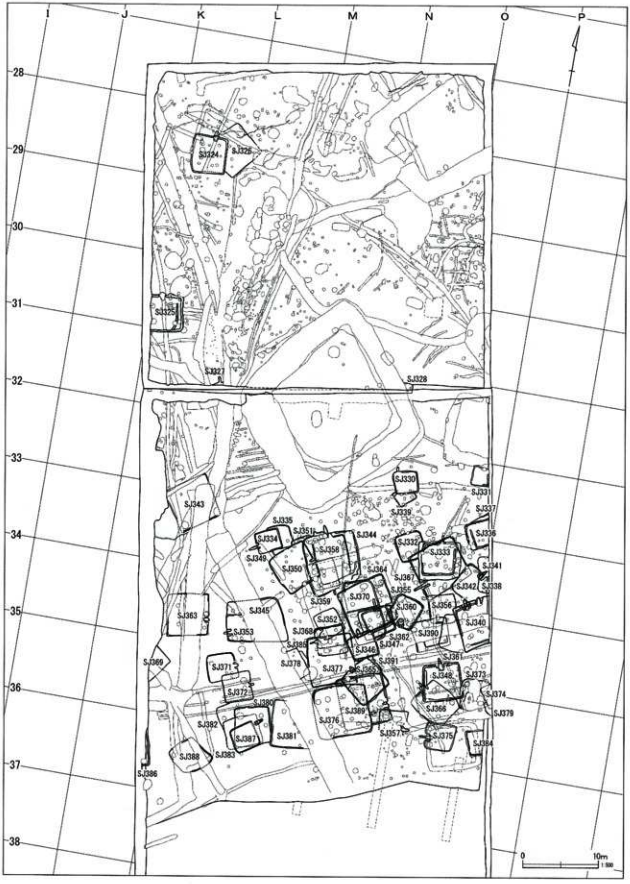
第42図　**第19号方形周溝墓**

第3表　方形周溝墓出土遺物観察表(1)

掃図番号	遺構番号		種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
18	1	SR	11	土師器	壺	16.4	28.0	7.5	完形	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄	焼成後穿孔、赤彩	59-1
18	2	SR	11	土師器	壺	16.6	18.1	6.5	ほぼ完形	雲 片 角 石英 赤粒	良好	にぶい橙	単節LR、木葉痕、赤彩	59-2
18	3	SR	11	土師器	壺	9.8	15.2	4.3	完形	砂粒 白粒	良好	淡黄		59-3
18	4	SR	11	土師器	壺	—	[1.5]	7.5	底部	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄		
18	5	SR	11	土師器	壺	—	[4.5]	5.6	底部	石英 砂粒 白粒	普通	灰白	黒斑	
18	6	SR	11	土師器	壺	—	[6.9]	23.0	底部1/3	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄		
18	7	SR	11	土師器	壺	—	[8.1]	—	胴部2/3	石英 砂粒 小礫	普通	浅黄橙	赤彩	
18	8	SR	11	土師器	甕	(10.0)	[7.0]	—	口縁1/2	長石 石英 砂粒 白粒	普通	淡黄		
18	9	SR	11	土師器	甕	(10.4)	[8.0]	—	1/5	石英 砂粒 白粒	普通	灰白	黒斑	
18	10	SR	11	土師器	台付甕	10.0	[11.3]	—	1/2	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄		59-4
18	11	SR	11	土師器	台付甕	—	[4.3]	(6.4)	脚部4/5	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄		
18	12	SR	11	土師器	台付甕	—	[4.7]	8.4	脚部	石英 砂粒 白粒	普通	橙		
18	13	SR	11	土師器	甕	—	[4.3]	4.4	底部	長石 石英 砂粒	普通	浅黄		
18	14	SR	11	土師器	鉢	(22.6)	[5.6]	—	口縁1/4	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄		
18	15	SR	11	土師器	高坏	19.8	13.0	11.8	ほぼ完形	砂粒 白粒	普通	淡黄	円孔4	59-5
18	16	SR	11	土師器	器台	8.0	7.9	10.4	完形	砂粒 白粒	普通	浅黄橙	円孔6	59-6
18	17	SR	11	土師器	器台	8.7	9.0	9.1	ほぼ完形	長石 石英 砂粒 白粒	普通	浅黄橙	円孔6、赤彩	60-1
18	18	SR	11	土師器	器台	8.4	9.2	12.0	完形	石英 砂粒 白粒	普通	淡黄	円孔6、赤彩	60-2
25	1	SR	12	鉄製品	刀子	幅1.0～0.6背幅0.2長さ[3.6]			柄部破片				マウンド	130-1
28	1	SR	12	土師器	壺	17.3	[25.0]	9.0	3/4	砂粒 白粒	普通	淡黄	黒斑	60-3
28	2	SR	12	土師器	壺	—	—	10.4	破片	片 砂粒 白粒 小礫	普通	黒褐		
28	3	SR	12	土師器	壺	—	[5.5]	(6.6)	底部	石英 砂粒 赤粒 白粒	普通	淡黄	黒斑	
28	4	SR	12	土師器	壺	—	[5.3]	(11.0)	底部1/5	砂粒 白粒	普通	橙		
28	5	SR	12	土師器	壺	—	[9.7]	6.0	底部1/3	砂粒 白粒	普通	橙		60-4
28	6	SR	12	土師器	壺	—	[22.2]	22.0	底部	石英 砂粒 白粒	普通	橙	焼成前穿孔	60-5
28	7	SR	12	土師器	小型壺	(7.4)	8.8	3.3	4/5	角 石英 砂粒 白粒	良好	橙		61-1
28	8	SR	12	土師器	台付甕	9.2	10.3	(6.4)	ほぼ完形	石英 砂粒 白粒	普通	灰白	煤付着	61-2
28	9	SR	12	土師器	台付甕	—	[8.6]	(9.0)	脚部3/4	雲 砂粒 白粒	良好	灰白	煤付着	61-3
28	10	SR	12	土師器	高坏	—	[4.8]	—	破片	砂粒 白粒	普通	灰白	1孔残存	
28	11	SR	12	土師器	坩	10.2	7.2	2.2	ほぼ完形	雲 長石 石英 砂粒 白粒	良好	浅黄	赤彩、黒斑	61-4
28	12	SR	12	土師器	坩	11.6	5.1	2.3	ほぼ完形	雲 角 長石 石英 砂粒 白粒	良好	淡黄橙	黒斑	61-5
29	13	SR	12	須恵器	坏蓋	(14.0)	[2.9]	—	口縁破片	砂粒 白粒	良好	灰白		
29	14	SR	12	灰釉陶器	長頸瓶	(6.4)	[6.8]	—	口縁3/5	砂粒 黒粒	良好	灰白		
29	15	SR	12	須恵器	甕	24.0	[3.9]	—	口縁破片	赤粒	良好	灰	湖西産	121-2
29	16	SR	12	土師器	壺	12.6	6.1	—	ほぼ完形	長石 砂粒 白粒	普通	淡黄	赤彩	61-6
29	17	SR	12	土師器	壺	13.0	5.7	—	ほぼ完形	砂粒 赤粒 白粒	普通	淡黄	赤彩	61-7
29	18	SR	12	土師器	壺	12.4	6.6	—	完形	長石 石英 砂粒 白粒	普通	淡黄	赤彩	62-1
29	19	SR	12	土師器	坏	(15.0)	[5.1]	—	1/2	砂粒 赤粒 白粒	普通	淡黄	赤彩、模倣坏	
29	20	SR	12	土師器	鉢	11.4	8.3	—	ほぼ完形	石英 砂粒 白粒	良好	淡黄橙	赤彩	62-2
29	21	SR	12	土師器	高坏	(19.6)	[6.5]	—	坏部3/4	長石 石英 砂粒 赤粒 白粒	普通	淡黄橙		
29	22	SR	12	土師器	高坏	—	[9.1]	—	脚部	長石 砂粒 白粒	普通	淡黄	赤彩	
29	23	SR	12	土師器	高坏	—	[9.5]	(12.4)	脚部3/5	角 石英 砂粒 白粒	良好	淡黄橙		
29	24	SR	12	土師器	鉢	(13.0)	[13.9]	(7.0)	2/5	長石 砂粒 白粒	普通	浅黄	黒斑	62-3
29	25	SR	12	石製品	臼玉	径1.4長さ0.6重さ1.6			4/5				滑石	
29	26	SR	12	石製模造品	剣形品	幅3.1長さ5.6厚さ0.5重さ12.6			ほぼ完形				滑石	127-2
29	27	SR	12	石製模造品	剣形品	幅2.5長さ2.6厚さ0.4重さ5.2			3/4				滑石	127-2
31	1	SR	15	土師器	壺	(11.3)	23.4	(6.6)	2/5	雲 片 角 赤粒	良好	にぶい褐	赤彩?単節RL	62-4
31	2	SR	15	土師器	壺	(12.6)	[7.3]	—	口縁破片	石英 砂粒 黒粒	普通	灰白	赤彩	
31	3	SR	15	土師器	台付甕	—	[4.9]	—	胴部破片	砂粒 白粒	普通	浅黄		
31	4	SR	15	土師器	甕	—	—	—	破片	砂粒 白粒	普通	褐灰	単節RL	
35	1	SR	16	土師器	壺	—	[17.8]	—	1/4	雲 片 長石 砂粒 白粒	普通	浅黄	単節RL、黒斑	62-5
35	2	SR	16	土師器	甕	(14.8)	[20.9]	6.8	1/3	雲 角 砂粒 白粒	普通	橙	焼成後穿孔?煤付着	62-6
35	3	SR	16	土師器	台付甕	—	[4.2]	—	破片	砂粒 白粒	普通	橙		
35	4	SR	16	土師器	甕	—	[2.2]	(7.0)	破片	砂粒 白粒	普通	黄橙	煤付着	
35	5	SR	16	土師器	甕	—	[1.8]	(9.0)	破片	砂粒 白粒	普通	褐灰		

第4表　方形周溝墓出土遺物観察表(2)

挿図番号		遺構番号		種　別	器　種	口径	器高	底径	残　存	胎　土	焼成	色　調	備　考	図版
35	6	SR	16	土師器	高坏	(12.0)	[8.4]	—	1/4	砂粒 白粒	普通	浅黄橙	赤彩	
35	7	SR	16	土師器	壺	—	—	—	口縁破片	雲 片 石英 赤粒 白粒	良好	にぶい橙		
38	1	SR	17	土師器	壺	—	[23.5]	9.0	4/5	角 石英 砂粒 赤粒 白粒	普通	浅黄橙	黒斑	63-1
38	2	SR	17	土師器	壺	—	[14.8]	7.6	2/5	角 砂粒 白粒 黒粒	普通	浅黄橙	朱付着	63-2
38	3	SR	17	土師器	壺	—	[18.5]	10.0	1/2	雲 角 砂粒 赤粒 白粒	普通	黄橙	赤彩、黒斑、木葉痕	63-3
38	4	SR	17	土師器	壺	—	[2.7]	8.4	底部	砂粒 赤粒	良好	黄橙		
38	5	SR	17	土師器	甕	—	[3.4]	5.6	底部	長石 砂粒 白粒	普通	浅黄		
38	6	SR	17	土師器	坩	9.2	6.0	3.3	完形	石英 砂粒 白粒	良好	淡黄	朱微量付着	63-4
38	7	SR	17	土師器	坩	10.0	7.8	2.3	ほぼ完形	長石 砂粒 白粒	普通	淡黄	赤彩	63-5
38	8	SR	17	土師器	坩	14.4	[6.2]	—	1/2	石英 砂粒 白粒	普通	浅黄橙	赤彩	63-6
38	9	SR	17	土師器	壺	—	[2.6]	—	破片	長石 石英 砂粒 白粒	普通	灰	単節LR	
38	10	SR	17	土師器	壺	—	—	—	口縁破片	砂粒 白粒	普通	橙	単節LR	
38	11	SR	17	土師器	壺	—	—	—	口縁破片	長石 砂粒	普通	浅黄橙	赤彩	
38	12	SR	17	土師器	壺	—	—	—	破片	長石 砂粒 白粒	普通	淡黄	単節LR	
38	13	SR	17	土師器	壺	—	—	—	破片	石英 砂粒 白粒	普通	黄橙	単節LR	
38	14	SR	17	土師器	壺	—	—	—	胴部破片	片 長石 石英 砂粒	普通	淡黄	単節LR	
38	15	SR	17	土師器	壺	—	—	—	破片	長石 石英 砂粒	普通	淡黄	単節LR、赤彩	
41	1	SR	18	土師器	壺	16.1	21.4	5.4	ほぼ完形	砂粒 白粒 小礫	良好	浅黄橙	焼成後の穿孔、黒斑	64-1
41	2	SR	18	土師器	壺	(17.0)	[3.9]	—	破片	角 石英 砂粒 白粒	良好	浅黄橙		
41	3	SR	18	土師器	壺	—	[3.2]	—	破片	石英 砂粒 白粒	良好	浅黄橙		
41	4	SR	18	土師器	壺？	12.2	[4.3]	—	口縁3/4	石英 砂粒 赤粒 白粒	普通	浅黄橙		
41	5	SR	18	土師器	壺	—	[8.2]	—	胴部破片	角 砂粒 白粒	普通	淡黄		
41	6	SR	18	土師器	甕	(15.4)	[8.4]	—	口縁1/4	長石 石英 砂粒 白粒	普通	褐灰	単節LR、煤付着	
41	7	SR	18	土師器	甕	—	—	—	胴部	角 石英 赤粒	良好	灰黄褐	単節LR多条	
41	8	SR	18	土師器	甕	—	[6.0]	4.8	底部	角 砂粒 白粒	普通	橙	煤付着、単節LR	64-2
41	9	SR	18	土師器	甕	—	[2.8]	6.4	底部	長石 石英 砂粒 白粒	良好	淡黄	煤付着	
41	10	SR	18	土師器	甕	—	[5.2]	4.6	底部	角 長石 砂粒 赤粒 白粒	普通	浅黄橙		64-3
41	11	SR	18	土師器	甕	—	[8.8]	7.6	底部3/4	石英 砂粒	普通	浅黄橙	煤付着	64-4
41	12	SR	18	土師器	台付甕	—	[5.5]	9.2	台部1/2	角 石英 砂粒 赤粒 白粒	普通	橙		
41	13	SR	18	土師器	器台	—	[6.4]	8.8	1/2	雲 砂粒 白粒	良好	淡黄	円孔3	64-5
41	14	SR	18	土師器	坩	(9.6)	[5.3]	—	1/5	砂粒 白粒	普通	浅黄橙	赤彩	
41	15	SR	18	土師器	坩	16.8	6.5	3.9	完形	雲 角 砂粒 白粒	普通	黄橙	黒斑	64-6
41	16	SR	18	土師器	甕	—	—	—	口縁破片	雲 石英	普通	にぶい橙	単節LR	
41	17	SR	18	土師器	甕	—	—	—	口縁破片	雲 砂粒 赤粒	普通	にぶい橙	単節LR	
41	18	SR	18	土師器	甕	—	—	—	破片	石英 砂粒 白粒	普通	橙	単節LR	



第43図　住居跡全体図（1）

第44図　住居跡全体図（2）

2．竪穴住居跡

今回報告する調査区内からは住居跡98軒を検出した。調査区中央に東西方向に延びる大きな谷が入り込んでおり、地形が北と南に大きく分断されていた。調査区北側の第４次調査では、住居跡が重複することなく点在し、地形が東に向かって低くなっていくことから、集落の縁辺にあたると考えられる。谷部南側では、奈良・平安時代の遺構は全く検出されず、古墳時代前期から後期にかけての集落が東側に展開することが予測される。

今回の調査区内からは弥生時代の住居跡は検出されなかった。

古墳時代前期の住居跡は、谷部北側では第343号住居跡の１軒、南側では第394・400・403・407～411・417・423号住居跡の10軒である。

谷部北側で検出された住居跡は、第４次調査で検出された集落の東限となり、第343号住居跡の東側には当該期の住居跡や井戸跡などは検出されなかった。調査区東側は同時期の方形周溝墓が連綿と築造される墓域となっている。古墳時代前期の集落は第４次調査では検出されておらず、集落の中心域は第５次調査区の範囲になる。

谷部南側では、谷地形に沿った標高のやや低い地点に住居跡が重複して検出された。この時期の遺構は、古墳時代後期以降の遺構に壊されていることが多く、遺構の残りが悪く、全体を検出できたものは僅かであった。全体がわかるものとしては第400号住居跡があり、コーナー部に設けられた貯蔵穴を囲む間仕切り溝が検出されている。第407・408号住居跡、第409・410号住居跡はそれぞれ拡張された可能性も考えられる。出土遺物は、全体的な量は少ないが、吉ヶ谷式の土器片が多く認められる。また、Ｓ字状口縁台付甕が第400号住居跡から２個体、第417号住居跡から１個体出土している。

古墳時代中期と考えられる住居跡は、第331号住居跡の１軒が谷部北側で検出された。本遺跡において、遺構の密度が薄くなる時期である。

検出された住居跡の大半は古墳時代後期に属するものである。谷部の南北ともに遺構の重複が著しく、出土遺物については混在している可能性もある。

カマドは北向きに設置されるものが多くみられ、次いで東や西向きとなり、南向きのものは第359・360・402号住居跡など僅かであった。灰層が確認できたものが少なく、袖も被熱を受け硬化したものが少なかったことから、使用期間が短期間であったことが伺える。第404号住居跡では、カマド袖の補強材として円筒埴輪片が転用されていた。

建て替え、拡張を行ったと考えられる住居跡は、第333号住居跡、第340号住居跡、第345・353号住居跡、第347・355号住居跡、第368号住居跡があり、谷部北側に集中していた。

第346号住居跡は、南東隅に排水のためと考えられる第767号溝跡が付帯する可能性がある。溝跡は、全長約16mの浅い溝跡で、南東端は谷部に繋がっていた。住居跡の周囲に浅い周溝を巡らせる遺構が第２・３次調査で11軒程度が検出されているが、本住居跡と同様の可能性がある遺構は第13・37号住居跡などのように検出例が少ない。

奈良時代の住居跡は、谷部北側で第324・325・326・330・334号住居跡の５軒が検出された。第338号住居跡も鉄製の鉸具が出土していることから、奈良時代以降の可能性が高い。３軒が北にカマドを設け、第334号住居跡だけが西向きであった。南側は谷部に至るため、今回検出された住居跡は、第２～４次調査で検出された集落の南限となる。遺物は、南比企産の須恵器坏が多くみられる。

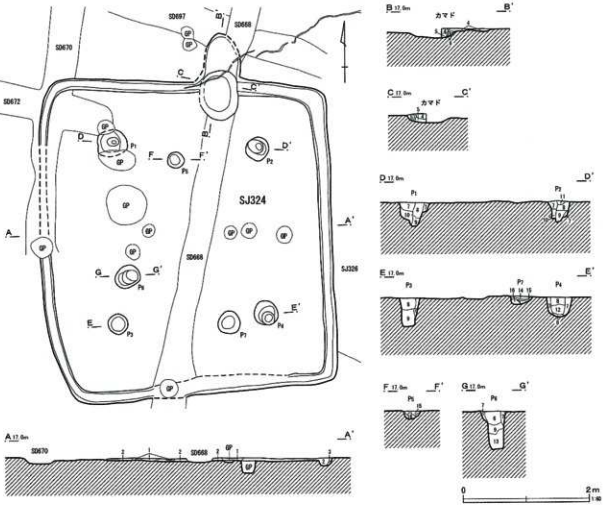
平安時代の住居跡は、第357号住居跡の１軒が谷部北側で検出された。谷部への落ち際で検出された、残りが悪い住居跡であった。カマドの可能性が考えられる掘り込みが検出されたことから住居跡と判断したが、谷部北側で検出された当該期の住居跡が本遺構だけとなることもあり、本遺構は住居跡でない可能性が高い。

第324号住居跡（第45図）

K－28グリッドで検出された。第326号住居跡、第668・670・672号溝跡と重複していた。遺構の切り合い関係は、第668号溝跡よりも古く、第326号住居跡、第670・672号溝跡との関係は把握できなかった。

平面形態は、やや西側が広がった方形をしていた。規模は、東西4.6m、南北5.0mであった。埋土はたいへん浅く1層で、確認面から床面までの深さは4cmであった。主軸方向は、N－2°－Wであった。

カマドは北壁やや東寄りに設けられていた。第668号溝跡に切られており、埋土の残りは少なかった。煙道部の長さは推定で59cmであった。燃焼部は楕円



第324号住居跡

1	黒褐色土	10YR3/2	黒褐色のしまりのある土主体　褐色土粒子（φ1mm）含む　しまりあり　粘性なし
2	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土ブロック（φ10～20mm）含む　褐色土粒子（φ2mm）多量　しまりあり　粘性なし
3	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりのある土主体　黄褐色土ブロック（φ5mm）少量　しまりあり　粘性なし
カマド			
4	灰黄褐色土	10YR4/2	褐色土粒子（φ2mm）多量　黄褐色土ブロック（φ10～15mm）含む　焼土粒子（φ5mm）少量　しまりあり　粘性あり
5	黒褐色土	10YR2/1	暗灰色のしまりのある土主体　褐色土粒子（φ2mm）多量　しまりあり　粘性なし
6	黒褐色土	10YR3/1	褐色土粒子（φ2mm）含む　しまりあり　粘性なし
ピット1～4・6			
7	灰黄褐色土	10YR4/2	黄褐色土ブロック（φ6mm）・褐色土粒子（φ2mm）含む　しまりあり　粘性なし
8	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土ブロック（φ3mm）少量　褐色土粒子（φ2mm）多量　しまりあり　粘性なし
9	褐灰色土	10YR4/1	粘性のある暗灰色土主体　黄褐色土ブロック（φ5mm）少量　褐色土粒子（φ2mm）含む　しまりややあり　粘性あり（粒状）
10	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土粒子（φ3mm）・褐色土粒子（φ2mm）含むしまりあり　粘性ややあり
11	褐灰色土	10YR4/1	焼土粒子（φ5mm）含む　しまりあり　粘性なし
12	褐灰色土	10YR4/1	粘性のある暗灰色土主体　黄褐色土ブロック（φ5mm）少量　炭化物微量　しまりややあり　粘性あり
13	黒褐色土	10YR3/1	粘性のある暗灰色土主体　しまりなし　粘性あり
ピット5・7			
14	灰黄褐色土	10YR4/2	しまりのある黒褐色土　焼土粒子（φ3mm）含むしまりあり　粘性なし
15	黒色土	10YR2/1	灰と焼土の層　焼土粒子（φ3～7mm）含む　灰多量しまり・粘性なし
16	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりのある土主体　黄褐色土ブロック（φ7mm）少量　しまりあり　粘性ややあり

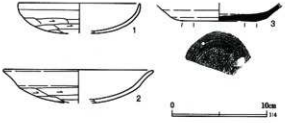
第45図　第324号住居跡

形に掘り込まれており、規模は77×58cm、床面からの掘り込みの深さは14cmであった。灰や炭化物の堆積はみられず、あまり焼けていなかった。

壁溝は、南壁の一部で確認できなかったが、全周していたと考えられる。掘り込みは浅く、幅12～26cm、深さが2～7cmであった。

ピットは7本を検出した。そのうち、P1・2・3・4・6には、土層断面で柱材の痕跡がみられ、P1～4が主柱穴と考えられる。P5・7には灰と焼土（15層）が堆積していた。ピットの深さは、P1から順に37cm、34cm、46cm、30cm、13cm、61cm、14cmであった。

遺物は少なく、破片が埋土中から出土している。出土遺物は、土師器坏、須恵器坏を第46図に示した。1は、P7から出土した、北武蔵型の土師器坏である。2は、土師器皿で、壁溝内から出土した。3は、南比企産の須恵器坏の底部片である。



第46図　**第324号住居跡出土遺物**

第325号住居跡（第47・48図）

K－30・31グリッドにかけて検出された。第664（674）・681・682・683号溝跡、第674号土坑、第7号円形周溝状遺構と重複していた。遺構の切り合い関係は、第664（674）号溝跡、第674号土坑より新しかった。第681・682・683号溝跡、第7号円形周溝状遺構との関係は把握できなかった。

西側は調査区域外にかかっていたが、平面形態は正方形に近くなると推定される。規模は、南北4.9m、東西は4.3mまで検出された。確認面から床面までの深さは15cmである。主軸方向は、N－12°－Wであった。

カマドは北壁に構築されていた。煙道、袖は検出されなかった。燃焼部は南北108cm、東西93cmの不整楕円形を呈していた。床面からの掘り込みの深さは10cmであった。灰層の堆積はなく、全体的にあまり焼けていなかった。

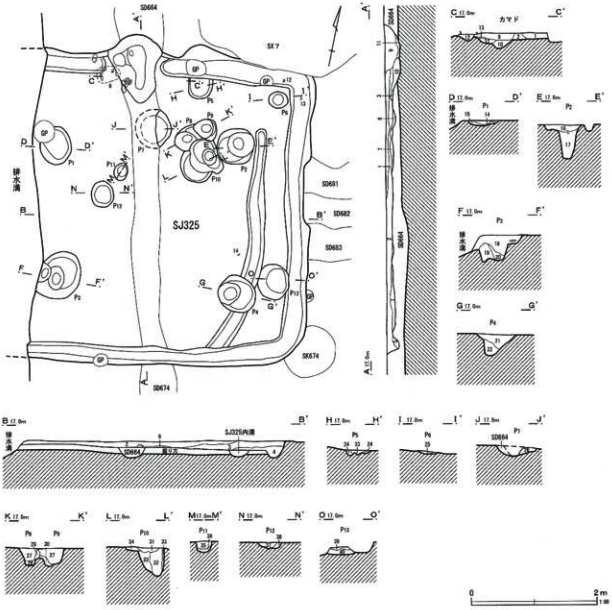
壁溝は全周していたものと考えられる。掘り込みは明瞭で、幅12～40cm、深さ9～13cmであった。また、東壁の近くでは南北方向に壁に並行して走る浅い溝が検出されたが、性格は不明である。

ピットはわずかな掘り込みのものも含め、13本を検出した。このうち、柱痕の有無や配置から、P1・2・3・4が主柱穴と考えられる。ピットの深さは、P1から順に8cm、52cm、40cm、34cm、9cm、5cm、8cm、27cm、28cm、45cm、18cm、10cm、12cmであった。主柱穴以外のピットは、柱痕が確認できたものもあるが、深さは浅いものが多く、その性格については不明である。

掘り方の平面図は、第48図に掲載した。床面が全体的に深くなり、小さなピット上の掘りこみが多数検出された。

出土遺物の量は多いものの、接合率は低い。須恵器坏・蓋、土師器坏・甕などの土器片が出土している。また、埋土上層から石製模造品が、下層から管玉が出土している。

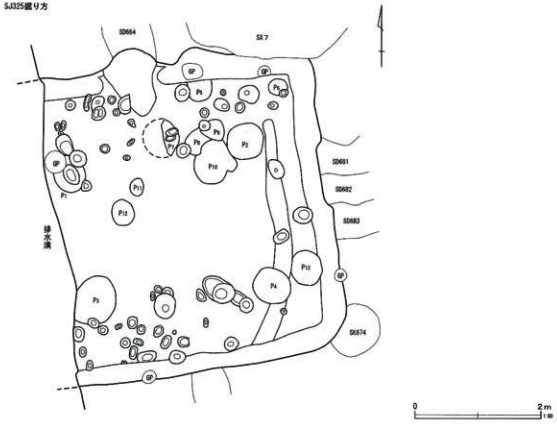
出土遺物は、第49図に示した。1～3・7は須恵器、4～6・8～11が土師器である。1は、蓋である。2・3は坏で、底部にはヘラケズリが認められる。1・3は、胎土に白色針状物質が含まれていることから、南比企産である。4～6は坏で、4・5が北武蔵型のものである。7は甕の口縁部片で、波状文が施される。8～11は、甕の口縁部と底部片である。12・13は剣形の石製模造品である。2点とも滑石製である。14は、長さ1.9cmの、完形の管玉である。15は、掘り方から出土した鉄鏃の鏃身部破片である。16・17は、滑石製の臼玉である。



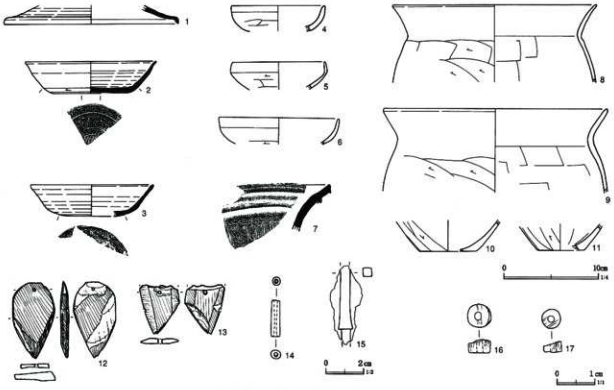
第325号住居跡			
1	黒褐色土	10YR3/1	埴土粒子（φ1～2mm）少量　北側では厚さ10mmほどの炭化物層　しまりあり　粘性ややあり
2	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒子（φ1～5mm）・埴土粒子（φ1～2mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
3	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ロームブロック（φ10～20mm）・埴土粒子（φ1～5mm）少量　しまり・粘性ややあり
4	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒子（φ1～5mm）・炭化物粒子（φ1～3mm）少量　しまり・粘性ややあり
5	灰黄褐色土	10YR4/2	ロームブロック（φ10～50mm）・埴土粒子（φ1～5mm）少量　しまり・粘性ややあり
6	黒褐色土	10YR3/1	暗質土層　しまり弱い　粘性強い
7	黒褐色土	10YR3/1	ロームブロック（φ10～20mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
8	黒色土	10YR2/1	埴土粒子（φ1～5mm）少量　しまり・粘性ややあり
カマド			
9	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒子（φ1～2mm）・埴土粒子（φ1～5mm）・炭化物粒子少量　しまり・粘性ややあり
10	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒子（φ1～3mm）・埴土粒子（φ1mm）少量　しまりややあり　粘性あり
11	灰黄褐色土	10YR4/2	ローム粒子（φ1～10mm）少量　しまりややあり　粘性あり
12	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒子（φ5～10mm）少量　しまりややあり　粘性あり
13	黒色土	7.5YR1.7/1	炭化物層　しまり弱い　粘性なし
ピット1			
14.	黒褐色土	10YR3/1	ロームブロック（φ1～10mm）少量　埴土粒子（φ1～2mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
15	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ロームブロック主体　しまり・粘性あり
ピット2			
16	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒子（φ1～10mm）・埴土粒子（φ1～5mm）少量　炭化物粒子（φ1～3mm）微量　しまりあり　粘性弱い
17	黒褐色土	10YR3/2	ロームブロック（φ1～10mm）含む　埴土ブロック（φ5mm）・炭化物粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
ピット3			
18	黒褐色土	10YR3/2	ロームブロック多量　しまり・粘性あり
19	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒子（φ1～2mm）少量　しまりあり　粘性強い
20	黒褐色土	10YR3/1	ロームブロック微量　しまりあり　粘性強い
ピット4			
21	黒褐色土	10YR3/2	ロームブロック多量　しまり・粘性あり
22	黒褐色土	10YR3/1	ロームブロック微量　しまりあり　粘性強い
ピット5			
23	黒褐色土	10YR3/1	暗灰色の灰少量　埴土粒子（φ5～10mm）含む　しまり・粘性ややあり
24	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色の粘性のある土主体　黄褐色土ブロック（φ10mm）含む

第47図　第325号住居跡（1）

ピット6
25 黒褐色土 10YR3/1 暗灰色の灰少量 焼土粒子（φ5～10mm）含む しまり・粘性ややあり
ピット7
26 黒褐色土 10YR3/1 暗灰色の灰少量 焼土粒子（φ5～10mm）含む しまり・粘性ややあり 焼土粒子（φ2mm）少量
ピット8・9
27 褐灰色土 10YR4/1 暗灰色粘質土主体 黄褐色土ブロック（φ5～10mm）少量 しまりあり 粘性あり
※ＰＷは焼土粒子（φ3～7mm）を含む
28 褐灰色土 10YR4/1 暗灰色粘質土主体 しまりなし 粘性あり
29 黒色土 10YR2/1 炭層 しまり・粘性なし
30 黒褐色土 10YR3/1 灰色の粘質土主体 褐色土粒子（φ2mm）多量 しまりあり 粘性ややあり
ピット10
31 黒褐色土 10YR3/1 暗灰色の粘性のある土主体 焼土粒子（φ10mm）含む 炭化物微量 しまりややあり 粘性あり
32 褐灰色土 10YR4/1 暗灰色の粘性のある土と黄褐色土ブロック（φ10mm）をほぼ同量含む しまりなし 粘性あり（比較）
33 褐灰色土 10YR5/1 暗灰色の粘性のある土と黄褐色土ブロック（φ10～20mm）を２：３の割合で含む しまりあり 粘性ややあり
34 褐灰色土 10YR4/1 暗灰色の粘性のある土と黄褐色土ブロック（φ20～30mm）をほぼ同量含む 褐色土粒子（φ2mm）含む しまりあり 粘性ややあり
ピット11
35 黒褐色土 10YR3/1 灰色の粘質土主体 焼土粒子（φ3mm）微量 しまりあり 粘性ややあり
36 黒褐色土 10YR3/1 灰色の粘質土主体 褐色土粒子（φ2mm）多量 しまりあり 粘性ややあり
ピット12
37 黒褐色土 10YR3/1 灰色の粘質土主体 焼土粒子（φ3mm）微量 しまりあり 粘性ややあり
38 灰黄褐色土 10YR4/2 黄褐色土ブロック（φ10～15mm）多量 灰色の粘質土少量 しまりややあり 粘性あり
ピット13
39 黒褐色土 10YR3/1 暗灰色の灰少量 焼土粒子（φ5～10mm）含む しまりややあり 粘性ややあり
40 灰黄褐色土 10YR4/2 地山のセ多量 暗灰色の粘性のある土微量 しまりややあり 粘性ややあり



第48図 第325号住居跡（2）



第49図　第325号住居跡出土遺物

第326号住居跡（第50図）

K・L－28グリッドにかけて検出された。第324号住居跡、第680・697・725号溝跡と重複していた。遺構の切り合い関係は、第697号溝跡よりも古く、第324号住居跡、第680・725号溝跡との関係は把握できなかった。

平面形態は、やや歪みのある方形をしていた。規模は、東北－西南5.5m、南東－北西5.3mであった。確認面から床面までの深さは10～23cmであった。北東壁を基準とした傾きは、N－47°－Eであった。

地震による噴砂の影響か、床面が明瞭ではなかった。南東部は周囲の床面より一段低くなっていた。網掛けで示した範囲の底面には、薄い灰層（6層）の拡がりが検出された。

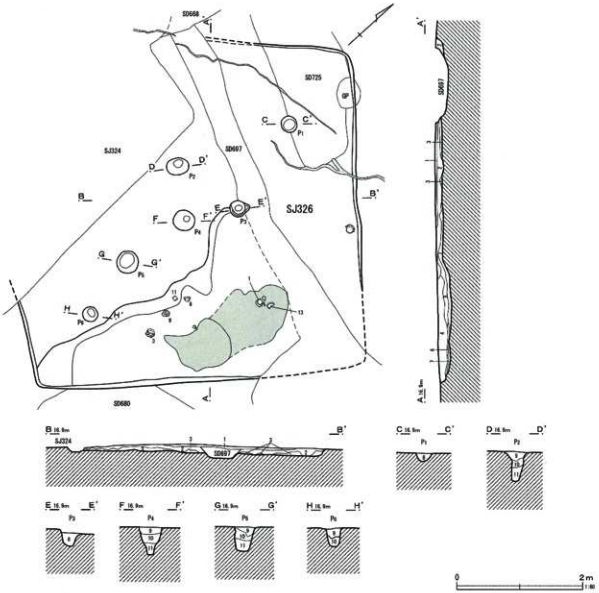
ピットは6本を検出した。配置が不規則であり、深さも一定していなかったことから、主柱穴である可能性は低く、性格は不明である。ピットの深さは、P1から順に13cm、47cm、24cm、43cm、38cm、28cmであった。覆土は、P1・3とP2・4～6がそれぞれ共通していた。

カマドや壁溝などの施設は検出されなかった。

遺物は少なく、おもに南東部の落ち込みから出土している。出土遺物には、須恵器坏、土師器坏、紡錘車などがある。

第51図1～12・14・15は須恵器、13が土師器である。1～11は、坏である。1・2・4～7は、底部全面にヘラケズリが認められる。3・9は、底部中央に糸切り痕が残り、周辺のみヘラケズリを施している。8・10・11は、底部が欠損しているため不明である。12は、高台付埦である。1～12の須恵器の中で6を除く11点の須恵器には、胎土に白色針状物質が含まれている。13は、土師器坏である。14は、高台が付く甕の底部片と思われる。15は、鍋の胴部片である。中位に2条の浅い沈線が巡り、間に波状文が施されている。16は、石製の紡錘車である。

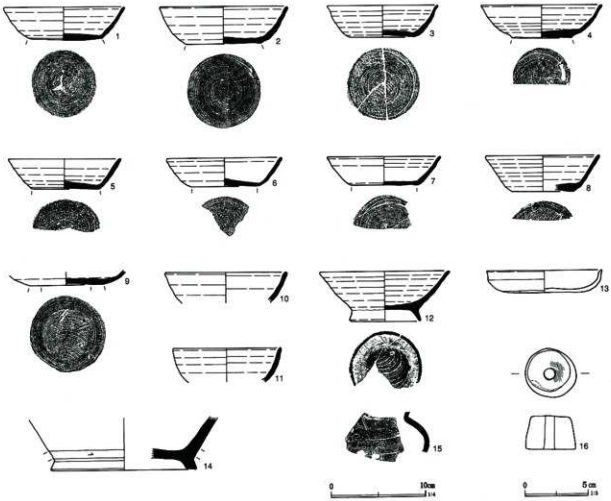
なお、本住居跡はカマドが検出されなかったことや、床面の状態などから、住居跡ではない可能性もある。



第326号住居跡

1	褐灰色土	10YR4/1	褐色土粒子（φ3mm）多量　しまりあり　粘性なし
2	褐灰色土	10YR4/1	褐色土粒子（φ2～4mm）含む　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）少量　焼土粒子・炭化物（φ3mm）微量　しまりあり　粘性なし
3	灰黄褐色土	10YR4/2	黄褐色土ブロック（φ10～30mm）多量　褐色土粒子（φ2mm）含む　しまりあり　粘性なし
4	黒褐色土	10YR3/1	焼土粒子（φ3～5mm）・褐色土粒子（φ2mm）含む　炭化物少量　しまりあり　粘性なし
5	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土ブロック（φ10～30mm）含む　褐色土粒子（φ2mm）多量　しまりあり　粘性なし
6	黒色土	10YR2/1	暗灰褐色の土少量　しまり・粘性なし（灰層）
7	褐灰色土	10YR4/1	粘性のある灰色土少量　褐色土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
ピット1・3			
8	黒褐色土	10YR3/1	暗灰色のしまりのある土主体　黄褐色土粒子（φ3～5mm）少量　褐色土粒子（φ2mm）含む　しまりあり　粘性ややあり
ピット2・4～6			
9	灰黄褐色土	10YR5/2	しまりある灰色土主体　黄褐色土ブロック（φ5～20mm）少量（P5は含む）　褐色土粒子（φ2mm）含む　しまりあり　粘性なし ※P4は炭化物微量
10	褐灰色土	10YR4/1	褐色土粒子（φ2mm）含む　焼土粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性ややあり
11	黒褐色土	10YR3/1	暗灰色の粘性の強い土主体　しまりなし　粘性あり

第50図　**第326号住居跡**



第51図　**第326号住居跡出土遺物**

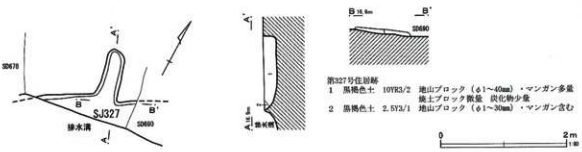
第327号住居跡（第52図）

L－31グリッドで検出された。第690号溝跡に切られていた。大半が調査区域外にかかるため、形状は不明であった。北西壁の一部が、東北－西南1.5mにわたって検出された。北西壁を東西基準とした傾きはN－29°－Wであった。

壁から煙道状に延びる掘り込みは、長さ80cm、幅40cm、深さ20cmであった。カマドの可能性は薄い。

出土遺物はわずかで、須恵器と土師器の小破片が数点のみである。

本住居跡もまた、住居跡ではない可能性がある。なお、第５次調査において南側を調査したが、本遺構に続くと思われる遺構は検出されなかった。



第52図　**第327号住居跡**

第328号住居跡（第53図）

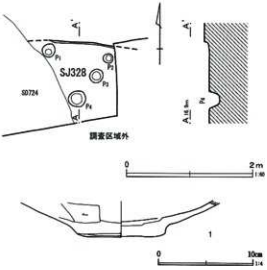
N－31グリッドで検出された。第724号溝跡に切られていた。

大半が調査区域外にかかり、検出されたのは北壁の一部のみであり、その形状や規模など全容は不明であった。検出された範囲は、東西1.3m、南北1.8mであった。埋土は浅く、確認面から床面までの深さは8㎝であった。北壁を東西基準とした傾きはN－2°－Eであった。

ピットは4基検出された。いずれも浅く、性格は不明である。ピットの深さはP1から順に7㎝、6㎝、25㎝、16㎝であった。

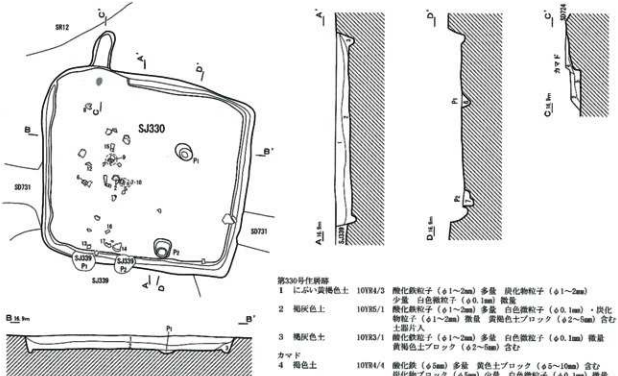
出土遺物はわずかである。図示したのは土師器壺の破片である。

なお、第5次調査において南側を調査したが、本住居跡の続きは検出されなかった。



第53図　**第328号住居跡・出土遺物**

第329号住居跡　　欠番



第330号住居跡

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3　酸化鉄粒子（φ1～2mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）少量　白色微粒子（φ0.1mm）微量

2　褐灰色土　10YR5/1　酸化鉄粒子（φ1～2mm）多量　白色微粒子（φ0.1mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）微量　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）含む　土器片入

3　褐灰色土　10YR3/1　酸化鉄粒子（φ1～2mm）多量　白色微粒子（φ0.1mm）微量　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）含む

カマド

4　褐色土　10YR4/4　酸化鉄（φ5mm）多量　黄色土ブロック（φ5～10mm）含む　炭化物ブロック（φ5mm）少量　白色微粒子（φ0.1mm）微量

5　褐灰色土　10YR4/1　粘土質　酸化鉄（φ0.2mm）多量　炭化物ブロック（φ10mm）少量

ピット1

6　褐灰色土　10YR5/1　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）・酸化鉄粒子（φ1～2mm）多量

ピット2

7　褐灰色土　10YR4/1　黄褐色土ブロック（φ10mm）・酸化鉄粒子（φ1～2mm）少量　土器片入

第54図　**第330号住居跡**

第330号住居跡（第54図）

N－32グリッドで検出された。南側を第339号住居跡、第731号溝跡と重複し、本遺構が新しかった。

規模は、南北3.0m、東西3.3m、深さが0.23mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－10°－Wであった。

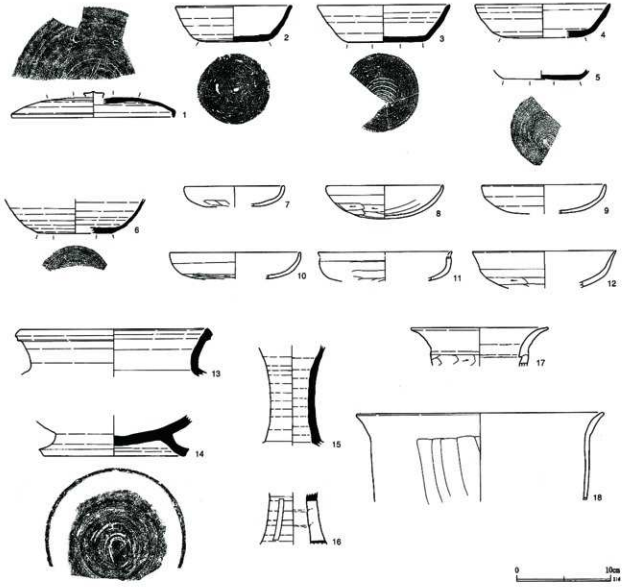
覆土は、3層からなる自然堆積であった。

カマドは、住居跡北壁のコーナー寄りに検出された。袖は検出することができず、煙道部と焚き口部が確認できた。煙道部は、壁外に延び、長さ56cm、幅28cm、深さが5cmであった。

壁溝は、カマドを除く範囲で全周しており、幅9～20cm、深さが4～6cmであった。

ピットは2本を検出した。P1は30×13cm、P2は30×16cmであった。ピットは、位置や深さなどから、主柱穴である可能性は薄いと考えられる。

遺物は、住居跡の西寄りにまとまって出土している。第55図2の須恵器坏は、底部が全面ヘラケズリである。3・5の須恵器坏は、糸切り離し後に底部周辺のみヘラケズリを施している。1～4・6は南比企産、13・14は末野産である。土師器の坏は、北武蔵型のものが多く認められる。



第55図　**第330号住居跡出土遺物**

第331号住居跡（第56図）

O－32グリッドで検出された。東側は調査開始前に設定した排水溝により東壁の一部が壊されていた。

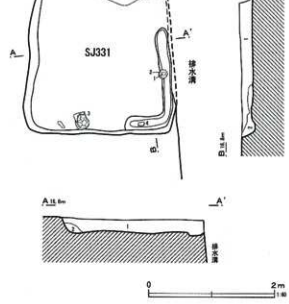
規模は、南北2.5m、東西2.3m、深さが0.22mで、平面形態はやや歪んだ方形をしていた。主軸方位は、N－11°－Wであった。

覆土は、2層からなる自然堆積であった。

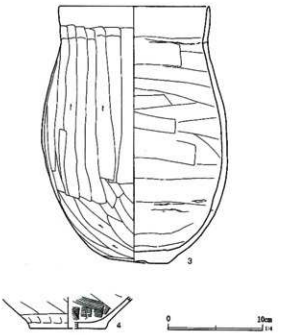
カマド、柱穴、貯蔵穴などは検出できなかった。

壁溝は、東壁の中央部から南東コーナー部に巡っており、幅14～21cm、深さが3～7cmであった。

遺物は、東壁際から1・2の土師器塊、南壁際で3・4の土師器甕が出土している。第56図1の塊の内面は、放射状の丁寧な暗文が施される。1・2とも内外面に赤彩が施される。



第331号住居跡
1　黒褐色土　10YR2/2　黄褐色土粒子（φ1～2mm）微量　部分的にブロックもみられる
2　黒色土　10YR1.7/1　黄褐色土（φ1～5mm）少量　炭（φ1～2mm）微量　しまり・粘性あり



第56図　**第331号住居跡・出土遺物**

第332号住居跡（第57図）

N・O－33グリッドにかけて検出された。第333・367号住居跡、第400号井戸跡、第690号土坑と重複していた。新旧関係は、第367号住居跡より新しく、他の遺構より本遺構が古かった。

規模は、南北3.7m、東西3.7m、深さが0.12mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－27°－Wであった。

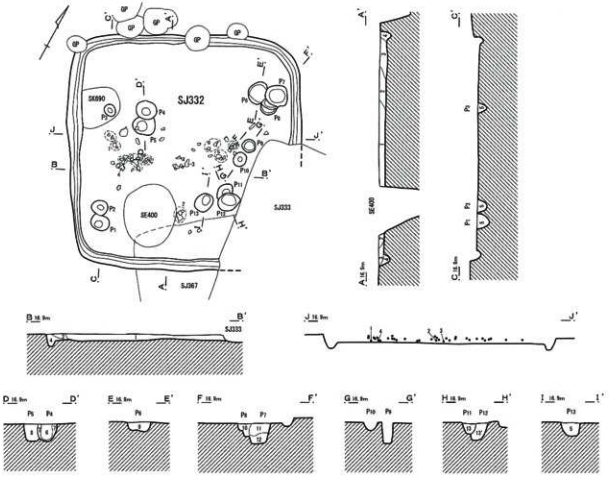
覆土は、4層からなる自然堆積であった。

カマドや貯蔵穴は検出できなかった。

壁溝は、幅8～24cm、深さが6～13cmで、全周していたものと思われる。

ピットは13本を検出できたが、浅いものが多く、性格は不明である。P1は29×19cm、P2は25×16cm、P3は19×16cm、P4は31×27cm、P5は36×27cm、P6は37×11cm、P7は37×31cm、P8は25×19cm、P9は22×31cm、P10は21×13cm、P11は25×17cm、P12は34×23cm、P13は32×21cmであった。

遺物は、床面からやや浮いた位置で土師器片が多量に出土している。小破片が多く、図示できるものが少なかった。



第332号住居跡

1　暗灰褐色土　10YR3/1　暗黒灰色のしまりある土主体　炭化物粒子（φ2mm）・焼土粒子（φ2mm）・黄褐色土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性なし

2　褐灰色土　10YR4/1　2層より黒っぽい土（暗褐灰色）でしまりある土主体　しまりあり　粘性なし

3　褐灰色土　10YR4/2　褐灰色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ10～15mm）少量　しまりあり　粘性なし

4　褐灰色土　10YR4/1　暗灰色のやや粘性のある土主体　黄褐灰色土粒子（φ2～3mm）しまりあり　粘性ややあり

ピット1～3・13

5　暗茶褐色土　10YR3/1　暗茶褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ8mm）・しまりあり　粘性ややあり

ピット4・5

6　黒褐色土　10YR3/1　黒っぽい暗灰色のしまりある土　炭化物粒子（φ2mm）・焼土粒子（φ2mm）含む　黄褐色土粒子（φ5mm）微量　しまりあり　粘性ややあり

7　黒褐色土　10YR3/1　暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10～30mm）底に含む　しまりあり　粘性なし

8　黒褐色土　10YR3/1　黒っぽい暗灰色のしまりある土（6層と同じ土）しまりあり　粘性ややあり

ピット6

9　褐灰色土　10YR4/1　暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10mm）少～中量　しまりあり　粘性なし

ピット7・8

10　褐灰色土　10YR4/1　暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ20～30mm）少量　炭化物粒子（φ2mm）・焼土粒子（φ2mm）微量　しまりあり　粘性ややあり

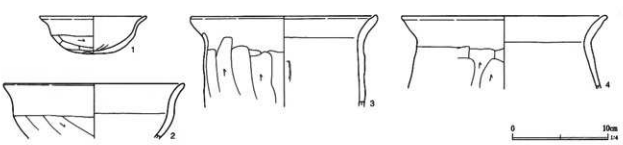
11　灰黄褐色土　10YR4/2　灰黄褐色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10～30mm）多量　炭化物粒子（φ2mm）・焼土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性なし

12　黒褐色土　10YR3/1　黒褐色粘質土　炭化物粒子（φ2mm）少量　しまりややあり　粘性強い

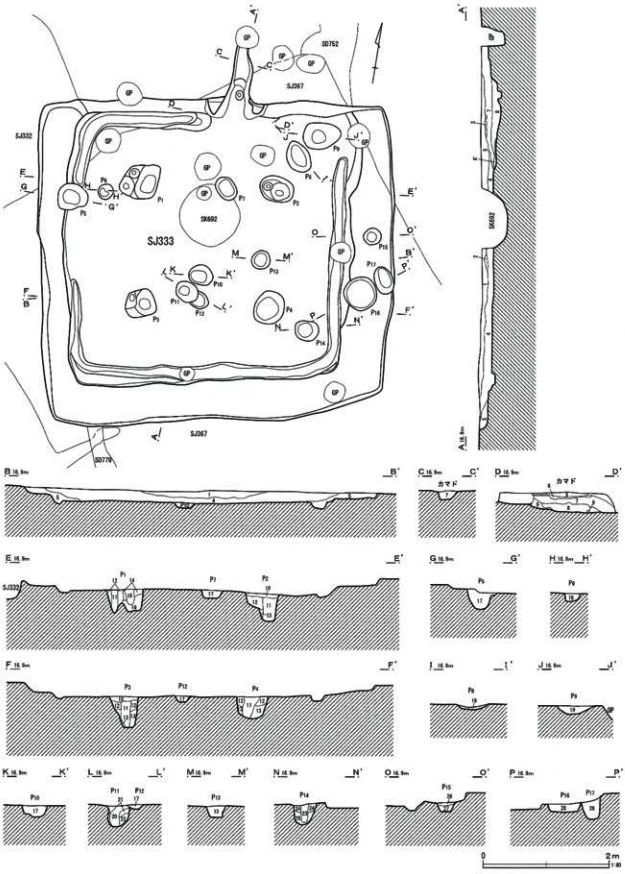
ピット11・12

13　黒褐色土　10YR3/1　黒っぽい暗灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ5mm）底に含む　しまりあり　粘性なし

13'　13層＋焼土（φ2～3mm）微量



第57図　第332号住居跡・出土遺物



第58図　第333号住居跡（1）

第333号住居跡

1	暗褐炭色土	10YR3/1	暗褐炭色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ15～20mm）少量　焼土粒子・炭化物粒子微量　しまりあり　粘性なし　土師器片含む
2	暗黒炭色土	10YR4/1	1層より黒っぽい暗褐炭色のしまりある土主体　焼土粒子・炭化物粒子含む（1層より多い）しまりあり　粘性なし
3	褐炭色土	10YR4/1	暗炭色のしまりある土主体　焼土粒子（φ5mm）少量　しまりあり　粘性なし　（カマド天井崩落後の流入土）
4	褐炭色土	10YR4/1	1層と同じ土主体　黄褐色土ブロック（φ20～30mm）中～多量　しまりあり　粘性なし
5	暗褐炭色土 カマド	10YR3/1	1層と同じ土主体　特に混入物はみられない　しまりあり　粘性なし
6	灰層	2.5Y3/1	暗炭色の灰主体　黒茶炭色の土少量　しまりあり　粘性なし
7	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ10～30mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし　（カマド天井部崩落土）
8	褐炭色土	10YR4/1	暗褐炭色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ5～20mm）多量　暗炭色の炭斑に含む　しまりあり　粘性なし
8'	基本的には8層と同じ ピット1～4・13		焼土ブロックは含まず
9	黄褐炭色土 ピット1～4・13	10YR5/2	炭の色と同じ土（黄褐炭色のしまりある土）主体　黄褐色土ブロック（φ10mm）多量　しまりあり　粘性なし　（カマド抜穴部）
10	褐炭色土	10YR4/1	暗褐炭色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ5mm）少量　焼土粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性なし（P3は青褐炭色土ブロック）
11	暗茶褐炭色土	2.5Y4/1	暗茶褐炭色の粘性のややある土主体　炭化物粒子（φ2mm）・焼土粒子（φ3mm）微量　SRP1・4のみ含まれる　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）少～中量　しまりあり　粘性ややあり（P3は青褐炭色土ブロック）
12	褐炭色土	10YR5/1	褐炭色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ20～30mm）多量　炭化物粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性ややあり　（P3は青褐炭色土ブロック）
13	褐炭色土 ピット6・9	10YR4/1	暗褐炭色の粘性のややある土主体　黄褐色土ブロック（φ3mm）少量　しまり・粘性ややあり　※黄褐色土ブロックが12層よりも極端に少ない
14	褐炭色土 ピット10	10YR4/1	暗褐炭色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ3～5mm）少量　焼土粒子（φ3mm）・炭化物粒子（φ2mm）微量
15	暗茶褐炭色土 ピット14	2.5Y4/1	暗茶褐炭色の粘性のややある土主体　焼土ブロック（φ10～30mm）・炭化物粒子（φ1～5mm）少量　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）中～多量
16	褐炭色土 ピット6・7・10・12	10YR5/1	褐炭色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ50mm）多量　焼土粒子（φ3mm）微量
17	暗黄炭色土 ピット6	2.5Y4/1	暗黄炭色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ10～15mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし
18	黒褐色土 ピット8・9	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　焼土粒子（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ3mm）斑に含む　暗黒炭色の炭少量　しまりあり　粘性なし
19	黒褐色土 ピット11	10YR3/1	暗炭色の粘性のややある土主体　黄褐色土粒子（φ5～10mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
20	黒褐色土	10YR3/1	暗炭色のやや粘性のある土主体　焼土粒子（φ2～5mm）少量
21	褐炭色土	10YR4/1	暗褐炭色のやや粘性のある土主体　黄褐色土ブロック（φ10mm）中～多量　しまり・粘性ややあり
22	黒褐色土 ピット14	10YR3/1	暗炭色の粘性のある土主体　青褐炭色土粒子（φ5～10mm）少量　しまりなし　粘性あり
23	暗茶褐炭色土	10YR4/2	暗茶褐炭色のしまりある土主体　焼土粒子（φ2～10mm）少～中量　炭化物粒子（φ3mm）微量　黄褐色土粒子（φ2～3mm）層上部に斑に含む　しまり・粘性あり
24	黒褐色土	10YR3/1	暗炭色のやや粘性のある土主体　黄褐色土粒子（φ5～10mm）斑に含む　しまりあり　粘性ややあり
25	褐炭色土 ピット15	10YR4/1	主体となる土は3層と同じ　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）多量　しまりあり　粘性なし
26	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　焼土粒子（φ8mm）微量　しまりあり　粘性なし
27	褐炭色土 ピット16・17	10YR5/1	褐炭色のやや粘性のある土主体　黄褐色土粒子（φ5mm）・炭褐色土粒子（φ5mm）多量　しまりあり　粘性ややあり
28	黒褐色土	10YR3/1	黒っぽい暗炭色の粘性のあるシルト質土主体　焼土・炭化物少量　しまり・粘性ややあり

第59図　第333号住居跡（2）

第333号住居跡（第58～60図）

O－33グリッドで検出された。第332・367号住居跡、第692土坑、第752・779号溝跡と重複していた。新旧関係は、第332・367号住居跡より新しく、第692号土坑より古かった。南北で重複している第752・779号溝跡との切り合いは不明である。

内側に壁溝が巡り、柱穴が外に向けて掘り直されていたことから、本住居跡は拡張されたものと考えられる。

拡張前の住居跡の規模は、南北4.3m、東西4.3m、深さが0.26～0.30mで、平面形態は正方形をしていた。

壁溝は、西壁の中央部と北東コーナー部を除いた範囲に巡っていた。幅15～28cm、深さが2～10cmであった。

拡張後の住居跡の規模は、南北5.0m、東西5.1m、深さが0.06～0.14mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位はN－2°－Wであった。

覆土は、5層からなる自然堆積で、きれいなレンズ状堆積を示していた。

カマドは、住居跡北壁の中央で検出された。袖は作り付けで、ほとんど火熱を受けていなかったため、不明瞭であった。燃焼部の規模は、南北56cm、東西50cmであった。床面とほぼ同じ高さで、明確な掘り込みはみられなかったが、先端部には支脚を埋め込んだと見られる小ピットを確認した。煙道部は、壁外に大きく延び、立ち上がりは後世のピットにより壊されていた。規模は、長さ49cm以上、幅30cm、深さが11cmであった。覆土の7層は、天井部が崩落した層である。

拡張後の住居跡には、壁溝は巡らされていなかった。

貯蔵穴は、その位置からP9の可能性が考えられる。規模は、長軸59cm、短軸42cm、深さが13cmであった。しかし、深さが浅いこともあり、貯蔵穴として機能していたかは疑わしい。

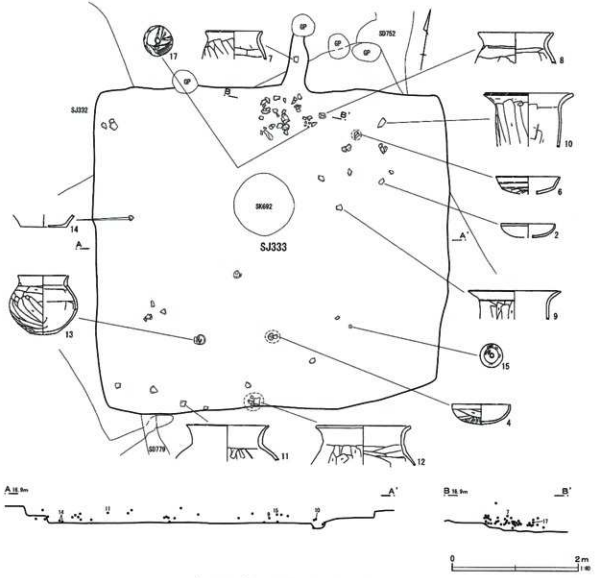
ピットは16本を検出した。位置や覆土の状況から、P1～4が主柱穴と考えられる。P1は57×34cm、P2は54×46cm、P3は47×50cm、P4が51×34cmであ

った。それぞれのピットには太さ約10～25cmの柱材の痕跡を確認することができた。

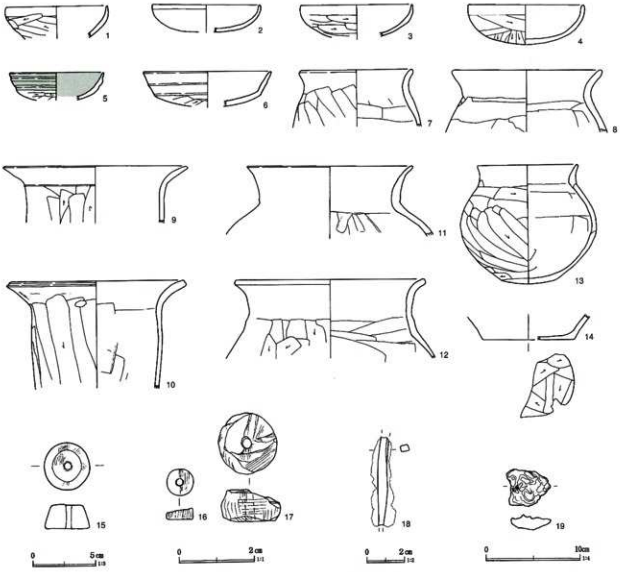
他のピットは浅く小規模なものが多く、性格は不明である。P5は57×33cm、P6は24×14cm、P7は38×12cm、P8は52×5cm、P10は38×17cm、P11は37×32cm、P12は26×7cm、P13は29×18cm、P14は37×31cm、P15は28×15cm、P16は53×16cm、P17は44×27cmであった。

遺物は、カマドの周辺にまとまって土師器片が多量に出土した。南壁寄りの覆土上層からは、第61図15の石製紡錘車が出土している。また、図示はできなかったが、底部に手持ちヘラケズリを施す須恵器坏片が出土している。

第61図1～4は、北武蔵型の土師器坏である。5・6は、有段口縁の土師器坏で、5は内外面に黒色処理が施される。7～12は、土師器の甕である。10は、口縁端部に浅い沈線が巡る。11は、口縁部内外面に赤彩が施される。14は、土師器坏底部片で、底面には粗いヘラケズリを施す。16・17は石製模造品の臼玉である。17は、カマド左袖の近くから出土している。18は、棒状の鉄製品である。両端を欠損しているため、用途が不明である。19は、幅4.2cmの椀型滓である。



第60図　第333号住居跡遺物出土状況



第61図　第333号住居跡出土遺物

第334号住居跡（第63図）

L・M－33グリッドにかけて検出された。第335・349号住居跡を切って構築されていた。また、第15号方形周溝墓が床面下から検出された。

規模は、南北2.8m、東西3.3m、深さが0.03～0.08mであった。平面形態は、東西にやや長い方形をしていた。主軸方位は、N－60°－Eであった。

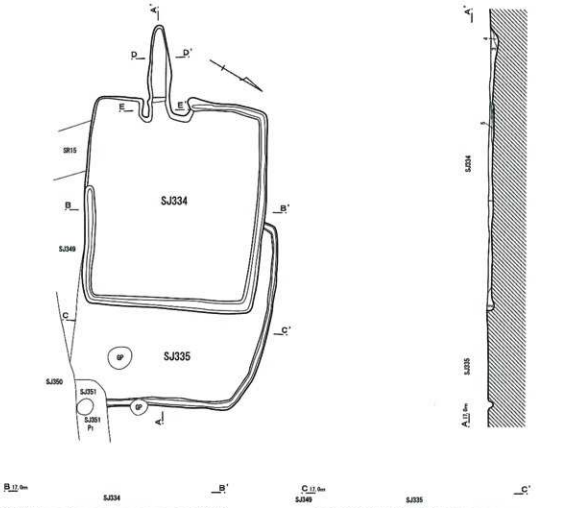
覆土は、2層からなる自然堆積であった。

カマドは、西壁の南寄りで検出された。カマドの袖は作り付けで、ほとんど火熱を受けていなかったため、不明瞭であった。燃焼部は、東西38cm、南北35cm、深さが6cmであった。床面とほぼ同じ高さで、明確な掘り込みはみられなかった。煙道部は、壁外に大きく延び、長さ115cm、幅37cm、深さが9cmであった。焚き口部分に当たる範囲に、薄い灰層を確認することができた。

壁溝は、南西コーナー部を除いた範囲に全周しており、幅11～20cm、深さが3～5cmであった。

遺物は、第62図1のほぼ完形の坏が出土している。体部外面に指頭圧痕が認められる。

第62図　第334号住居跡出土遺物



第63図　第334・335号住居跡

第335号住居跡（第63図）

M－33グリッドで検出された。第334・349・350・351号住居跡と重複していた。新旧関係は、第334・350号住居跡より古かった。覆土が全て消失しており、壁溝のみが検出された。

規模は、南北3.0m以上、東西3.1mで、正方形をしていた。主軸方位は、N－26°－Wであった。

壁溝は、検出できた範囲内では全周しており、幅8～15cm、深さが3～5cmであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

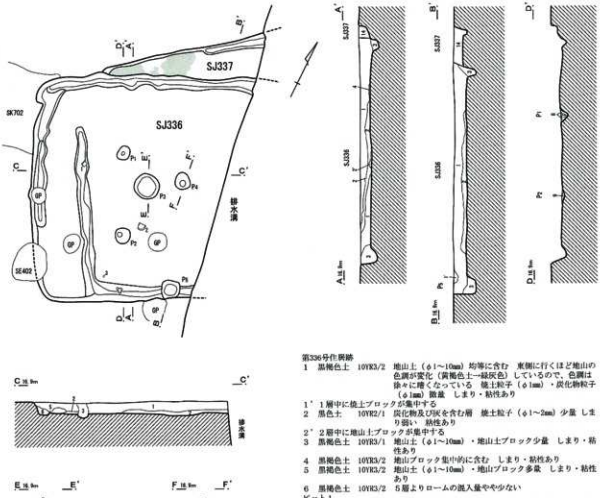
第336号住居跡（第64図）

O－32・33グリッドにかけて検出された。東側は調査区域外に延びており、排水溝により一部を壊されていた。第337号住居跡、第402号井戸跡、第702号土坑と重複していた。新旧関係は、第337号住居跡より新しく、第402号井戸跡、第702号土坑よりは古かった。

規模は、南北3.5m、東西3.7m以上、深さが0.16～0.22mであった。平面形態は、東西にやや長い方形をしていたと思われる。主軸方位は、N－25°－Wであった。

覆土は、6層からなる自然堆積であった。下層には炭化物や灰を含む層が確認された。

壁溝は、南西コーナー部を除く範囲に巡っており、



第336号住居跡
1　黒褐色土　10YR3/2　地山土（φ1～10mm）均等に含む　東側に行くほど地山の色調が変化（黄褐色土→緑灰色）しているので、色調は徐々に増くなっている　焼土粒子（φ1mm）・炭化物粒子（φ1mm）微量　しまり・粘性あり
1′1層中に焼土ブロックが集中する
2　黒色土　10YR2/1　炭化物及び灰を含む層　焼土粒子（φ1～2mm）少量　しまり強い　粘性あり
2′2層中に地山土ブロックが集中する
3　黒褐色土　10YR3/1　地山土（φ1～10mm）・地山土ブロック少量　しまり・粘性あり
4　黒褐色土　10YR3/2　地山ブロック集中的に含む　しまり・粘性あり
5　黒褐色土　10YR3/2　地山土（φ1～10mm）・地山ブロック多量　しまり・粘性あり
6　黒褐色土　10YR3/2　5層よりロームの混入量やや少ない
ピット1
7　黒褐色土　10YR3/1　緑灰色土多量　焼土粒子（φ1mm）微量　しまり・粘性あり
8　黒褐色土　10YR3/1　緑灰色土少量　しまり・粘性あり
ピット2
9　暗灰色土　10YR4/1　黄褐色土粒子（φ1～5mm）少量　炭化物粒子（φ1mm）微量　しまり・粘性あり
ピット3
10　黒色土　10YR2/1　炭化物粒子（φ1～5mm）多量　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～3mm）少量　しまり・粘性弱い
ピット4
11　黒色土　10YR2/1　炭化物粒子（φ1～2mm）少量　焼土粒子（φ1mm）微量　しまりあり　粘性強い
12　黒褐色土　10YR3/1　緑灰色土粒子（φ1～5mm）少量　しまり・粘性あり
13　黒色土　10YR2/1　11層土中に緑灰色土ブロック多量　しまりあり　粘性強い
第337号住居跡
14　黒褐色土　10YR3/2　地山土（φ1～2mm）・ブロック・焼土粒子（φ1mm）炭化物粒子（φ1～2mm）少量　しまり・粘性あり

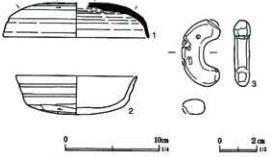
第64図　第336・337号住居跡

幅13～25cm、深さが3～13cmであった。西壁の内側にも、間仕切りの可能性が考えられる溝が、壁に平行して検出された。

ピットは中央部分で4本を検出した。配置が不規則で、浅いものが多く、その性格は不明である。P1は22×10cm、P2は25×3cm、P3は40×7cm、P4は25×47cmであった。

カマド、貯蔵穴などは検出できなかった。

遺物の量は全体的に少なく、土師器甕片などが出土している。出土遺物は、第65図に示した。1は、須恵器蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。2は、有段口縁の土師器坏である。3は、コの字形を呈する滑石製の勾玉である。頭部と背部の一部を欠損している。



第65図　第336号住居跡出土遺物

第337号住居跡（第64図）

O－32グリッドで検出された。東側は調査区域外に延びており、南側を第336号住居跡に大きく壊されていた。そのため、北壁の一部が検出できたにすぎず、平面形態は不明であった。

規模は、東西6.5m以上、深さが0.10～0.15mであった。主軸方位は、N－38°－Wであった。

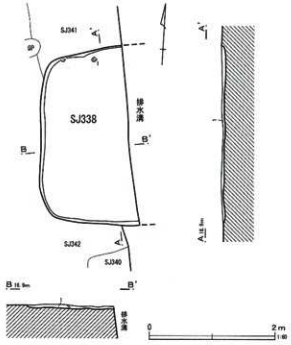
覆土は、1層からなる自然堆積であった。

壁溝は、北壁の一部で検出され、幅13～24cm、深さが5～10cmであった。

床面には、炭化物が薄く拡がっていた。

カマド、柱穴などを検出することはできなかった。

遺物は、甑の取っ手部分などの古墳時代後期の土師器片が僅かに出土したのみで、図示できる遺物がなかった。



第338号住居跡
1　黒褐色土　2. 5YR3/1　黒褐色のしまりあるきめの細かい土主体　粘土質っぽいがねばりはない

第66図　第338号住居跡

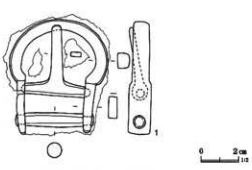
第338号住居跡（第66図）

O・P－33グリッドにかけて検出された。東側の大半が調査区域外に延びていたため、全体を調査することができなかった。第341・342号住居跡と重複していた。新旧関係は、本住居跡が第341・342号住居跡より新しかった。

規模は、南北2.7m、東西1.1m以上、深さが0.02～0.05mで、平面形態は方形をしていたものと思われる。主軸方位は、N－10°－Wであった。

カマド、柱穴などを検出することはできなかった。

遺物は、北壁寄りで第67図1の鉄具が出土した。



第67図　第338号住居跡出土遺物

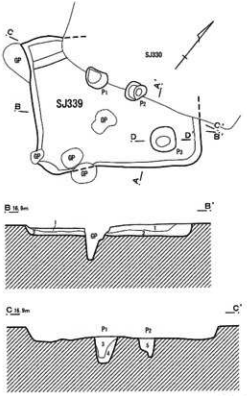
第339号住居跡（第68図）

N－32グリッドで検出された。北側は第330号住居跡に壊されていた。

規模は、南北2.1m、東西2.6m、深さが0.15～0.20mで、平面形態は東西がやや長い方形をしていた。主軸方位は、N－41°－Wであった。

ピットは3本を検出した。P1では柱材を抜き取った痕跡を確認できた。規模は、P1が36×33cm、P2が33×28cm、P3が43×15cmであった。

遺物は、1の南比企産の須恵器坏を図示できたが、古墳時代後期の土師器片なども少量出土しており、本遺構に伴う遺物であるかは不明である。



第339号住居跡
1　褐灰色土　10YR5/1　酸化鉄粒子（φ1～2mm）多量　褐色土ブロック（φ5～10mm）・炭化物粒子（φ1～3mm）少量
2　褐灰色土　10YR5/1　黄褐色土ブロック（φ5～10mm）・酸化鉄粒子（φ1～2mm）多量
ピット1
3　黒褐色土　10YR3/1　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）少量　（柱の抜き取り痕）
4　黒褐色土　10YR2/2　黄褐色土ブロック（φ3～5mm）少量
ピット2
5　黒褐色土　10YR3/1　黄褐色土粒子（φ5～10mm）多量

第68図　**第339号住居跡・出土遺物**

第340号住居跡（第69・70図）

O・P－33・34グリッドにかけて検出された。東側は調査区域外に延びていた。第342・356・361号住居跡、第766号溝跡と重複していた。本遺構が新しく、床面下からは第17号方形周溝墓が検出された。

壁の内側に壁溝が巡り、柱穴が掘り直されていたことから、本住居跡は拡張されたものと考えられる。

拡張後の住居跡の規模は、南北5.9m、東西5.2m以上、深さが0.10～0.22mであった。主軸方位は、N－24°－Wであった。

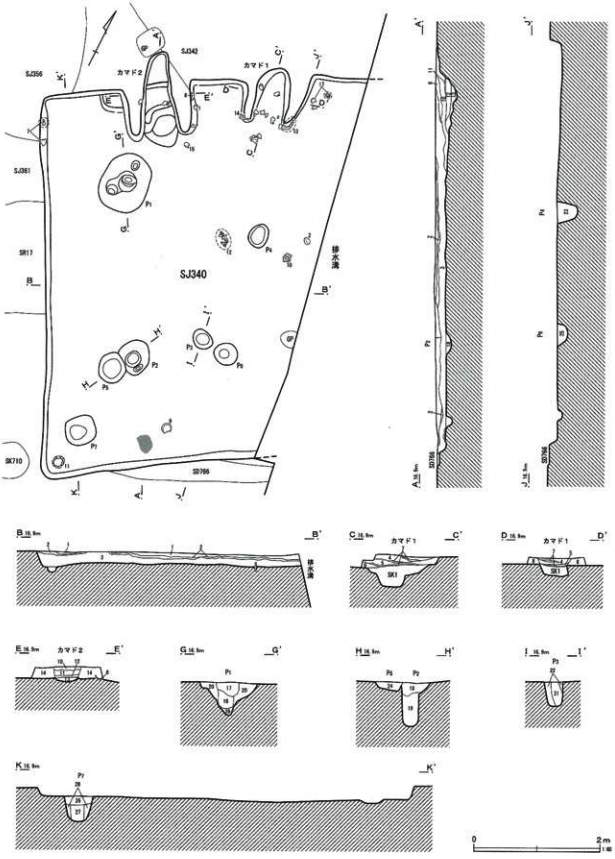
カマドは、住居跡北壁に並んで2基検出された。カマド1は、南北93cm、東西55cmであった。カマド2の燃焼部は、南北103cm、東西57cm、深さが4cmで、煙道部は壁外に47cm延びていた。1・2とも、袖は作り付けであった。

拡張前の住居跡の規模は、南北5.3m、東西4.9m以上であった。

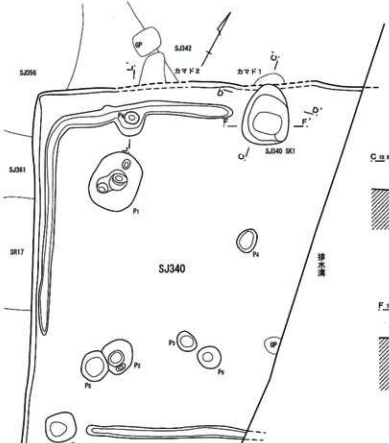
土坑1は、カマド燃焼部の掘り方と考えられ、長軸73cm、短軸60cm、深さが34cmであった。

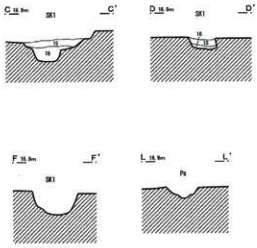
壁溝は、南西コーナー部を除く範囲に巡り、幅15～28cm、深さが4～10cmであった。

ピットは8本を検出した。P1・2が主柱穴と考えられる。P1は94×55cm、P2は52×68cmであった。他のピットの規模は、P3が33×37cm、P4が36×33cm、P5が47×14cm、P6が37×16cm、P7が48×39cm、P8が23×16cmであった。



第69図　第340号住居跡（1）

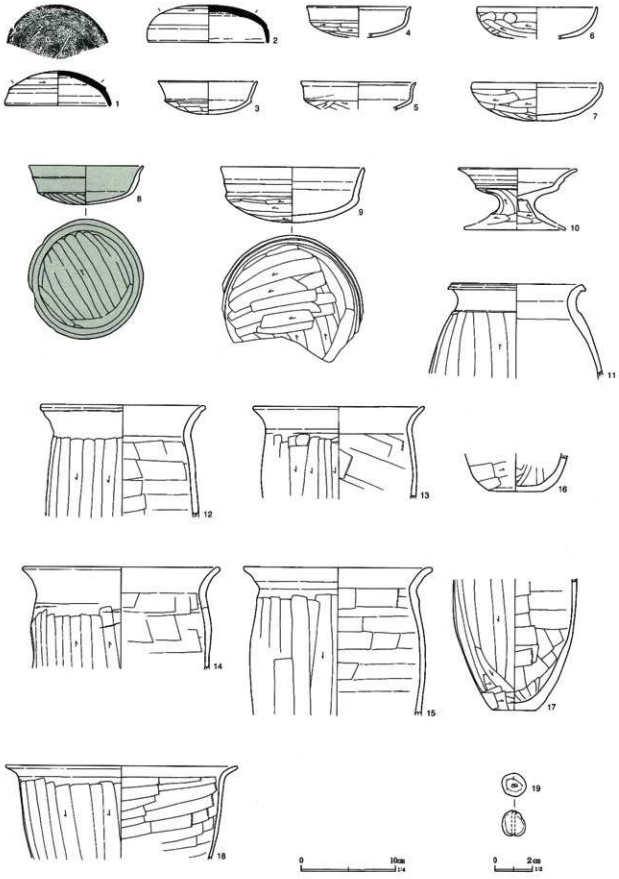




第340号住居跡

1	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のやや黒っぽいしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ3mm）少量　しまりあり　粘性なし。
2	黒色土	10YR2/1	黒褐色土を主体　黒灰色灰色土　白灰色灰・炭化物少量　しまり・粘性ややあり
3	暗褐灰色土	10YR4/1	暗褐黄灰色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ5mm）多量　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）斑に含むしまりあり　粘性ややあり
カマド1			
4	黒褐色土	2.5Y3/1	黒褐色のしまりある上主体　焼土ブロック（φ30～40mm）斑に含む　白っぽい灰色の灰少量　しまりあり　粘性ややあり
5	黒褐色土	10YR3/1	4層とほぼ同色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ20mm）含む　しまりあり　粘性ややあり
6	褐灰色土	10YR4/1	黒っぽい褐灰色のしまりある土主体　緑青灰色土ブロック（φ10～20mm）少量　しまり・粘性あり
7	灰層		
8	暗灰黄色土	2.5Y4/2	暗灰黄色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ1mm）底部近くに少と多って含む　焼土粒子（φ2～5mm）少量　しまりあり　粘性なし（カマド袖）
カマド2			
9	黒褐色土	10YR3/1	黒っぽい暗灰色のしまりある土　焼土ブロック（φ5～10mm）少量　しまりあり　粘性なし
10	褐灰色土	10YR4/1	暗褐灰色のしまりある土　青褐灰色土ブロック（φ5～20mm）斑に含む　焼土粒子（φ2～3mm）少～中量　しまりあり　粘性なし
11	灰層		
12	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色（青灰色）土ブロック（φ5～10mm）斑に含む　焼土粒子（φ5mm）少量　炭化物粒子（5mm角）微量　しまりあり　粘性ややあり
13	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10～30mm）多量　焼土粒子（φ5～10mm）斑に含む　しまりあり　粘性ややあり
14	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のシルト質土　青灰色土ブロック（φ20mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし（カマド袖）
土坑1			
15	褐灰色土	10YR4/1	暗黒灰色のしまりある土　青褐灰色土粒子（φ5mm）少～中量　炭化物粒子（5mm角）少量　暗灰色の灰少量層上部に散在
16	暗緑灰色土	5G3/1	暗緑灰色の粘性の強い土　青灰色土ブロック（φ10～20mm）多量　炭化物粒子（2mm角）少～中量　暗灰色粘土少量　しまりややあり　粘性強い
ピット1・2			
17	灰黄褐色土	10YR4/2	灰黄褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2～5mm）層下部帯状に　焼土粒子（φ2mm）微量　しまりあり　粘性なし
18	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　炭化物粒子（5mm角）少量　青灰色土粒子（φ1mm）微量　しまりあり　粘性強い　P2は暗灰色　2.5Y4/1　＋焼土（φ2～5mm）少量
29	暗灰色土	N3/0	暗灰色粘質土　青灰色土粒子（φ3～10mm）斑に含む　P2は暗緑灰色粘土質　5G3/1　＋暗灰色粘土含む
20	褐灰色土	10YR4/1	暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ1mm）斑に含む　焼土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性なし
ピット3			
21	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ8mm）少量　焼土粒子（φ1mm）微量　しまりあり　粘性なし
22	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）斑に含む　しまりあり　粘性弱い
ピット4			
23	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土　暗灰色粘土少量　暗褐色土微量　しまりあり　粘性なし
ピット5			
25	暗青灰色土	2.5Y3/2	暗青灰色のしまりある土　青褐灰色土ブロック（φ10mm）少量　層下部にまとまって　しまりあり　粘性なし
ピット6			
25	褐灰色土	10YR4/1	暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10mm）少量　焼土ブロック（φ8mm）・炭化物ブロック（φ5mm）微量　しまりややあり　粘性なし
ピット7			
26	オリーブ灰色土	5Y3/1	オリーブ灰色のしまりある土　青灰色土粒子（φ5mm）斑に含む　焼土粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性なし
27	暗緑灰色土	5G2/1	暗緑灰色のやや粘性のある土主体　灰色粘土少量　しまりあり　粘性ややあり
28	緑灰色土	5G4/1	青褐灰色土を主体とする　地山土多量　しまりあり　粘性弱い

第70図　第340号住居跡（2）



第71図　第340号住居跡出土遺物

遺物は、カマド1の周辺にまとまって出土している。第71図1・2は、須恵器の蓋である。1は、秋間産と考えられ、天井部にヘラ記号が認められる。

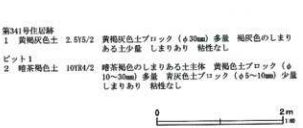
第341号住居跡（第72図）

O・P－33グリッドにかけて検出された。東側は調査区域外に延びていた。南側では第338・342号住居跡と重複していた。新旧関係は、第338号住居跡より古く、第342号住居跡より新しかった。

規模は、南北2.1m以上、東西1.5m以上、深さが0.05mで、平面形態は方形をしていたものと思われる。主軸方位は、N－10°－Wであった。

付属施設は、ピットを1本のみ検出した。P1の規模は、40×18cmであった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土したが、図示できるものがなかった。



第72図　**第341号住居跡**

第342号住居跡（第74図）

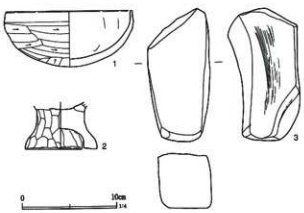
O・P－33グリッドにかけて検出された。東側は調査区域外に延びていたため、全体を調査することができなかった。第333・338・340・341・367号住居跡と重複していた。新旧関係は、第333・338・340・341号住居跡より古く、第367号住居跡より新しかった。

規模は、南北4.4m、東西4.7m以上、深さが0.26mで、平面形態は東西がやや長い方形をしていた。主軸方位は、N－35°－Eであった。

カマドは、北壁の中央部分で検出された。カマド袖は、地山土である暗黄褐色の粘質土を主体にして構築されていた。燃焼部には、深さ2～4cmの浅い掘り込みがあった。煙道部との境界部分には、地山ブロック上部が赤く焼けて変色した支脚が据えられていた。最下層には、厚さ約10cmの灰層が確認された。煙道部は壁外に延び、長さ55cm、幅30cm、深さが16cmであった。

壁溝は西壁などで部分的に検出された。幅5～26cm、深さが2～5cmであった。

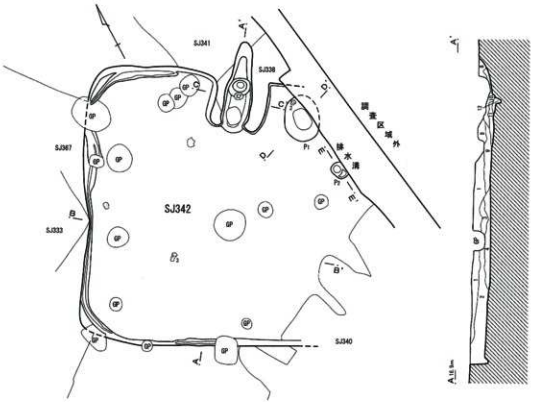
ピットは2本を検出した。P1はカマド脇に位置していたことから、貯蔵穴と考えられる。長軸73cm以上、短軸56cm以上、深さが48cmで、平面形態は楕円形をしていた。P1内からは、台付甕の脚部が出土している。P2は、P1の南西に位置し、規模は28×12cmで、性格は不明である。主柱穴と考えられるピッ



第73図　**第342号住居跡出土遺物**

トは検出できなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土している。第73図1は、土師器壺である。2は、小型の台付甕の脚部片で、厚手である。3は、住居跡の南西部から出土した、ほぼ完形の砥石である。片面にのみ擦痕が認められる。



第342号住居跡

1　暗灰色土　2.5Y4/1　暗灰色のしまりある土　青褐灰色土ブロック（φ20～30mm）中～多量　しまりあり　粘性なし

2　暗茶褐色土　2.5Y3/2　暗茶褐色のしまりある土　青褐灰色土粒子（φ1～2mm）斑に含む　黄褐色土ブロック（φ8～10mm）少量　しまりあり　粘性なし

3　黄褐灰色土　2.5Y4/2　青褐灰色土ブロック主体　灰色のしまりある土少量　しまりあり　粘性なし

3'　3層とほぼ同じ　主体となる土が逆になる　灰色土主体　青褐灰色土ブロック（φ20～30mm）中～多量　しまりあり　粘性なし

4　黒褐色土　2.5Y3/1　黒褐色のしまりある土　青褐灰色土ブロック（φ5～10mm）斑に含む　しまりあり　粘性弱い

5　暗灰色土　2.5Y4/1　暗灰色土粒子（φ2～3mm）斑に含む　しまりあり　粘性弱い

6　黒褐色土　10YR3/2　暗茶褐色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10～15mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし

7　灰黄褐色土　10YR4/2　灰黄褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2mm）多量　しまりあり　粘性なし

8　黒褐色土　2.5Y3/1　黒褐色のややしまりのある土　焼土粒子（φ5～30mm）中～多量　青褐灰色土ブロック（φ10mm）少量　灰化物（1.5cm長）微量　しまりややあり　粘性なし

9　暗灰色土　2.5Y4/1　暗灰色のしまりある土　青褐灰色土ブロック（φ10～20mm）多量　焼土粒子（φ5mm）少量　灰化物ブロック（φ8mm）微量　しまりあり　粘性なし

カマド

10　褐灰色土　10YR4/1　焼土ブロック（φ10～20mm）多量　暗灰色のしまりある土少量　しまりあり　粘性なし

11　黒灰色土　2.5Y2/1　黒灰色の灰層　しまり・粘性なし

12　暗灰色土　2.5Y3/1　暗灰色の粘性のややある土主体　青灰色土ブロック（φ10～15mm）少量　焼土粒子（φ3mm）微量　しまり・粘性ややあり

13　暗黄褐色土　2.5Y4/2　暗黄褐色のしまりある土主体　灰色土・暗灰色土ブロック（φ10～20mm）斑に少量　しまりあり　粘性なし（カマド袖）

14　暗黄褐色土　2.5Y4/2　地山ブロック上部が赤く焼けて変色（支脚）

ピット1

15　暗灰色土　2.5Y3/1　暗灰色の粘性のややある土主体　青黄色土ブロック（φ10～20mm）斑に含む　炭化物ブロック（φ8mm）・焼土ブロック（φ5mm）微量　しまり・粘性ややあり

16　暗灰色土　2.5Y3/1　暗灰色の粘質土主体　青灰色土ブロック（φ5mm）多量　しまりあまりない　粘性あり

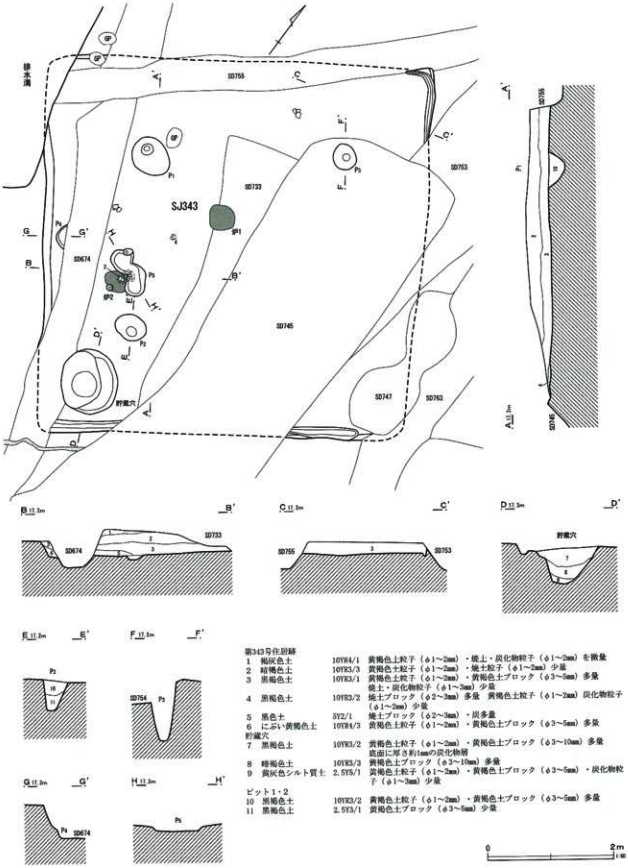
ピット2

17　暗灰色土　2.5Y3/1　黒っぽい暗灰色のしまりのある土主体　青黄色土粒子（φ1mm）・炭化物粒子（φ2mm）・焼土粒子（φ2mm）微量　しまりあり　粘性なし

17'　暗灰色土　2.5Y3/1　17層とほぼ同じ土主体（60%くらい）　黄褐色土粒子（φ5～10mm）多量　炭化物粒子（φ3mm）少量　しまりあり　粘性なし

0　2m
1:80

第74図　第342号住居跡



第343号住居跡

1	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・焼土・炭化物粒子（φ1～2mm）を微量
2	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～2mm）少量
3	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量 焼土・炭化物粒子（φ1～3mm）少量
4	黒褐色土	10YR3/2	焼土ブロック（φ2～3mm）多量　黄褐色土粒子（φ1～2mm）炭化物粒子（φ1～2mm）少量
5	黒色土	5Y2/1	焼土ブロック（φ2～3mm）・炭多量
6	にぶい黄褐色土	10YR4/3	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量
貯蔵穴			
7	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量
8	暗褐色土	10YR3/3	黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量
9	黄灰色シルト質土	2.5Y5/1	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ1～3mm）少量
ピット1・2			
10	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量
11	黒褐色土	2.5Y3/1	黄褐色土ブロック（φ3～5mm）少量

第75図　第343号住居跡

第343号住居跡（第75図）

K・L－32・33グリッドにかけて検出された。北西コーナー部は、調査前に掘削した排水溝で壊されていた。第674・745・747・753・755・763号溝跡と重複しており、本住居跡が重複する遺構の中で一番古かった。

規模は、南北5.8m、東西6.1m、深さが0.14mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－31°－Wであった。

覆土は、6層からなる自然堆積であった。南西部の覆土最下層にのみ、焼土ブロックや炭を多く含む層が確認された。

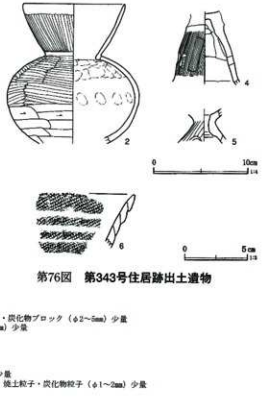
炉跡は2ヶ所で検出され、2基とも地床炉であった。炉1は、住居跡のほぼ中央で検出された。規模は、径40cm、床面からの深さが3cmであった。炉2は、西壁寄りで検出され、東側に不整形で浅いピットを伴っていた。規模は、径35cmで、床面からの掘り込みはなかった。

壁溝は、北東コーナー部と南壁で確認された。幅6～19cm、深さは3～7cmであった。

貯蔵穴は、南西隅に位置し、長軸102cm、短軸89cm、深さが58cmであった。平面形態は、南北にやや長い楕円形をしていた。

ピットは5本を検出した。P1～3の3本が主柱穴と考えられる。南東部の主柱穴は、中世の第745号溝跡により壊され検出できなかった。各柱穴の規模は、P1が66×27cm、P2が51×50cm、P3が40×97cmであった。他の2本は、P4が40×14cm、P5が長軸80cm、短軸26cm、深さが7cmであった。

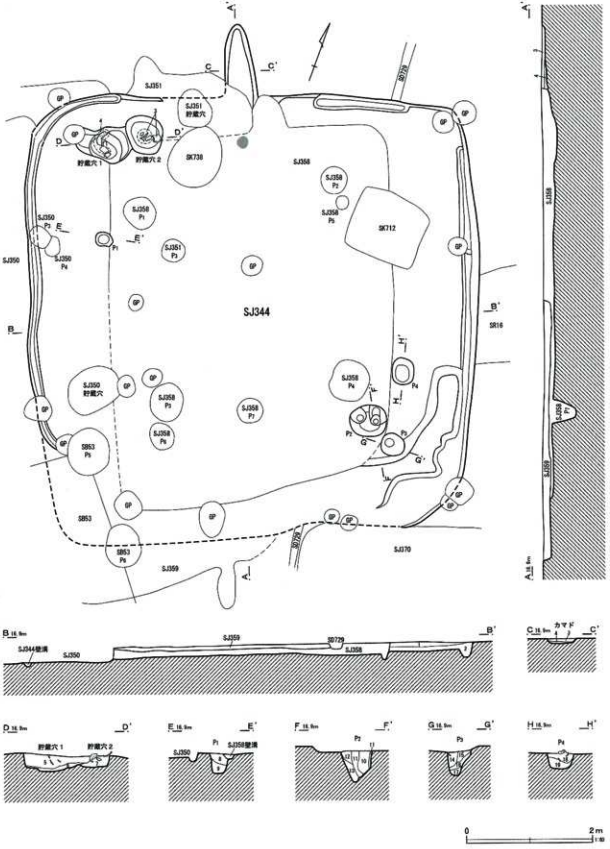
遺物は、覆土下層から古墳時代前期の古式土師器片が少量出土している。第76図3・4は高坏脚部片である。3は3箇所に、4は2箇所に円孔があけられる。6は、吉ヶ谷式の甕口縁部で、輪積み痕を明瞭に残す。



第76図　第343号住居跡出土遺物

第344号住居跡
1　にぶい黄橙色土　10YR5/3　黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量　焼土ブロック（φ2～5mm）・炭化物ブロック（φ2～5mm）少量
2　褐灰色土　10YR5/1　炭化物粒子・焼土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～5mm）少量
カマド
3　褐灰色土　10YR4/1　焼土粒子（φ2～10mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）少量
4　黄褐色土　10YR3/1　灰層　焼土粒子（φ2～5mm）微量
貯蔵穴1
5　褐灰色土　10YR4/1　黄褐色土粒子（φ1～2mm）多量　焼土・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
6　褐灰色土　10YR4/1　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　焼土粒子・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
貯蔵穴2
7　黒褐色土　10YR3/1　炭化物粒子・焼土粒子（φ1～2mm）少量
ピット1
8　褐灰色土　10YR5/1　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）少量
9　にぶい黄橙色土　10YR6/4　黄褐色土ブロック（φ2～10mm）多量
ピット2
10　黒褐色土　10YR3/1　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・炭化物ブロック（φ3～5mm）少量
11　褐灰色土　10YR4/1　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量
12　にぶい黄橙色土　10YR6/3　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）微量
13　褐灰色土　10YR4/1　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）・焼土粒子・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
ピット3
14　黒褐色土　10YR3/1　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・炭化物ブロック（φ3～5mm）少量
15　にぶい黄橙色土　10YR6/3　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）・焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）微量
16　褐灰色土　10YR4/1　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）・焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）少量　焼土ブロック（φ2～5mm）・炭化物ブロック（φ2～5mm）微量
17　褐灰色土　10YR4/1　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）・焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
ピット4
18　にぶい黄褐色土　10YR5/3　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量　やや強化鉄分を含む
19　にぶい黄橙色土　10YR5/3　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量

第77図　第344号住居跡（1）



第78図　第344号住居跡（2）

第344号住居跡（第77・78図）

M・N－33グリッドにかけて検出された。本遺構の周辺は遺構の重複が著しかったため、遺構のプランや新旧関係などを明確にすることが難しかった。

第16号方形周溝墓、第350・351・358・359・370号住居跡、第53号掘立柱建物跡、第712・738号土坑、第729号溝跡と重複していた。新旧関係は、第350・351・358・359号住居跡、第53号掘立柱建物跡、第712・738号土坑、第729号溝跡より本遺構の方が古かった。

規模は、南北推定7.1m、東西7.2m、深さが0.15mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－21°－Wであった。

カマドは、北壁のほぼ中央で検出された。袖や燃焼部は、他の遺構に壊されて残っていなかった。煙道部は、壁外に延び、長さ130cm、幅50cm、深さが9cmであった。底面には薄い灰層を確認することができた。

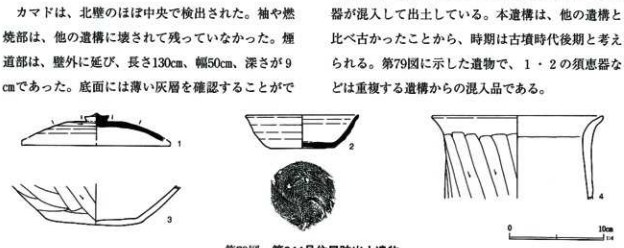
壁溝は、残りの悪い南壁を除く範囲で部分的に検出された。幅12～31cm、深さが4～9cmであった。

南東コーナー部では、床面がベッド状に一段高く掘り残されていた。

貯蔵穴は、北西部のカマド脇に2基を検出した。貯蔵穴1は、長軸77cm、短軸49cm、深さが29cmであった。貯蔵穴2は、長軸75cm、短軸55cm、深さが24cmであった。

ピットは4本を検出した。P2は柱穴の可能性が考えられる。P1は28×32cm、P2は59×46cm、P3は39×39cm、P4は40×27cmであった。

遺物は、古墳時代後期と平安時代の土師器・須恵器が混入して出土している。本遺構は、他の遺構と比べ古かったことから、時期は古墳時代後期と考えられる。第79図に示した遺物で、1・2の須恵器などは重複する遺構からの混入品である。



第79図　**第344号住居跡出土遺物**

第345号住居跡（第80図）

L・M－34グリッドにかけて検出された。第15号方形周溝墓、第753号土坑、第762号溝跡と重複していた。新旧関係は、第15号方形周溝墓より新しく、第762号溝跡より古かった。

また、南西部の床面下から第353号住居跡が壁を同じくして検出されたことから、本住居跡は拡張されたものと考えられる。

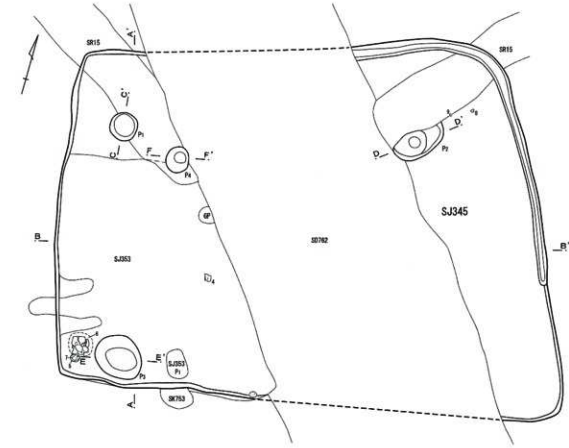
規模は、南北6.1m、東西7.8m、深さが0.10mであった。平面形態は、東西方向が長い歪んだ方形をしていた。主軸方位は、N－14°－Wであった。

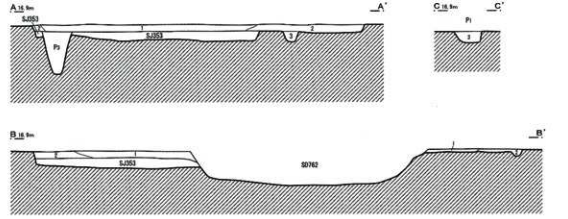
カマドを検出することはできなかった。

壁溝は、北東コーナー部にのみ巡っており、幅13～22cm、深さが2～8cmであった。

ピットは4本を検出した。ピットの位置から主柱穴と考えられるのは、P2・4の2本である。規模は、P2が88×89cm、P4が41×78cmで、掘り込みがしっかりしていた。P3も主柱穴か貯蔵穴の可能性があるピットで、規模は78×78cmであった。その他では、P1が43×18cmであった。

遺物は、北東と南西コーナー部などで古墳時代後期の土師器片が少量出土した。南西コーナー部では、第81図5～7の甑3点がかたまって出土している。5は小型のもので、内外面に輪積み痕を明瞭に残す。8・9は、北東コーナーの床面直上から出土した滑石製模造品である。8は有孔円板と考えられる。





第345号住居跡

1　黒褐色土　10YR3/1　鉄分多量　黄褐色土粒子（φ1～2mm）少量

2　黒褐色土　10YR3/2　鉄分多量　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量

ピット1

3　黒褐色土　10YR3/1　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量　鉄分少量

ピット3

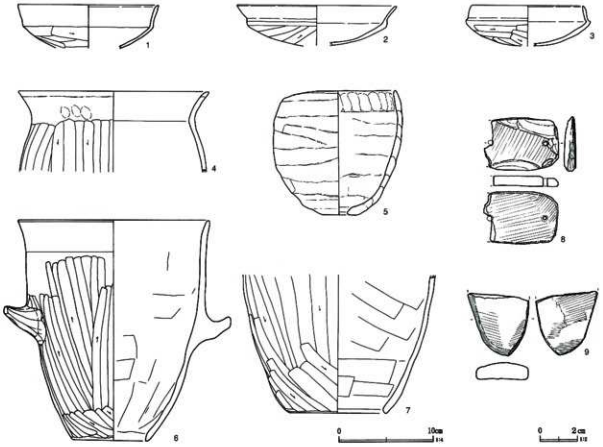
4　暗灰色土　10YR4/1　焼土粒子（φ1～3mm）・炭化物粒子（φ1～3mm）少量　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）微量　床他よりも鉄化鉄多め

5　暗灰色土　10YR4/1　焼土粒子（φ1～3mm）・炭化物粒子（φ1～3mm）少量

6　暗灰色土　10YR4/1　やや砂のまじりあり

0　2cm
1:40

第80図　第345号住居跡



第81図　**第345号住居跡出土遺物**

第346号住居跡（第82図）

N－34グリッドで検出された。第16号方形周溝墓、第347・355・362・365・377・391号住居跡、第767号溝跡と重複していた。新旧関係は、本遺構が重複する全ての遺構より新しかった。

規模は、南北3.4m、東西3.7m、深さが0.23mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－29°－Wであった。

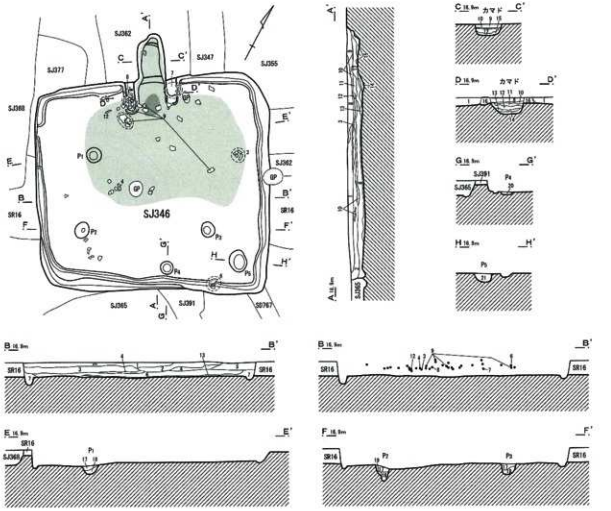
カマドは、北壁の中央で検出された。カマド袖は、褐灰色のしまりある土で構築されていた。袖先端部分には、補強材として土師器の長甕が使用されていた。口縁部から胴部上半にかけての甕が、左右1個体ずつ出土している。燃焼部は、南北62cm、東西50cmで、掘り込みはほとんどみられなかった。焚き口に当たる部分は、赤く被熱し、床面が硬化していた。煙道部は壁外に延び、長さ67cm、幅43cm、深さが18cmであった。煙道部から住居跡中央部にかけては、暗黒灰色の灰層が、網掛けで示した範囲に大きく拡がっていた。

壁溝は、西壁で僅かに途切れていたが、その他の範囲については全周していた。幅8～32cm、深さが2～11cmであった。南西コーナー部では、壁溝が住居跡のやや内側を巡っていた。

ピットは5本を検出した。各ピットの規模は、P1が24×13cm、P2が26×26cm、P3が24×17cm、P4が21×5cm、P5が35×13cmであった。何れのピットも浅い小規模なもので、主柱穴とは考えにくく、その性格は不明である。

遺物は、床面からやや浮いた状態で、古墳時代後期の土師器片が多量に出土している。出土遺物の中に須恵器はほとんど見られない。

第83図1～5は坏である。1は身模倣坏、2・3は北武蔵型坏、4は内外面に赤彩を施す比企型坏、5は口縁が大きく開く模倣坏である。6は大型の皿



第346号住居跡

1　褐灰色土　10YR4/1　暗褐灰色土のしまりある土　焼土粒子（φ2mm）・炭化物粒子（φ2mm）微量　しまりあり　粘性なし

2　褐灰色土　10YR4/1　暗褐灰色のしまりある土　焼土粒子（φ2mm）・炭化物粒子（φ2mm）・黄褐色土ブロック（φ5～10mm）少量　しまりあり　粘性なし

3　黒褐色土　10YR3/2　暗茶褐色のしまりある土　焼土粒子（φ2～5mm）少～中量　炭化物粒子（φ3mm）少量　黄褐色土粒子（φ2mm）微量　しまりあり　粘性なし

4　褐灰色土　10YR4/1　褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ10mm）多量　炭化土粒子（φ5mm）少量　灰色の灰斑に含む　しまりあり　粘性なし

5　暗褐灰色土　10YR3/1　暗褐灰色のしまりある土　暗灰色の灰含む　層左隅に集中　焼土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性なし

6　褐灰色土　10YR4/1　暗灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ3mm）斑に含む　溶カマド付近　黄褐色土粒子（φ3mm）・焼土粒子（φ3～10mm）帯状に含む　炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土粒子微量　しまり・粘性なし

7　黒褐色土　10YR3/1　暗灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ3mm）少量　しまりあり　粘性なし

カマド

8　褐灰色土　10YR4/1　暗褐灰色のしまりある土（少し灰色のシルト含む）　焼土ブロック（φ5～8mm）少量　しまりあり　粘性弱い

9　暗茶褐色土　10YR4/2　暗茶褐色のしまりある土　焼土ブロック（φ5～10mm）多量　しまりあり　粘性なし

10　黒褐色土　10YR3/1　暗灰色の灰層　焼土粒子（φ3mm）少量　しまり・粘性なし

11　暗黒灰色土　10YR3/1　暗黒灰色のしまりのややある土少量　黒灰色の灰層状に含む　焼土ブロック（φ5～8mm）斑に含む　しまりややあり　粘性なし

12　黒褐色土　10YR3/2　暗茶褐色のしまりある土　焼土粒子（φ1～2mm）多量　しまりあり　粘性なし

13　暗黒灰色土　10YR3/1　暗黒灰色の灰層　焼土粒子（φ2mm）少量　しまり・粘性なし

14　褐灰色土　10YR4/1　暗褐灰色のやや粘性のある土　黄褐色土粒子（φ2mm）中～多量　暗灰色の灰少量　しまりあり　粘性弱い

15　黒褐色土　10YR3/2　暗茶褐色のしまりある土　焼土ブロック（φ5mm）少量　黄褐色土粒子（φ5～8mm）少量　底板近くに斑　しまりあり　粘性なし

16　褐灰色土　10YR4/1　褐灰色のしまりある土　焼土粒子（φ2～10mm）少～中量　黄褐色土ブロック（φ10mm）少量　しまりあり　粘性なし（カマド袖）

ピット1～3

17　黒褐色土　10YR3/1　黒褐色のしまりある土主体　黄褐色土粒子（φ3mm）少量　焼土粒子（φ3mm）・炭化物粒子（5mm角）微量　しまりあり　粘性なし

18　黒褐色土　10YR3/2　暗茶褐灰色のやや粘性のある土主体　黄褐灰色土ブロック（φ10mm）多量　しまりあり　粘性ややあり
P1の床面は黄褐灰色土ブロックの大きさ（φ5～10mm）のもの多量　主体となる土も褐灰色のやや粘質のある土

19　褐灰色土　10YR4/1　暗灰色のやや粘性のある土主体　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）多量　しまりあり　粘性ややあり

ピット4

20　褐灰色土　10YR4/1　暗灰色のやや粘性のある土主体　黄褐色土粒子（φ5mm）斑に含む

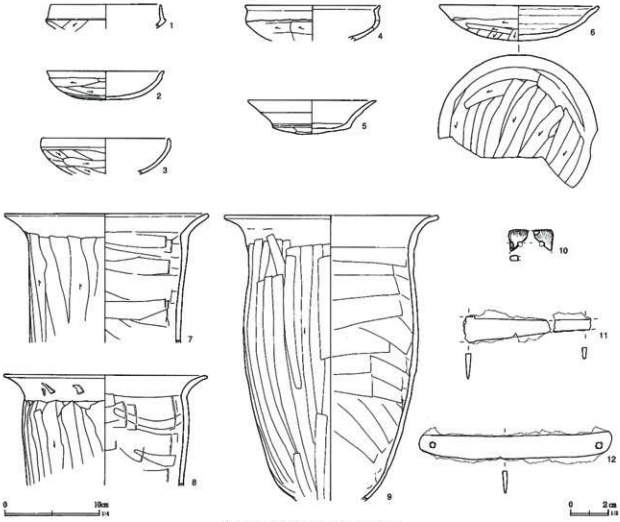
ピット5

21　黒褐色土　10YR3/1　黒褐色のやや粘性のある土主体　黄褐色土粒子（φ5～8mm）・灰褐色土粒子（φ5～8mm）多量　焼土粒子（φ5mm）少量　炭化物ブロック（φ5mm）微量　しまりあり　粘性ややあり

0　2m
1:40

第82図　第346号住居跡

である。7・8は、カマド袖の補強材として使用されていた甕である。10は石製模造品の一部で、大半を欠損しているため、用途は不明である。11・12は鉄製品である。11は、現存長6.7cmの刀子である。12は、カマド左袖の脇から出土した、穂積み具と考えられる完形の手鎌である。



第83図　**第346号住居跡出土遺物**

第347号住居跡（第84図）

N－34グリッドで検出された。第346・355・360・362・364・370号住居跡と重複していた。新旧関係は、第346号住居跡より古く、第355・360・362・364・370号住居跡より新しかった。

床面下から検出された第355号住居跡は、同じ軸方向をもち、壁も共通する部分がみられた。そのことから、本住居跡は第355号住居跡を拡張したものと考えられる。

規模は、南北3.9m、東西4.4m、深さが0.13mで、平面形態は方形をしていた。主軸方位は、N－24°－Wであった。

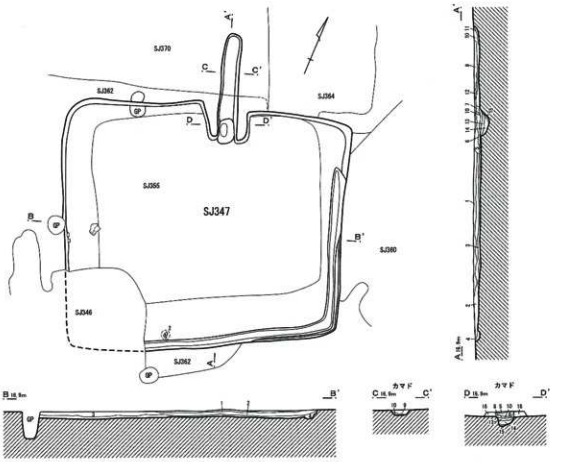
覆土は、4層からなる自然堆積であった。

カマドは、北壁のやや東寄りで検出された。カマド袖は短く、暗灰色のしまりある土で構築されていた。燃焼部には、長軸40cm、短軸20cm、深さが22cmの、楕円形をした掘り込みが検出できた。煙道部は壁外に大きく延びており、長さ135cm、幅32cm、深さが10cmであった。カマドの覆土には、2面の薄い灰層（10・15層）が確認できたことにより、拡張前の住居も本遺構と同じカマドを使用していた可能性が高い。

壁溝は、東壁から南壁にかけて部分的に検出され、幅15～25cm、深さが2～13cmであった。

住居跡内からは、貯蔵穴・ピットなどのカマド以外の付属施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片などが多量に出土している。出土遺物は、第85図に示した。1～3は、土師器の坏である。1は模倣坏、2・3は身模倣坏である。3の坏は、内外面ともに黒色処理が施される。4は、カマド左袖脇から出土した完形に近い砥石である。小孔が2ヶ所に認められ、一つが貫通している。5は、カマドの覆土下層から出土したほぼ完形の土玉である。

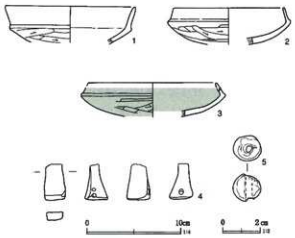


第347号住居跡

1	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ10mm）カマド寄り部分に微量　しまりあり　粘性なし
2	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）少～中量　焼土粒子（φ2～8mm）少量　炭化物粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性なし
3	黒褐色土	10YR3/2	暗黒茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ20～30mm）カマド寄り部分に微量　しまりあり　粘性なし
4	黒褐色土	10YR3/2	2層よりも黒っぽい暗茶褐色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ10～20mm）多量　しまりあり　粘性なし
カマド			
5	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ10mm）・炭化物ブロック（5～8mm角）表面近くに散在少量　暗灰色の灰少量　しまりあり　粘性なし
6	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土主体　黄褐色土ブロック（φ10～15mm）中～多量　焼土ブロック（φ5～15mm）斑に含む　炭化物（8mm角）少量　暗灰色の灰少量　しまりあり　粘性なし
7	黒褐色土	10YR3/1	暗灰色の灰・灰色の灰多量（主体となる）　暗灰色のややしまりある土少量　しまりややあり　粘性なし
8	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のややしまりある土主体　焼土粒子（φ2～3mm）斑に含む　しまりあまりない　粘性なし
9	暗褐灰色土	10YR4/2	焼土ブロック（φ10～15mm）中～多量　暗灰色の灰層上部に散在微量　暗褐灰色の土斑に含む　しまりあり　粘性なし
10	黒褐色土	10YR3/1	暗灰色の灰層（やや白っぽい灰）・焼土ブロック（φ10mm）中～多量　しまり・粘性なし
11	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2mm）暗灰色の灰が斑に含む　しまりあり　粘性なし
12	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし
13	暗灰黄色土	2.5Y4/2	暗灰黄色のしまりある土　しまりあり　粘性なし
14	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック（φ5mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし
15	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色の灰多量（主体）　焼土粒子（φ2mm）斑に含む　黄褐色土粒子（φ2mm）少量　しまり・粘性なし
16	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　焼土粒子（φ2～8mm）・黄褐色土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性なし（カマド袖）

0　2m
1:80

第84図　第347号住居跡



第85図　**第347号住居跡出土遺物**

第348号住居跡（第86・87図）

O－34・35グリッドにかけての第17号方形周溝墓の方台部内で検出された。第366・373号住居跡、第720・726・728号土坑、第764・765・779号溝跡と重複していた。新旧関係は、第366・373号住居跡、第779号溝跡より新しく、第720・726・728号土坑、第764・765号溝跡より古かった。

規模は、南北4.9m、東西5.4m、深さが0.05～0.09mで、平面形態は東西がやや長い正方形をしていた。主軸方位は、N－18°－Wであった。

カマドは、北壁の中央で検出された。カマド袖は短く、暗茶褐色のしまりある土で構築されていた。袖先端部分には、補強材として土師器が使用されていた。口縁部から肩部にかけての甕が、口縁部を下に向けた逆位の状態で左右1個体ずつ出土している。燃焼部には、南北108cm、東西75cm、深さが25cmで、平面形態が楕円形をした大きな掘り込みがあった。煙道部は壁外に延び、長さ64cm、幅32cm、深さが8cmで、暗灰色の灰を主体にした灰層を確認することができた。

壁溝は、カマドを除く範囲に全周しており、幅12～33cm、深さが4～11cmであった。西壁では、壁のやや内側を巡っていた。

ピットは7本を検出した。P1～7は、配置や土層断面に柱材の痕跡を確認できたことから、主柱穴であったと判断した。P4を除いた柱穴には、外側に向けて掘り直しされた状態を確認できたことから、住居の建て替えが行われたものと考えられる。各柱穴の規模は、P1が17×55cm、P2が31×58cm、P3が39×66cm、P4が58×55cm、P5が24×57cm、P6が33×60cm、P7が48×42cmであった。

P2・6とP4の中間には、長軸117cm、短軸97cm、深さが8cmで、平面形態が南北に長い楕円形をした土坑が検出された。覆土上層には、暗黒灰色の灰を主体にした黒色土が堆積していたが、性格については不明である。

また、西壁の北寄りには、南北2.05m、東西0.28mの範囲が、周囲の床面より一段低くなっている部分が検出された。

遺物は、古墳時代後期の土師器、須恵器片が少量出土している。出土遺物は、第88図に示した。1・2は、北武蔵型の土師器坏である。1はカマド内からの出土である。2の内面には細かい暗文が認められる。3は、カマド内から出土した土師器高坏の脚部片である。4は、須恵器壺の口縁部破片で、波状文が僅かに認められる。5・6は、カマド袖の補強材として使用されていた土師器甕である。5が左袖、6が右袖内から出土したもので、本来は完形に近い土器が設置されていたものと考えられる。

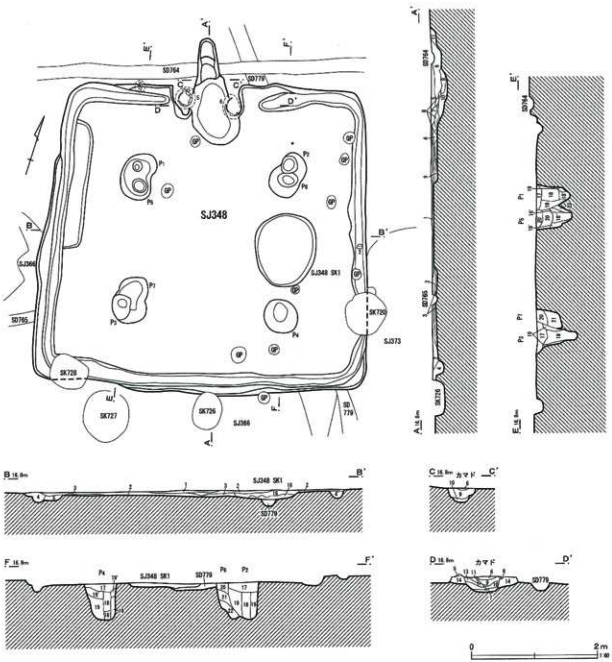
第349号住居跡（第89図）

M－33グリッドで検出された。北側を第334・335号住居跡、南側を第350・351号住居跡と重複しており、大半を壊されていたため、検出できたのが西壁と北壁の一部のみであった。新旧関係は、第334・350・351号住居跡より古く、第335号住居跡との関係は不明であった。

検出された範囲は、南北0.7m、東西2.6m、深さが0.10mで、平面形態は不明である。主軸方位は、N－67°－Eであった。

カマド、柱穴などの付属施設は検出できなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土しているが、図示できるものがなかった。



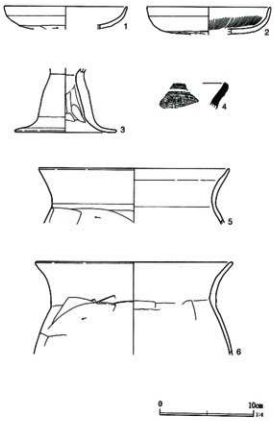
第348号住居跡

1	暗褐灰色土	2.5Y4/2	暗褐灰色のしまりある土　焼土ブロック（φ8mm）斑に含む　暗灰色の灰少量　しまりあり　粘性なし
2	暗黄灰色土	2.5Y4/2	暗黄灰色のしまりある土　しまりあり　粘性なし
3	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土（暗灰色シルト少量含む）・黄褐色土粒子（φ2～3mm）斑に含む　しまりあり　粘性弱い
4	暗茶褐色土	2.5Y3/1	暗茶褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2mm）少量　焼土粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性なし
4'	4層＋炭化物（3mm角）少量		
5	暗褐灰色土	2.5Y3/2	黒褐色のしまりある土（混入物はほとんどみられない）　しまりあり　粘性なし
カマド			
6	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　焼土粒子（φ5mm）含む　炭化物粒子（3mm角）・黄褐色土粒子（φ2～3mm）少量　しまりあり　粘性なし
7	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ10mm）・青色土ブロック（黄褐色土の変色と思われる）（φ10～20mm）斑に含む　しまりあり　粘性なし
8	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土主体（6層と同じ）　焼土ブロック（φ10～15mm）中～多量　炭化物（3mm角）少量　暗灰色の灰少量　しまりあり　粘性なし
9	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土　焼土ブロック（φ10mm）含む　黄褐色土粒子（φ5mm）少量　焼土師器片含む
10	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土主体（6層と同じ）焼土粒子（φ5～10mm）少量　青灰色土ブロック底部近くに斑に微量　しまりあり　粘性ややあり
11	黒色土	10YR2/1	暗灰色の灰主体　黒色の炭・白色の灰・暗褐灰色土少量　しまり・粘性なし
12	黒色土	10YR2/1	黒褐色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ2mm）少～中量　焼土粒子（φ2～5mm）少量　しまりあり　粘性なし
13	黒色土	10YR2/1	暗茶褐色のしまりある土　暗灰色の灰微量　しまりあり　粘性なし
14	黒褐色土	2.5Y3/2	暗茶褐色のしまりある土　焼土粒子（φ2～10mm）斑に含む　黄褐色土粒子（φ5mm）少量　しまりあり　粘性ややあり（カマド袖）
土坑1			
15	黒色土	10YR2/1	暗黒灰色の灰を主体　暗褐灰色のしまりある土少量　焼土粒子（φ3～5mm）含む　炭化物粒子（φ3mm角）少量　しまり・粘性なし
16	暗黄褐灰色土	2.5Y3/2	暗黄褐灰色のしまりある土　黄褐色土粒子（φ5～15mm）多量　焼土粒子（φ2mm）少量　しまりあり　粘性弱い

第86図　第348号住居跡（1）

ピット1～7
17　黒褐色土　　2.5Y3/2　黒褐色のしまりある土　焼土粒子（φ3mm）・炭化物粒子（φ3mm）・黄橙色土ブロック（φ5～10mm）少量　しまりあり　粘性なし
18　暗灰色土　　2.5Y3/1　暗灰色の粘性のある土　青灰色土ブロック(φ5～10mm)中～多量　焼土粒子（φ2mm）少量　炭化物粒子（φ3mm）微量　しまりあり　粘性弱い
18'　オリーブ黒色　10Y3/2　青灰色土ブロック（φ10～20mm）多量　暗灰色粘質土少量　しまりあまりない　粘性強い
18"　18層とほぼ同じ＋青灰色土ブロック（φ5～8mm）含む　炭化物ブロック（φ8mm）少量
19　暗灰色土　　2.5Y3/1　暗灰色のしまりある土　青灰色土ブロック（φ10～30mm）多量　炭化物（φ8mm角）少量　しまりあり　粘性弱い
19'　19層と同じで青灰色土ブロック含む　炭化物含まず
20　暗褐灰色土　10YR3/1　暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ3～10mm)　炭に含む　焼土粒子(φ2mm)・炭化物ブロック(φ6mm)微量　しまりあり　粘性弱い
20'　20層とほぼ同じ＋焼土ブロック（φ5～10mm）含む　炭化物ブロック（φ8mm）少量
21　暗灰色土　　2.5Y3/1　暗灰色のやや粘性のある土　青灰色土ブロック（φ10～20mm）多量　しまりややあり　粘性弱い
22　暗灰色土　　2.5Y3/1　暗灰色粘質土主体　しまりややあり　粘性強い
23　暗褐灰色土　5G4/1　青灰色土ブロック主体　暗緑灰色のやや粘質のある土少量　しまりややあり　粘性弱い

第87図　**第348号住居跡（2）**



第88図　**第348号住居跡出土遺物**

第350号住居跡（第89図）

M－33・34グリッドにかけて検出された。第15・16号方形周溝墓、第335・344・349・351・358・359号住居跡、第53号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は、第351号住居跡、第53号掘立柱建物跡より古く、第15・16号方形周溝墓、第335・344・349・358・359号住居跡より新しかった。本遺構周辺は重複が著しかったため、最初に何本かのトレンチを設定して掘り下げを行ったため、カマドの右袖部分の範囲を壊してしまった。

規模は、南北5.4m、東西5.0m、深さが0.21mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－60°－Eであった。

覆土は、3層からなる自然堆積であった。

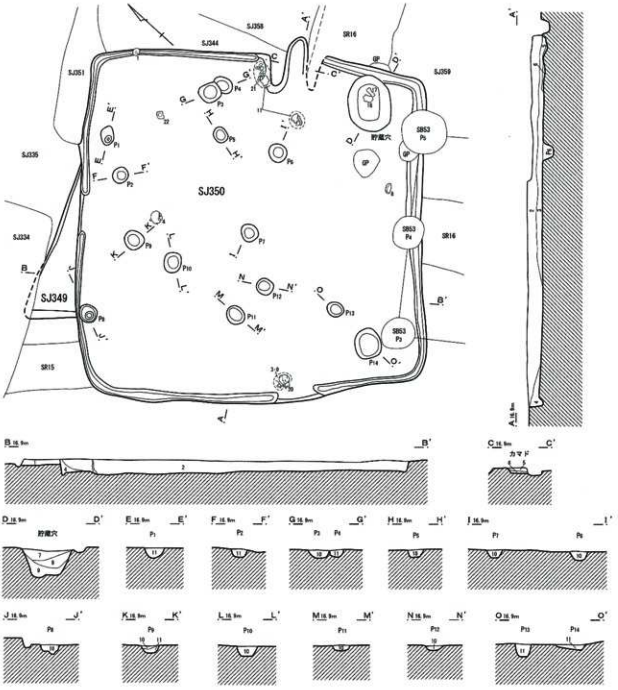
カマドは、東壁のやや南寄りで検出された。右袖はトレンチで壊してしまい、確認できなかった。煙道部が壁外に少し延び、燃焼部は床面とほぼ同じ高さであった。長さ87cm、幅37cm、床面からの深さが11cmであった。覆土の5層は天井部が崩落した層と考えられる。最下層には、薄い灰層を確認することができた。

壁溝は、北壁と西壁の中央部を除いた範囲に巡っており、幅6～25cm、深さが1～6cmであった。壁溝が切れている場所に、住居への出入り口部があった可能性が考えられる。

貯蔵穴は、南東コーナー部で検出された。長軸85cm、短軸68cm、深さが43cmで、平面形態は東西に長い楕円形をしていた。貯蔵穴からは、土師器壺、甕などの遺物が少量出土している。

ピットは14本を検出したが、主柱穴と考えられるものは検出できなかった。配置が不規則で、深さも浅く、その性格は不明である。各ピットの規模は以下のとおりである。P1は31×15cm、P2は27×13cm、P3は35×12cm、P4は32×11cm、P5は25×12cm、P6は30×15cm、P7は29×13cm、P8は30×15cm、P9は32×12cm、P10は32×16cm、P11は30×9cm、P12は25×8cm、P13は26×19cm、P14は46×9cmであった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多量に出土した。第90図13の有段口縁の坏は、黒色処理が施される。23・24は、滑石製の臼玉である。23がP11、24がP9から出土した。



第349号住居跡

1	褐灰色土	10YR5/1	黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　焼土粒子（φ1～2mm）少量

第350号住居跡

2	にぶい黄橙色土	10YR5/3	黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量　焼土ブロック（φ2～5mm）・炭化物ブロック（φ2～5mm）少量　土器片入
3	灰黄褐色土	10YR5/2	黄褐色土ブロック（φ2～10mm）多量　焼土・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
4	褐灰色土	10YR5/1	炭化焼土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～5mm）少量

カマド

5	にぶい黄褐色土	10YR5/4	黄褐色土ブロック（φ2～5mm）・焼土ブロック（φ2～3mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）少量
6	黒褐色土	10YR3/1	灰層　焼土ブロック（φ2～3mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）少量

貯蔵穴

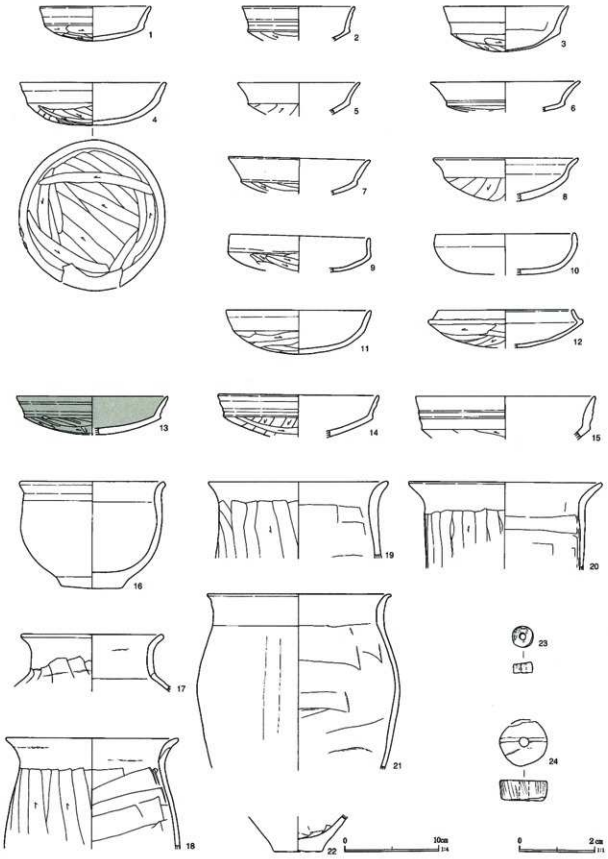
7	褐灰色土	10YR6/1	黄褐色土ブロック（φ2～3mm）多量　焼土・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
8	にぶい黄橙色土	10YR6/4	焼土・炭化物粒子（φ1～5mm）多量　黄褐色土ブロック（φ2～3mm）多量
9	褐灰色土	10YR4/1	炭化物（φ2～5mm）・黄褐色土ブロック（φ2～5mm）・焼土粒子（φ1～2mm）少量

ピット1～14

10	褐灰色土	10YR4/1	炭化物粒子（φ2～3mm）・黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量
11	にぶい黄褐色土	10YR6/3	黄褐色土ブロック（φ2～3mm）多量　焼土粒子（φ2～3mm）少量

0　2m

第89図　第349・350号住居跡



第90図　第350号住居跡出土遺物

第351号住居跡（第91図）

M－33グリッドで検出された。複数の住居跡が複雑に重なっていたため、本住居跡の平面プランを明確にすることができなかった。第335・344・349・350・358号住居跡、第738号土坑と重複しており、本遺構が一番新しかった。

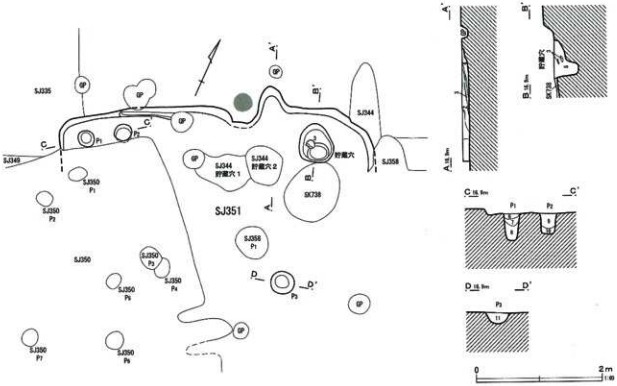
検出された範囲は、南北1.0m以上、東西4.5m、深さが0.07～0.13mで、平面形態は不明であった。主軸方位は、N－34°－Wであった。

カマドは、北壁のやや東寄りで検出された。規模は、長さ51cm、幅43cm、深さが9cmで、燃焼部に掘り込みは検出されなかった。覆土の中位に、薄い灰層を確認できた。カマド左脇の壁外に地山面が赤く被熱した範囲を検出したが、本遺構に伴うものかは判断できなかった。

貯蔵穴は、北東コーナー部で検出された。長軸59cm、短軸54cm、深さが40cmで、平面形態は楕円形をしていた。貯蔵穴内からは、完形に近い土師器坏などが出土している。

ピットは3本を検出した。ピットは浅く、配置も不規則であることから、主柱穴とは考えられない。本住居跡に伴うピットではない可能性もある。規模は、P1が28×43cm、P2が27×34cm、P3が54×17cmであった。

遺物は、古墳時代後期の土師器、須恵器片が少量出土している。第92図1は、須恵器の蓋である。2・3は、北武蔵型の土師器坏である。3・4が、貯蔵穴内から出土した遺物である。



第351号住居跡
1　褐色土　10YR4/4　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～2mm）炭化物粒子（φ2～3mm）少量
カマド
2　にぶい黄褐色土　10YR5/3　黄褐色土ブロック（φ3～5mm）・焼土ブロック（φ2～5mm）多量
3　黒褐色土　10YR3/1　灰を主体に含む（灰層）
4　黒褐色土　10YR3/2　黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ2～3mm）少量
貯蔵穴
5　褐灰色土　10YR5/1　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量
ピット1
6　褐灰色土　10YR5/1　炭化物粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～2mm）微量
7　にぶい黄褐色土　10YR5/3　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～2mm）少量
8　褐灰色土　10YR5/1
ピット2
9　褐灰色土　10YR6/1　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～2mm）少量
10　褐灰色土　10YR6/1　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）少量
ピット3
11　褐灰色土　10YR4/1　焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土粒子（φ1～2mm）少量　炭化物ブロック（φ10～15mm）微量

第91図　第351号住居跡

第92図　**第351号住居跡出土遺物**

第352号住居跡（第93図）

M・N－34グリッドにかけて検出された。第16号方形周溝墓、第368号住居跡、第729号溝跡と重複していた。新旧関係は、第729号溝跡より古く、第368号住居跡より新しかった。床面下からは第16号方形周溝墓の西溝が検出されている。遺構確認面からの深さが浅く、住居跡の残存はあまり良くなかった。

規模は、南北3.5m、東西3.2m、深さが0.08mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－53°－Eであった。

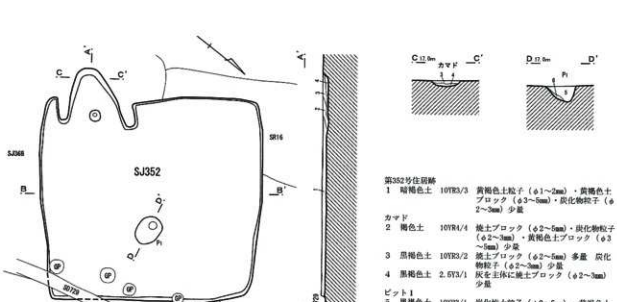
覆土は1層で、自然堆積であった。

カマドは、住居跡南壁の南東コーナー部で検出された。カマド袖は、作り付けの短いもので、あまり熱を受けた様子がなかった。規模は、長さ95cm、幅80cm、深さが8cmで、燃焼部の掘り込みは確認できなかった。ただ、燃焼部の中央には支脚を据えるためのものと考えられる、径16cmの小ピットが検出された。煙道部は壁外に延びていたが、燃焼部との境は明瞭ではなかった。覆土の最下層には、焼土ブロックを含んだ灰層が確認できた。

壁溝、貯蔵穴などの施設は検出できなかった。

ピットは、住居跡の中央やや北寄りの位置で1本を検出した。P1の規模は47×25cmで、平面形態は楕円形をしていた。形態や覆土の状態から柱穴である可能性は低い。

遺物は、古墳時代後期の甕、模倣坏片などの土師器片が少量出土しているが、図示できる遺物はなかった。



第93図　**第352号住居跡**

第353号住居跡（第94図）

L・M－34グリッドにかけて検出された。第15号方形周溝墓、第345号住居跡、第753号土坑、第762号溝跡と重複していた。新旧関係は、第15号方形周溝墓より新しく、第762号溝跡より古かった。第345号住居跡とは南壁と西壁を全く同じくしていたことから、本住居跡は第345号住居跡の拡張前のものであった。

規模は、南北3.5m、東西2.5m以上、深さが0.10mで、平面形態は正方形をしていたと思われる。主軸方位は、N－7°－Eであった。

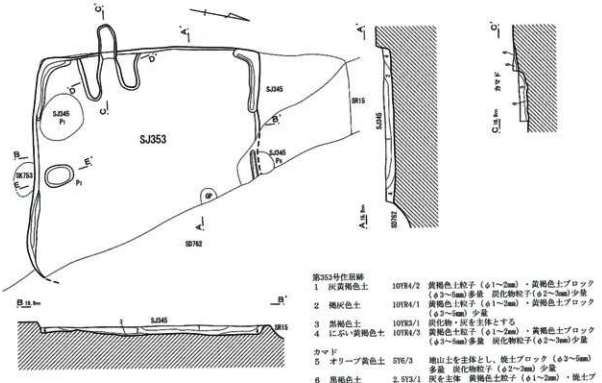
覆土は、4層からなる自然堆積であった。カマドの東には、炭化物・灰を主体とする層が認められた。

カマドは、住居跡西壁の南寄りで検出された。拡張後の第345号住居跡ではカマドが検出されていない。カマド袖は地山削り出しであった。燃焼部は、東西68cm、南北38cmで、床面からの掘り込みは確認できなかった。煙道部は壁外に短く延びており、長さ43cm、幅26cm、深さが8cmであった。覆土の5層は、天井部が崩落した層と考えられる。

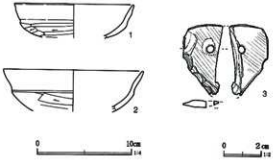
壁溝は、住居跡のコーナー部などで部分的に巡り、幅13～24cm、深さが2～7cmであった。

ピットは南壁際で1本のみが検出された。P1の規模は45×3cmで、平面形態は南北に長い楕円形をしていた。深さが浅いことから、柱穴とは考えられず、性格については不明である。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土している。出土遺物は、第95図に示した。1・2は、土師器の模倣坏である。3は、滑石製模造品である。欠損部分が多いため、全体の形状が不明である。



第94図　第353号住居跡



第95図　**第353号住居跡出土遺物**

第354号住居跡　　欠番

第355号住居跡（第96図）

N－34グリッドの第16号方形周溝墓の方台部内で検出された。第346・347・360・362・364・370号住居跡と重複していた。第347号住居跡の床面下から検出されたため、壁溝のみが確認できた。同じ軸方向をもち、壁も共通する部分がみられたことから、本住居跡は第347号住居跡の拡張前のものである可能性が高い。重複する遺構との新旧関係は、不明な点が多い。

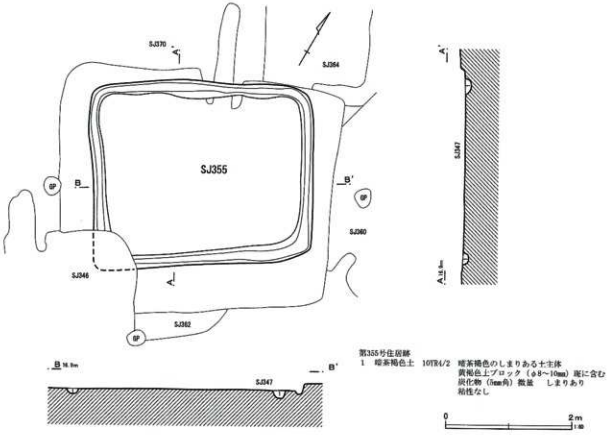
規模は、南北3.0m、東西3.6mで、平面形態は東西にやや長い方形をしていた。主軸方位は、N－22°－Wであった。

壁溝は、全周しており、幅15～30cm、深さが7～10cmであった。

カマド、ピットなどの施設は検出できなかった。

ただ、第347号住居跡のカマドの覆土には、2面の薄い灰層が確認されている。そのことから、拡張前の本住居跡も、北壁の同じ位置にあるカマドを使用していた可能性が考えられる。

遺物は、古墳時代後期の模倣坏、高坏、甕などの土師器片が少量出土しているが、図示できるものがなかった。



第96図　**第355号住居跡**

第356号住居跡（第97図）

O－33・34グリッドにかけて検出された。第340・361・367・390号住居跡、第706・707・711号土坑、第779号溝跡と重複していた。新旧関係は、第361号住居跡より新しく、第340号住居跡、第706・707・711号土坑、第779号溝跡より古かった。

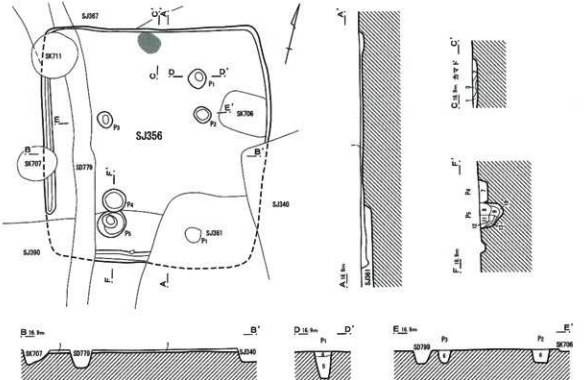
規模は、南北3.7m、東西3.6m、深さが0.04～0.09mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－14°－Wであった。

カマドは、北壁の中央で検出されたが、残りが悪く、全体の形状は不明であった。僅かに床面が赤く焼けた径約40cmの範囲を確認できたにとどまった。

壁溝は、南壁と西壁に部分的に巡っており、幅13～19cm、深さが4cmであった。

ピットは5本を検出した。配置だけでみるとP2・3・5が主柱穴の可能性が考えられるが、覆土が異なるため詳細は不明である。各ピットの規模は、P1が29×42cm、P2が26×22cm、P3が26×20cm、P4が37×14cm、P5が43×37cmであった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

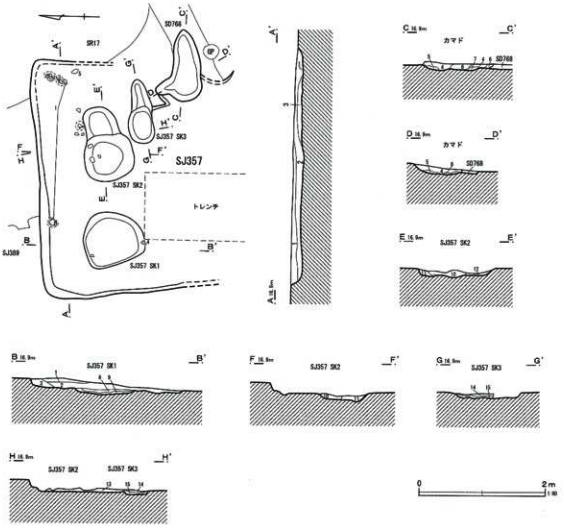


第356号住居跡

カマド			
1	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある土　青灰色土ブロック（φ1mm）多量　しまりあり　粘性なし
2	黒褐色土	2.5Y3/1	しまりある黒褐色土　焼土粒子（φ5～10mm）中～多量　暗灰色土の灰層下部に巻状に含む　しまりあり　粘性なし
3	暗茶褐色土	2.5Y3/2	暗茶褐色のしまりある土　焼土粒子（φ2～5mm）少量　しまりあり　粘性なし
ピット1			
4	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある土　青黄色土ブロック（φ10～15mm）斑に含む　焼土ブロック（φ5mm）微量　しまりあり　粘性なし
5	黒褐色土	2.5Y3/1	黒褐色のしまりある土　青黄色土ブロック（φ10～30mm）多量　しまりあり　粘性ややあり
ピット2・3			
6	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある土　青黄灰色土粒子（φ1mm）少量　しまりあり　粘性ややあり
ピット4			
7	灰オリーブ色土	1.5Y4/2	灰オリーブ色土主体　鉄土ブロック（φ15～20mm）少量　北側から17cm上部に土器を含む　粘性ややあり
ピット5			
8	黒褐色土	10YR3/2	黒褐色土主体　黄灰色土粒子（φ5mm）・焼土粒子（φ2～5mm）少量　粘性ややあり
9	黒褐色土	10YR2/2	黒褐色土主体　灰オリーブ色土ブロック（φ10～20mm）・焼土ブロック（φ2～10mm）少量　しまり・粘性あり
10	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色粘土　粘性強い
11	黒褐色土	10YR3/2	黒褐色土主体　黄灰色土粒子（φ2～10mm）・焼土粒子（φ2～5mm）・炭化物粒子（φ2～5mm）少量　粘性ややあり
12	黒褐色土	10YR3/2	黒褐色土主体　焼土粒子（φ1～10mm）・炭化物ブロック（φ5～10mm）少量　しまり・粘性あり
13	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色土主体　灰オリーブ色土ブロック（φ15～20mm）少量　しまり・粘性あり

0　2m

第97図　**第356号住居跡**



第357号住居跡

1　黒灰色土　2.5Y3/1　黒灰色のしまりある土主体　焼土ブロック（φ5～10mm）少量　炭化物粒子（3mm）微量　しまりあり　粘性なし

2　暗黒灰色土　2.5Y3/1　1層より　濃い黒灰色のしまりある土主体　焼土粒子（φ5～5mm）含む　炭化物粒子（φ3～5mm）・青褐灰色土粒子（φ2～5mm）少量　層の下の方に集中して存在　しまりあり　粘性ややあり

3　黒褐色土　2.5Y2/1　黒褐色のやや粘性のある土主体　焼土粒子（φ2mm）・青褐灰色土粒子（φ5mm）・炭化物粒子（φ2mm）少量　層の下の方に斑に存在　しまりあり　粘性ややあり

カマド

4　黒褐色土　10YR3/2　黄褐色土粒子（φ1mm）均等に少量　しまり・粘性あり

5　暗褐色土　10YR3/3　黄褐色土粒子（φ1～5mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・焼土粒子（φ1～2mm）少量　しまり・粘性あり

6　黒褐色土　10YR3/2　1層土層中に焼土粒子（φ1～10mm）・焼土ブロック多量　炭化物粒子（φ1～5mm）少量　しまりあり　粘性ややあり

7　黒色土　10YR1.7/1　炭化物及び灰を主体とする　しまりなし

土坑1

8　黒褐色土　5Y2/1　黒褐色（灰色がかった）のやや粘性のある土　青褐灰色土ブロック（φ10～30mm）・焼土粒子（φ5mm）少量　しまりあり　粘性ややあり

9　黒灰色土　2.5Y2/1　黒灰色の灰主体　焼土粒子（φ2～5mm）・青褐灰色土ブロック（φ10～20mm）少量　しまり・粘性ややあり

土坑2

10　黒褐色土　10YR3/1　黄褐色土粒子（φ1～5mm）・焼土粒子（φ1mm）・炭化物粒子（φ1mm）微量　しまり・粘性あり

11　黒褐色土　2.5Y3/1　黄褐色土粒子（φ1～10mm）多量　しまり・粘性あり

12　黄灰色土　2.5Y4/1　黄褐色土をブロック状に均等に含む　しまり・粘性あり

13　褐灰色土　10YR4/1　暗灰色の粘性のややある土　青褐灰色土ブロック（φ5～10mm）中～多量　焼土ブロック（φ3～5mm）層上部に斑に含む　黒灰色の灰少量　しまりあり　粘性ややあり

土坑3

14　黒色土　10YR2/1　黒灰色の灰層　焼土ブロック（φ5～10mm）微量　しまり・粘性なし

15　黄褐灰色土　2.5Y4/2　黄褐灰色の粘性のややある土　黒灰色の灰少量　しまりあり　粘性弱い

第98図　第357号住居跡

第357号住居跡（第98図）

N・O－35グリッドの谷の落ち際で検出されたため、平面プランを確認することが難しかった。第17号方形周溝墓、第389号住居跡、第768号溝跡と重複していた。第17号方形周溝墓、第768号溝跡は、床面下から検出されたことから、本遺構の方が新しいことがわかった。北西部で重複する第389号住居跡との新旧関係は不明である。

確認できた規模は、南北3.4m、東西3.7m、深さが0.13mで、平面形態は不明であった。主軸方位は、N－86°－Wであった。

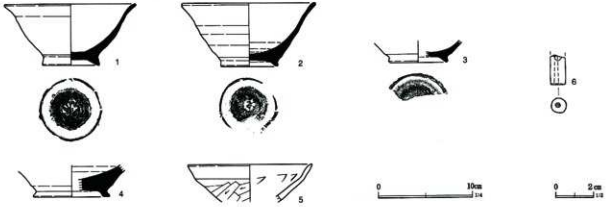
カマドは、住居跡の東壁で検出された。覆土の最下層で灰層が検出されたことから、カマドと判断した。残りが悪く、全体の形状は不明である。東西110cm、南北55cm、深さが13cmであった。

住居跡内からは浅い掘り込みの土坑が3基検出された。土坑1は、長軸95cm、短軸85cm、深さが9cmで、平面形態は楕円形をしていた。覆土下層には、黒灰色の灰を主体とした層が確認された。土坑2は、長軸117cm、短軸78cm、深さが11cmで、平面形態は楕円形をしていた。土坑3は、長軸100cm、短軸40cm、深さが9cmで、平面形態は不整形をしていた。

土坑2・3には黒灰色の灰が少量堆積していた。3基全てに灰が含まれる共通性が認められるが、平面形態が異なり、性格については不明である。本遺構に伴う遺構であるかも疑問は残る。

壁溝、ピットなどのカマド以外の施設は検出できなかった。

遺物は、北壁際で平安時代の須恵器片などが少量出土している。1～3は、須恵器の高台付埦である。1は、内外面ともにロクロ目が不明瞭である。4は、土坑1から出土した高台付壺の底部片である。1～4の4点とも、胎土に黒色粒子を含む。5は、土師器の坏である。6は、土坑2から出土した管玉である。本住居跡に伴う遺物ではなく、混入品である可能性が高い。



第99図　**第357号住居跡出土遺物**

第358号住居跡（第100図）

M・N－33グリッドにかけて検出された。第16号方形周溝墓北溝、第344・350・351・359号住居跡、第729号溝跡、第712・738号土坑と重複していた。新旧関係は、第16号方形周溝墓、第344号住居跡より新しく、第350・351・359号住居跡、第729号溝跡、第712号土坑より古かった。

規模は、南北5.6m、東西4.5m、深さが0.01～0.03mで、平面形態は南北に長い長方形をしていた。主軸方位は、N－21°－Wであった。

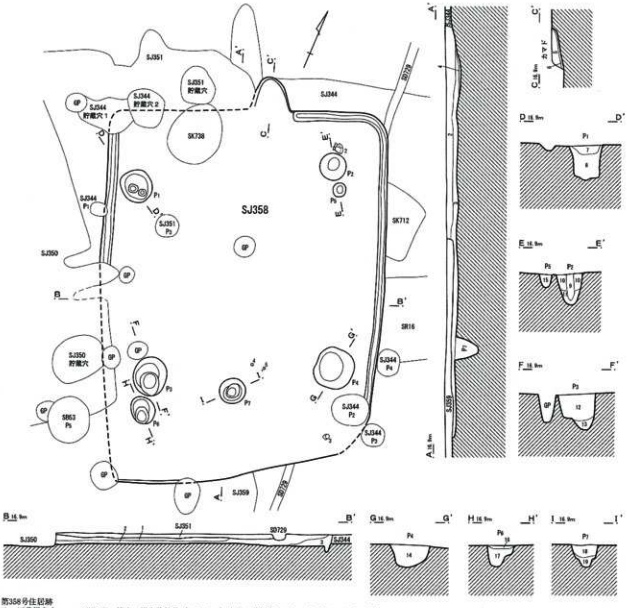
覆土は、4層からなる自然堆積であった。カマドの西では、炭化物を主体とする層が認められた。

カマドは、北壁にやや東寄りで検出された。規模は、長さ57cm、幅52cm、深さが3cmであった。カマドの袖は確認することができなかった。

壁溝は、東西の壁で部分的に巡り、幅12～18cm、深さが3～8cmであった。

ピットは7本を検出した。ピットの配置から、P1～4が主柱穴の可能性が高い。P2のみ柱材の痕跡を確認することができた。規模は、P1が52×52cm、P2が43×50cm、P3が61×59cm、P4が64×35cm、P5が23×24cm、P6が45×31cm、P7が41×34cmであった。

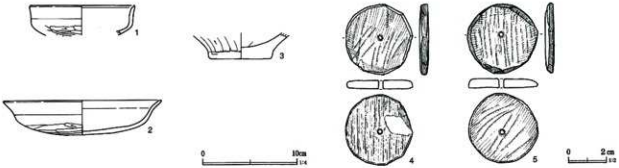
遺物は、南壁寄りで第101図4・5の有孔円板が2点出土している。他に、古墳時代後期の土師器坏、甕片が少量出土した。



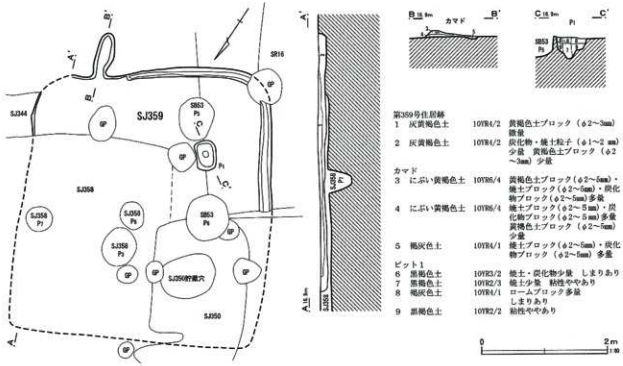
第358号住居跡

1	灰黄褐色土	10YR4/2	焼土・炭化物粒子（φ1～2mm）少量　黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量
2	灰黄褐色土	10YR5/2	焼土・炭化物粒子（φ2～3mm）少量　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）少量
3	灰黄褐色土	10YR5/2	黄褐色土ブロック（φ2～10mm）多量　焼土・炭化物粒子（φ1～2mm）少量
4	黒褐色土	10YR3/1	炭化物層　焼土粒子（φ1～3mm）少量　黄褐色土ブロック（φ2～5mm）微量
カマド			
5	褐灰色土	10YR4/1	焼土粒子（φ1～2mm）多量　炭化物粒子（φ1～2mm）・黄褐色土粒子（φ1～2mm）少量
6	黒色土	10YR2/1	灰層　焼土粒子（φ1～2mm）多量
ピット1			
7	褐灰色土	10YR5/1	黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量　焼土粒子（φ2～5mm）・炭化粒子（φ2～5mm）少量
8	灰黄褐色土	10YR6/2	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量
ピット2			
9	にぶい黄橙色土	10YR6/3	黄褐色土ブロック（φ5mm）多量　焼土粒子（φ2～3mm）・炭化物粒子（φ2～3mm）少量
10	褐灰色土	10YR5/1	黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　焼土粒子（φ2～3mm）少量
11	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量
ピット3			
12	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土ブロック(φ2～10mm)多量　焼土粒子(φ1～2mm)・焼土ブロック(φ3～5mm)・炭化物粒子(φ1～2mm)・炭化物ブロック(φ3～5mm)少量
13	褐灰色土	10YR4/1	焼土粒子（φ1～2mm）・焼土ブロック（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）・炭化物ブロック（φ3～5mm）少量
ピット4			
14	褐灰色土	10YR4/1	黄褐色土ブロック(φ2～10mm)多量　焼土粒子(φ1～2mm)・焼土ブロック(φ3～5mm)・炭化物粒子(φ1～2mm)・炭化物ブロック(φ3～5mm)少量
ピット5			
15	褐灰色土	10YR5/1	焼土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ2～3mm）少量
ピット6			
16	褐灰色土	10YR4/1	焼土粒子（φ2～3mm）・炭化物粒子（φ2～3mm）少量
17	にぶい黄橙色土	10YR6/3	黄褐色土ブロック（φ2～5mm）多量　焼土ブロック（φ2～3mm）少量
ピット7			
18	灰黄褐色土	10YR5/2	焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ1～2mm）焼土ブロック（φ3～5mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）少量
19	黒褐色土	10YR3/1	焼土ブロック（φ2～5mm）・炭化物ブロック（φ2～5mm）・黄褐色土ブロック（φ2～5mm）少量

第100図　第358号住居跡



第101図　第358号住居跡出土遺物



第102図　第359号住居跡

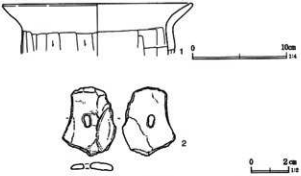
第359号住居跡（第102図）

M・N－33・34グリッドにかけて検出された。第16号方形周溝墓、第344・350・358号住居跡、第53号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は、第350号住居跡、第53号掘立柱建物跡より古く、第16号方形周溝墓、第344・358号住居跡より新しかった。

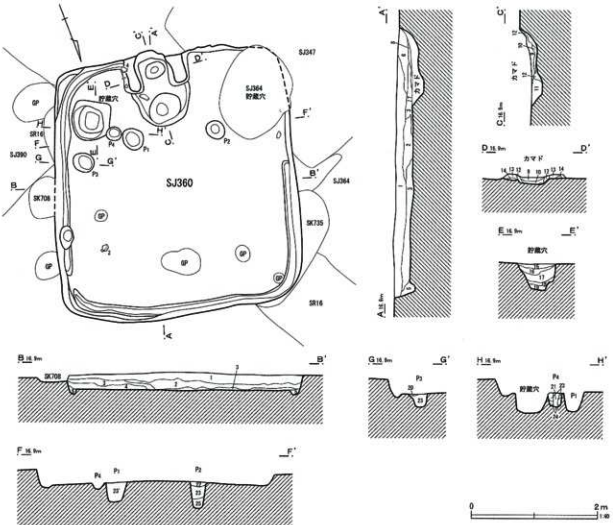
規模は、南北4.1m、東西3.8m、深さが0.10mで、平面形態は方形をしていた。主軸方位は、N－22°－Wであった。

覆土は、2層からなる自然堆積であった。

カマドは、南壁の西寄りで検出された。袖は確認できなかった。煙道部は壁外に細く延び、長さ67cm、幅28cm、深さが5cmであった。



第103図　第359号住居跡出土遺物



第360号住居跡

1	黒褐色土	10YR3/2	茶褐色のしまりある土 黄褐色土ブロック（φ5～20mm）含む 灰色シルト（φ20～30mm）少～中量 焼土ブロック（φ5mm）少量 しまりあり 粘性なし
2	褐灰色土	10YR4/1	茶色がかった暗灰色土40% 焼土ブロック（φ3～30mm）多量 白っぽい灰色に含む しまりあり 粘性なし
3	茶褐色土	10YR4/2	茶褐色のしまりある土 黄褐色土ブロック（φ20～50mm）斑に含む（1層より多い）しまりあり 粘性弱い
4	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色の粘性のある土（1・2層より少し暗い）黄褐色土粒子（φ1mm）少量 しまりあり 粘性ややあり
5	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土 黄褐色土粒子（φ1mm）少量 しまりあり 粘性ややあり
カマド			
6	暗褐灰色土	10YR4/2	暗褐灰色のしまりある土 灰色シルト含む 焼土粒子（φ2mm）少量 黄褐色土ブロック（φ10mm）微量 しまりあり 粘性なし
7	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色土20% 焼土ブロック（φ5～20mm）多量 灰色の灰中～多量 炭化物ブロック（φ5mm）少量 しまり・粘性なし
8	黒褐色土	10YR3/1	灰色の灰中～多量 焼土ブロック（φ5～20mm）斑に含む 黒褐色のやや しまりのある土少量 しまりややあり 粘性なし
9	茶褐色土	10YR4/2	暗茶褐色のしまりある土 暗灰色の灰少量 焼土粒子（φ2mm）微量 しまりあり 粘性なし 奈7層に対応
10	暗褐灰色土	10YR4/2	暗褐灰色のしまりある土 暗灰色の灰多量 焼土粒子（φ2mm）少量 しまりあり 粘性なし 第7層に対応
11	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土 暗灰色の灰少量 黄褐色土粒子（φ2mm）少量 しまりあり 粘性なし
12	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりのやわらか 暗灰色の灰多量 しまりややあり 粘性なし ※8層に対応
13	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土 黄褐色土ブロック（φ5～10mm）少量 焼土（φ2～20mm）微量 しまりあり 粘性なし
14	暗灰黄色土	2.5Y4/2	暗黄褐色土主体の土 しまりあり 粘性強い
貯蔵穴			
15	にぶい黄褐色土	10YR5/3	にぶい黄褐色の土を主体 浅黄橙色土ブロック（φ5～30mm）・炭化物・褐灰色粘土ブロック（φ10mm）少量 焼土粒子（φ2～10mm）微量 しまりあり 粘性なし
16	褐灰色土	10YR6/1	焼土粒子（φ2～10mm）・炭化物粒子（φ1～20mm）中～多量 しまり弱い 粘性ややあり
17	にぶい黄褐色土	10YR5/4	にぶい黄褐色土主体 焼土ブロック（φ1～15mm）少～中量 褐灰色粘土少量 しまりあり 粘性ややあり
18	褐灰色土	10YR5/1	褐灰色の土を主体 炭化物ブロック（φ5～10mm）微量 浅黄橙色土ブロック（φ5～10mm）微量 しまり弱い 粘性あり
19	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色の土を主体 焼土ブロック（φ5～10mm）微量 しまり弱い 粘性あり
ピット1～4			
20	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土 暗灰色の灰帯状に含む 焼土ブロック（φ10mm）少～中量 しまりあり 粘性なし
21	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土 焼土ブロック（φ10～20mm）中～多量 層上部に集 しまりあり 粘性なし
22	褐灰色土	10YR4/1	茶色がかった暗灰色のしまりある土 焼土ブロック（φ5～20mm）斑に含む しまりあり 粘性なし
23	褐灰色土	10YR4/1	茶色がかった暗灰色のしまりある土 黄褐色土粒子（φ2～5mm）斑に含む 炭化物（15mm角）微量 しまりあり 粘性ややあり
23'	23層と同じで炭化物含まず		
24	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色のしまりある土 青灰色土粒子（φ1mm）少量 しまりあり 粘性強い
25	灰色土	N4/1	粘性の強い灰色粘土 黄褐色土粒子（φ5mm）少量 しまり弱い 粘性強い

第104図　第360号住居跡

壁溝は、南西コーナー部で検出され、他の範囲は不明であった。幅9～20cm、深さ5～7cmであった。

ピットは1本を検出した。P1は46×34cmで、土層断面に柱材の痕跡を確認することができた。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土している。第103図2は、滑石製の有孔円板である。

第360号住居跡（第104図）

N・O－33・34グリッドにかけて検出された。第16号方形周溝墓、第347・364・390号住居跡、第708・735号土坑と重複していた。新旧関係は、第16号方形周溝墓、第364号住居跡より新しく、第347号住居跡、第708・735号土坑より古かった。南東部で重複していた第390号住居跡との新旧関係は不明である。

規模は、南北4.1m、東西3.9m、深さが0.19～0.26mで、平面形態は正方形をしていた。主軸方位は、N－7°－Eであった。

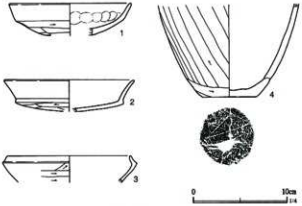
カマドは、住居跡南壁の中央部で検出された。カマド袖は短く、暗茶褐色のしまりある土で構築されていた。燃焼部は、南北121cm、東西88cm、深さが15cmで、焚き口部分に半円形の大きな掘り込みをもっていた。壁外に延びる煙道部は検出できなかった。

壁溝は、南西コーナー部を除いてほぼ全周し、幅14～25cm、深さが3～7cmであった。

貯蔵穴は、南東コーナー部で検出された。長軸61cm、短軸59cm、深さが43cmで、平面形態は円形をしていた。

ピットは4本を検出した。P1・2は、配置から主柱穴の可能性が考えられる。P4の土層断面では、柱材の痕跡を確認することができた。各ピットの規模は、P1が36×32cm、P2が31×43cm、P3が34×19cm、P4が22×23cmで、平面形態は円形をしていた。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。第105図1・4はカマド内から出土している。4は土師器甕で、底面に木葉痕が残る。



第105図　**第360号住居跡出土遺物**

第361号住居跡（第107図）

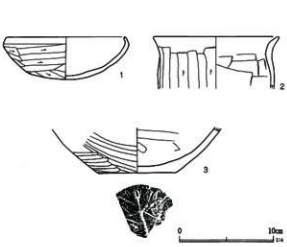
O－34グリッドで検出された。第17号方形周溝墓、第340・356・390号住居跡、第717号土坑、第766号溝跡と重複していた。新旧関係は、第17号方形周溝墓より新しく、第340・356号住居跡、第717号土坑、第766号溝跡より古かった。

規模は、南北4.8m、東西3.4m以上、深さが0.09mで、平面形態は方形をしていたと思われる。主軸方位は、N－2°－Wであった。

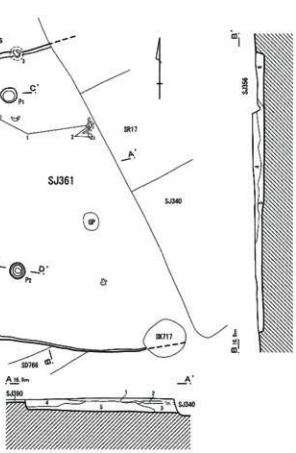
カマド、壁溝は検出できなかった。

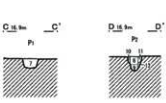
ピットは西壁寄りで2本を検出した。P2の土層断面には、柱材の痕跡を検出した。規模は、P1が25×15cm、P2が25×24cmであった。

出土遺物は、第106図に示した。1は、ほぼ完形の北武蔵型の土師器坏である。3は、土師器甕の底部で、底面に木葉痕が認められる。



第106図　**第361号住居跡出土遺物**





第361号住居跡

1	灰色土	2.5Y4/1	灰色のあまりしまりのない土　灰色の灰砂に含む　焼土粒子(φ3~10mm)少~中量　しまり・粘性なし
2	灰層		
3	黒褐色土	2.5Y3/2	黒褐色のしまりある土　焼土ブロック(φ5mm)・青灰色土粒子(φ1mm)少量　炭化物粒子(φ3mm)微量　しまりあり　粘性なし
4	黒褐色土	2.5Y3/1	黒褐色のしまりある土　焼土粒子(2~10mm)含む　青黄色土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ3mm)微量　しまりあり　粘性なし
5	黒褐色土	2.5Y3/2	青灰色土ブロック(φ10~30mm)斑に含む　しまりあり　粘性なし
6	黒褐色土	2.5Y3/1	青灰色土ブロック(φ20~50mm)多量　しまりあり　粘性ややあり
ピット1			
7	暗灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ10~30mm)少量　しまりあり　粘性ややあり
ピット2			
8	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある土　青灰色土粒子(φ5mm)斑に含む　炭化物粒子・焼土粒子(φ2mm)微量　しまりあり　粘性なし
9	黒褐色土	2.5Y3/1	8層より暗い黒褐色の粘性ある土　しまりややあり　粘性強い
10	灰オリーブ色土	5Y4/2	青灰色土主体　灰色土少量　しまりあり　粘性なし
11	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある土　暗灰色土粒子(φ5mm)少量　しまりあり　粘性弱い
12	11層と18層間にて青灰色土粒子が11層より少し多い		

第107図　第361号住居跡

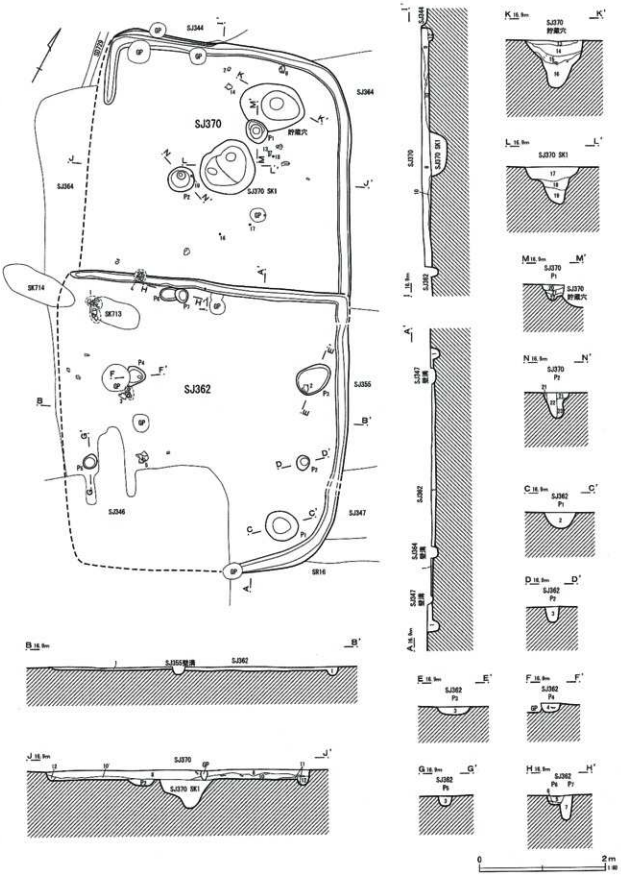
第362号住居跡

1	灰黄褐色土	10YR4/2	暗褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ10mm)斑に含む　焼土粒子(φ2mm)微量　しまりあり　粘性なし
ピット1			
2	灰色土	10YR4/1	灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ20~30mm)多量　しまりあり　粘性ややあり
ピット2・3・5			
3	黒褐色土	10YR3/1	黒褐色の粘性のややある土主体　黄褐色土粒子(φ2~5mm)多量　しまりあり　粘性ややあり
ピット4			
4	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色のしまりある土主体　黄褐色土粒子(φ2~5mm)しまりあり　粘性ややあり
ピット6			
5	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色のしまりある土　黄褐灰色土ブロック(φ5~15mm)斑に含む　しまりあり　粘性なし
6	褐灰色土	10YR4/1	5層より濃い褐灰色土で粘性のややある土　しまりあり　粘性ややあり
ピット7			
7	褐灰色土	10YR4/1	褐灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ5~15mm)少量

第370号住居跡

8	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ10mm)少量　焼土粒子(φ2mm)微量　炭化物(10mm長)微量　しまりあり　粘性なし
9	暗灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　焼土粒子(φ3~10mm)・黄褐色土ブロック(φ5~10mm)含む　炭化物粒子(φ3mm)少量　暗灰色の灰微量　しまりあり　粘性なし
10	茶褐灰色土	10YR4/2	茶褐灰色のしまりある土　黄褐色土粒子(φ5~20mm)斑に含む　しまりあり　粘性なし
10'	黒褐色土	10YR3/2	黒褐色に近い暗茶褐色のしまりある土　10層に同じ　ローム粒子(φ3mm)しまりあり　粘性なし
11	褐灰色土	10YR5/1	暗灰色の粘性のややある土　灰色土粒子(φ1mm)少量　しまりあり　粘性弱い
12	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　灰色土粒子(φ2mm)・黄褐色土粒子(φ5~10mm)少量　しまりあり　粘性なし
貯蔵穴			
13	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土　炭化物(長:10mm×3mm棒状)層下部に含む　黄褐色土粒子(φ1~5mm)斑に含む　しまりあり　粘性なし
14	茶褐色土	10YR4/2	13層より明るい暗茶褐色で粘性のややある土　灰色シルト少量　焼土粒子(φ2~10mm)少量　黄褐色土粒子(φ5mm)中~多量　灰色土層下部に帯状に少量　しまりあり　粘性ややあり
15	黄褐色土	10YR4/3	黄褐色のシルト質土　暗茶褐色の粘性のややある(50%ずつ)焼土ブロック(φ5~10mm)少量　しまりややあり　粘性弱い
16	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色の粘質土　灰色シルト多量　焼土ブロック(φ10mm)微量　しまりなし　粘性強い
土坑1			
17	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色のしまりある土　灰色土粒子(φ1mm)少~中量　灰色土ブロック(φ10~50mm)微量　鉄化鉄少量　しまりあり　粘性なし
18	暗灰色土	2.5Y4/1	暗灰色の粘性のややある土　灰色土粒子(φ3~5mm)少~中量　炭化物(10mm長)層下部に帯状に少量　焼土粒子(φ3mm)微量　しまりあり　粘性弱い
19	暗灰色土	2.5Y4/1	18層よりも明るめの暗灰色土でやや粘性のある土　黄褐色土ブロック(φ10mm)中~多量　灰色粘質土斑に含む　しまりあり　粘性ややあり(18層より強)
ピット1・2			
20	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土　炭色土粒子(φ2mm)少量　しまりあり　粘性なし
21	黒褐色土	10YR3/2	暗茶褐色のしまりある土　黄褐色土粒子(φ2~5mm)斑に含む　炭化物粒子(φ3mm)層下部にまとまって少量　しまりあり　粘性なし
22	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色のしまりある土　黄褐色土ブロック(φ5~10mm)多量　しまりあり　粘性弱い
23	褐灰色土	10YR4/1	暗灰色粘土　灰色土粒子(φ2mm)少量　しまり強い　粘性あり

第108図　第362・370号住居跡（1）



第109図　第362・370号住居跡（2）

第362号住居跡（第108・109図）

N－34グリッドで検出された。第16号方形周溝墓、第346・347・355・364・370号住居跡、第713・714号土坑と重複していた。新旧関係は、第16号方形周溝墓、第364・370号住居跡より新しく、第346・347号住居跡、第713号土坑より古かった。第355号住居跡、第714号土坑との関係は不明である。

規模は、南北4.5m、東西4.7m、深さが0.03～0.05mで、平面形態はほぼ正方形をしていた。主軸方位は、N－25°－Wであった。

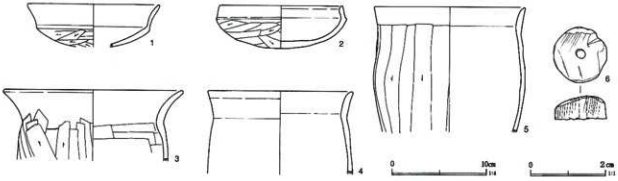
覆土は、1層からなる自然堆積であった。

カマド、貯蔵穴は検出できなかった。

壁溝は、遺構の残りが良かった北壁と東壁で巡っており、その他の範囲は不明であった。幅13～21cm、深さは5～9cmであった。

ピットは7本を検出した。何れのピットも形状がまちまちであり、深さも浅く、性格については不明である。各ピットの規模は、P1が52×25cm、P2が24×24cm、P3が58×13cm、P4が29×15cm、P5が25×15cm、P6が28×15cm、P7が24×39cmであった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土している。第110図1・2は模倣坏、3は甕、4・5は甑である。6は、ほぼ完形の滑石製の臼玉である。



第110図　**第362号住居跡出土遺物**

第363号住居跡（第111・112図）

K・L－34グリッドにかけて検出された。第674・745・748・753号溝跡、第741号土坑と重複していた。新旧関係は、第674・745・753号溝跡、第741号土坑より古く、第748号溝跡より新しかった。

規模は、南北5.5m、東西5.5m、深さが0.22mで、平面形態は整った正方形をしていた。主軸方位は、N－85°－Eであった。

覆土は、2層からなる自然堆積であった。

カマドは、住居跡東壁のやや南寄りで検出された。カマド袖は短く、作り付けであった。燃焼部は、東西78cm、南北45cm、深さが3cmで、浅い楕円形の掘り込みをしていた。掘り込みの立ち上がり部からは、口縁部を下に向けた状態の高坏が出土しており、支脚に転用されたものと考えられる。壁外に延びる煙道部は検出できなかった。カマド前面の焚き口部分に当たる床面には、赤く被熱した範囲を確認できた。底面には焼土ブロックを多量に含んだ薄い灰層が堆積していた。

壁溝は、後世の溝で壊された範囲を除き、ほぼ全周していた。規模は幅7～21cm、深さが5～9cmで、全体的に幅狭であった。

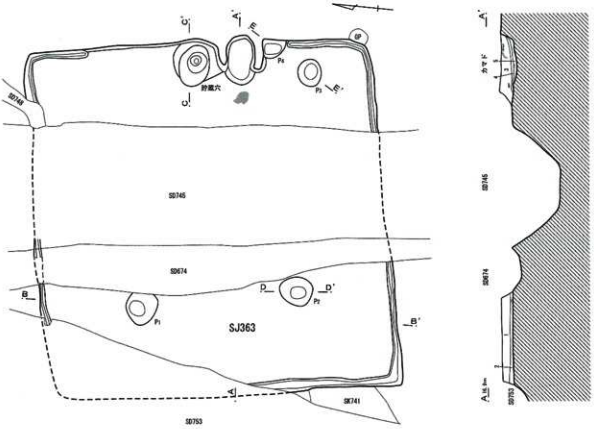
貯蔵穴は、カマド左袖脇で検出された。規模は、長軸70cm、短軸48cm、深さが39cmで、平面形態は東西に長い楕円形をしていた。覆土上層の6層には、カマドから流れ込んだ灰が多量に堆積していた。また、同じ層から完形の甕など多量の土師器片が出土している。

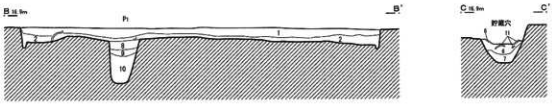
ピットは4本を検出した。配置からP1・2の2本は主柱穴の可能性が高い。北側の2本は、中世の溝跡に壊されていたため検出できなかった。各柱穴の規模は、P1が50×78cm、P2が52×44cmで、土層断

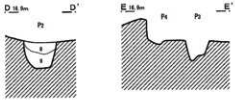
面には柱材の痕跡を確認できなかった。P3・4は、住居跡の南東隅で検出され、土器がそれぞれ出土した。P3内からは、ほぼ完形の甕が潰れた状態で、P4内からは、小型の甕と甑がセットになった状態で出土している。規模は、P3が43×32cm、P4が35×7cmであった。

遺物は、カマド周辺と南西コーナー付近から土師器の甕などがまとまって出土している。

第113図1～5は、土師器の高坏である。1は、胎土に白色針状物質を含み、内外面に赤彩が施される。







第363号住居跡

1	橙褐色土	10YR3/3	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量
2	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ1～3mm）少量

カマド

3	褐灰色土	10YR5/1	黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量　焼土ブロック（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ2～3mm）少量
4	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土ブロック（φ3～5mm）・焼土粒子（φ1～2mm）・炭化物粒子（φ2～3mm）少量
5	灰色土	N4/0	灰を主体　焼土ブロック（φ2～3mm）多量

貯蔵穴

6	黒褐色土	10YR3/1	灰・鉄分多量　黄褐色土ブロック（φ3～10mm）少量
7	暗褐色土	10YR3/3	鉄分・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）多量

ピット1・2

8	黒褐色土	10YR3/2	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～10mm）多量
9	黒褐色土	10YR2/2	黄褐色土粒子（φ1～2mm）・黄褐色土ブロック（φ3～5mm）・炭化物粒子（φ2～5mm）少量
10	黒褐色土	2.5Y3/1	黄褐色土ブロック（φ3～5mm）少量

第111図　第363号住居跡